雨花の花嫁

屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨花の花嫁

【Nコード】

N5809T

【作者名】

蜃

【あらすじ】

長年の恋に終止符を打った雨女の水紀^{みずき}。ぼんやりと帰宅中、水たまりに足を突っ込んだらそこは魔界でした。雨女としての能力を買われ、魔王のお妃に選ばれたらしい。丁重にお断りしたが、当の魔王に謙虚な態度が気に入られてしまう。帰りたい水紀と帰したくない魔王のラブコメディ。

【1 魔界へようこそ！】（前書き）

思いきり明るくて、馬鹿で、ハッピーな話が書きたくて書き始めました。また、どうしても一度は魔王様が出てくる話を書きたかったです。楽しんでいただければ幸いです。ちなみに、タイトルは雨花（うか）の花嫁と読みます。

【1 魔界へようこそ！】

私は、叶わない恋をしている。

ずっと、彼には大切に思うひとがいた。けれど、その思いが叶うことはなぜかずっとなくて、いつかこつちを見てくれるんじゃないか、と私は淡い期待を抱き続けては、ふともれ聞く声に胸をおどらせていた。

同時に、その恋しい声が彼女の名前をささやくのも耳にして、深い傷を負う。

それが、ここしばらくの日課だった。

「……あ」

それは、弱い雨が降りしきる暖かな午後。

休日だからと買い物に出かけていた私は、またしても降ってきた雨にゆううつな視線を向けつつ歩いていった。楽しみにして出掛けると雨が降るこの体質、どうにかしてほしい。

欲しい服があったので、私は人のにぎわう大きな百貨店を楽しく見て回った。でも、高すぎて手が届かなかった。たかがジーンズが一万円とか、私の収入からすればぼったくりじゃないのかと思える値段だ。

そのあとはカフェでごはん。まあ、ジーンズを買えなかったことを除けば、悪くはない休日だったかも。

そんなことを考えながら歩いていたら、見慣れた影が楽しそうに笑い声をあげながら歩いてくるのが視界に入った。なんて偶然だろう。一瞬、胸が高鳴る。嬉しくなって、声をかけようとして、私は動きを止めた。

その隣りに、彼がずっと想っていた彼女がいたから。

ふたりは、仲良く手をつないでいる。

傘を落とさなかったのだけは、褒めてもいいと思う。

それくらい、シヨックだった。私は傘で顔を隠しながら、彼らとすれ違う。嬉しそうに、弾んだ声が耳をかすった。彼はこちらに気づきもしない。

涙がにじむ。どんな努力も、結局は意味なんかなかったんだ。

私は、必死に目をぬぐいながら歩いた。しばらくバスには乗りたくない。こんな顔をして乗り込んでいくななんて嫌だった。

彼が好きだと言うから、髪をのばした。目の大きい子が好きだと訊いたらすぐに、アイメイクを頑張った。料理の出来る子がいいよねというのを聞きつけては、ひとり暮らしの家で必死に料理の本とにらめっこをして手に切り傷ややけどを作って練習した。好きだという音楽も訊いたし、本も読んだ。

そのすべてが、無駄だったのだ。

「あゝあ、馬鹿みたい」

自嘲気味に言っつて、どんどんと歩き、人気のない瀟洒な民家の並ぶ通りへと入っつていく。歩いたことのない場所だっつたけれど、位置さえわかつていれば帰れる。今はただ、歩きたかっつた。

くるくると、空色の雲模様の傘をまわす。

その行為に意味なんてない。

頭から、今までのことすべて追い出したい。忘れたい。どうしよう、まだこんな好きなのに。どうしたらいいんだろう。涙は勝手ににじんで、頬を伝う。

せめて、一度でいいから、好きな人に好きだと言われたい。

私の方から誰かを好きになることはあつても、他の誰かに恋愛対象として見られたことはなかつつた。

近くを、男性と腕を組んだ女性が通り過ぎていく。

彼女と私。何が違うというのだろうか？ 容姿の面では、大差ないはずなのに。寂しくて悔しくて、足もとの石ころを蹴飛ばす。

私はさらに歩いて、歩いて、小さな水音をたてて水たまりにブーツの先をつっこんだ。そして、ふいに足もとが崩れ去るような感覚に襲われた。

ああ、ついにショックで転んじやつたかな、私、と思っつたら違っつた。

とりあえず、涙はすぐにとまった。

ただし、別の衝撃で違う涙がこぼれる。口からは悲鳴も一緒に飛び出した。

そう、私は落下していたのだ、高い高い空中にいきなり放りだされていた。地面は本当に崩れ去っていたのだ。見上げた上には灰色のどんよりと曇った空が広がっている。あれが、今まで私が見ていた空だ。手を伸ばして、戻ろうと空を引っ掻くが、もちろん手が届く訳もない。

このまま死ぬのか、そんな思いで落下して近づく地面を見る。赤茶けた大地が広がっている。なんなの、ここはなに、どうしてこんなことになってるの？

心の中で叫ぶも、答える者はなく、私はなすすべもなく落下していき、自殺死体みたいになることを覚悟して目を閉じた。が、そうはならなかった。ふわり、とお尻が浮いた感覚がある。奇妙な浮遊感、ジェットコースターで下るときのあるに似ていた。

「はいはい、お妃さまのご来界〜」

のんきな声が聞こえた。ついでに羽ばたきの音もする。私は恐る恐る目を開けて、叫んだ。

「ぎゃあああああああ！ 嫌ーっ、離して離して気持ち悪い！」

「え〜、助けに来たのにひどいっス」

私は、その生きものにお姫様だっこされた状態で宙を飛んでいた。

その生きものは、全身が真っ赤で、顔が毛のないニワトリだった。背中に生えた黒いコウモリみたいな翼で浮いている。肌はいわゆる鳥肌というやつで、鶏肉の皮みたいに穴がぷつぷつしているのが非常に気持ち悪い。

「離して！ 降ろして、ここ何？ どこ？ あんた何？」

「何とか言わないで下さいよ。ここは魔界っス、オレはガーゴイルのガーグッス、よろしくっス」

よろしくされても激しく困る。どうすればいいんだ。

私は気色悪さにしばらく耐えて、足のつく場所に降ろしてもらってから、凄まじい勢いで後ずさった。それこそ光速の勢いで。

「あ、ありがとう。でも来ないで、触らないで、だめなのよそういう肌、ぷつぷつしてるのは無条件にだめなの、ホント、ごめんなさい？」

大混乱の中、必死になりながら言う。

もう訳がわからない。さっきこの気持ち悪い生きものは何て言うてた？ 魔界？ そりゃ私は漫画好きですから名称は知ってますけど、そんな場所が存在しないことくらいわかってます。

「むう、仕方ないっスね。じゃあ人に化けますから待ってて下さいよっつと」

ガーグとやらはそう言うと、全身に力をこめて毛穴からなぞの灰

色をした煙を出す。私はそれを手で払う。こんななぞの煙、死んでも吸いたくない。というか、吸ったら死にそうだ。

さらに後ずさりしながら見ていると、彼はひとりの少年の姿になった。

赤毛に赤茶色の目をした、可愛らしい少年である。

赤いパーカーみたいな上着と、同じく朱色の半ズボン姿だ。足もととはなぜか包帯をぐるぐる巻きにしたような感じだが、とりあえず人間の姿をしている。しかし、中身はアレなんだ、騙されんな私と言い聞かせつつも、先ほどまでの嫌悪感は薄れている。

「これならいいスよね？ では改めまして、魔界へようこそ！」

「え、それ本気で言ってるの？」

「当然です。あなた様はこの魔界を統べる第300代目魔王ジエズアルド様の十人目のお妃さまとして召喚されましたっス！ おめでとうございますっス！」

胸を張ってそう言いきったガーグの言葉に、私は頭が真っ白になった。

【2 移動魔法】

こんにちは。はじめましての方もそうでない方も今さらだけどもろしく。

私は工藤水紀^{くわじゅんき}。年齢は二十一歳。髪は長めで、少し茶色に染めてゆるくパーマかけてます。顔は中の上程度。身長は160cm。所持品は水色の雲模様の傘に、いろいろ入ったバッグ。トレンチコート姿で足元はレインブーツで固めてます。

家族は最初からいなくて、少し前までは中小企業で頑張ってた。その先輩に恋して、告白する前に振られて、センチメンタル気分歩いていたらなぜか魔界に落ちことされました。

そこで気色の悪いガーゴイルと名乗る化け物に空中落下で死体になるのを助けられたあとで、魔王の十人目の妃に選ばれたとかふざけたこと言われて頭真っ白です。

これが前回までのあらすじ。

「まあ、とりあえず周囲の風景見てれば嘘じゃないことはわかる気がするけど」

私はつぶやいて、改めて周囲をながめる。

視界がやたら暗くて赤茶色ばかり。先ほど私が落ちてきた空はずでに閉じてしまっており、ぼんやりとした明るさは曇天の日並み。立ってる場所も赤茶色の砂と土、遠くにデカい岩が見える。植物は

全く生えていないが、丘の上に妙にトゲトゲした建物が見える。あれがその？魔王様？とやらのお城なのだろうことは容易に想像がついた。

もつと遠くの火山はときおり轟音をたててマグマと火を辺りかまわずまきちらし、上空では「ギー」とか「クエー」とか鳴く、鳥にしては大きすぎる生きものが飛びまわっている。

その上、視線をすぐ近くに戻せば、私が三人分は縦に並ばないと到達しそうにないほどの巨大な何かの白骨が、赤茶色の風に吹かれていた。牙は私ひとりの身長ぶんくらいある。

それから目をそらして、私はさてどうしたものかと思った。

「じゃあ行くっス！ オレはあなた様の身の回りの世話をするよう、魔王様から言いつけられてるんス。これからよろしくっス！」

無邪気な笑顔で言うガーク。くそう、その顔で笑うと可愛いじゃないか。

「あのじゃあ、私の前ではその姿でいてね？」

「わかったっス！ じゃあ始めますから、少し下がってて下さいっス」

「はじめる？」

特に行くとも返事していないのに、彼は楽しげに胸に下げた青い水晶玉をかかげて、言う。

「スイテル・ホナッガズルラーヴ」

何かの呪文らしい。まあ魔界と豪語するんだから呪文とか魔法とかあっても変ではないだろう。と思っていたら、ぶわっと突然水晶玉から青白い光が放たれた。それは複雑に織りなされた魔法陣そのものの形をしており、印象としては公園にたまにあるあの地球儀の経度と緯度を金属の棒で作ったような、回転する遊具とよく似ている。白い文字や記号を描く線が発光しているため、非常に美しい。

「じゃあ、中に入って下さいっす」

「えっ、あの……そもそもコレは何？」

「移動用魔法陣っす、知らないんすか？」

「知らない」

知ってる訳がない。私の暮らす世界には？魔法？などというものは存在していないのだ。

「まあいいっす！ じゃあ中に入って下さいっす。オレも一緒に行くんで、最初はまあアレかもしれないですけど、慣れれば平気っす、むしろ楽しいっす！」

「やっぱり、あそこに行くの？」

私は、やたらトゲトゲした黒い塊を指差して訊ねた。ガーグは大きく首を縦に振る。

「そうっす、魔王様に会って頂くんす！」

笑顔の少年を私はどうしようもない思いで見やり、肩を落とした。行くしかないよねこれ。でも、考えようによつては元の場所に戻れるチャンスかもしれない。なにしろ？魔王様？なら、私を元の場所に戻すなんて簡単だろうし。

よし、行ってみよう、魔王を説得だ！

「わかった、行くわ」

「じゃあ、オレの手をつかんでて下さいっス、行きますよ？ いち、
にの、さんっ！」

私はガーグに言われるままに彼の手を取り、引っ張られるようにして球体の中へと飛び込んだ。またしても、気持ちの悪い浮遊感。完璧にジェットコースターに乗っているのと同じだ。正直あれが苦手な私は酔って吐きそうになりながら目を閉じた。

やがて、ほんの数秒で移動は終わり、私はふらついて倒れかけたところをガーグに支えられた。少年の姿だが、案外力が強い。

「あ、ありがとう」

「いえいえ。さあ、着きましたっス、ここが魔王様のお城、ガズル
ラーヴっス！」

ガーグはなぜか誇らしげにその建物を示して、胸を張った。
が、私は全く別の感想を抱いて、気分が萎えた。

【3 首なし騎士】

「悪趣味……」

私は小声でつぶやいた。

本物なのかそうじゃないのかはわからないが、入口のやたら大きな鉄製の扉の周囲に飾られているのは、人間の頭がい骨だ。そのまわりの壁には、苦悶の表情を浮かべた人が積み重なっている光景が浮き彫りにされている。

よくキリスト教や、仏教で地獄だの煉獄だの言われているあんな感じの光景が、丁寧に素晴らしい技術で彫られているのだ。

技術の無駄遣いもいところだよ、どうせならもっと綺麗なものを作るのに心血注ごうよ、恐怖心をあおるような部分に凝らなくてもいいじゃないよ、と内心突っ込みを入れつつ、門番のところへ歩いていったガーグを見やる。

門番は、ガーグと同じような真っ赤な足歩行する鳥だった。ガーグとは違い、ちゃんと体が羽根に覆われているので、気持ち悪さは感じない。

それに、鷹や鷲のような猛禽の顔はなんだか凜々しくて格好いいじつと見ていると、門番の金色の目がこちらを見る。

私はどう反応して良いのかわからなくて、彼と真っ向から見つめあった。

すると、彼（なんとなくイメージで男性のような気がしたので）はなるほど、とでも言いたげにうなずいてから、扉の横に設置されていた鐘についたひもを引いた。

結婚式会場などで聞いたことのある、ガランガランという音を何倍にも大きくしたような、私の耳を使いものにならなくする気かと怒鳴ってやりたいくらい大きい音が響く。

思わず顔をしかめて耳を押さえる。

すると、扉が重苦しい音をたててひらいた。それを見てみると、ガーグが小走りに寄ってくる。

「扉が開いたっす！ 行きましょう」

「え、ええ」

私はうなずいて、彼に手を引かれるまま、その不気味な城へと足を踏み入れた。

中は思っていたより不気味だった。想像を超えてくれなくていいよ、とますます吐きそうになりながら進む。内部は薄暗く、壁には大きな目玉がくっついてこっちを見ている。

うつうつ、気持ち悪いよう、帰りたいうよう。

こんなところ住んでる化け物のお妃だなんて嫌だよう。

私はなるべく目玉を見ないようにしながら進み、通路を照らす緑色の鬼火っぽいものを頼りに足を出す作業に集中する。だいたいい、なんで緑色なのだろう。ふつうにオレンジ色の炎でいいじゃないかと思いつながら、私は薄気味の悪い通路を通り過ぎて、毒々しいムラサキ色の手すりがついたらせん階段をのぼる。

外觀から判断して、この城はいくつもの塔が集まってひとつのお城になっているらしい。

今いるのは手前の小さな塔だろう。やがて、ガーグはらせん階段の途中にいくつかあった入口をくぐり、吹きさらしの通路に出る。

強い風が吹きつけ、私は慌てて手すりにつかまってぎよっとする。なんか、むにゅっとしたんですけど。とはいえ、つかまらないでは進めないから、目をそらす。見たくない見たくない。

目をそらしながら通路を渡り切ると、前方を何かが歩いてくるのが見えた。？誰か？ではなくて？何か？なところが、ここが魔界とやらであることを妙にひしひしと感じさせる。

「おお、ガーグではないか。ということは、もしやその方が魔王様の最も待ち望んでいた娘か？」

それは興味深そうに私をながめて問う。いや、ながめると書くのは不適切だった。なぜなら、目の前の全身鎧姿の彼には、首がない。彼は、すぐにわきに抱えた自分の首らしきものがかぶっている兜の目の部分をスライドさせて開けると、そこから改めて私をながめた。のぞく目は青い。顔は判別不可能なので、視線だけが私に突き刺さる。あの、なんか嫌なんですけど……。

ちなみに、声は渋い壮年男性のそれである。

彼はデュラハンだろう。最近ファンタジー漫画で読んだことがあるような気がする。いや、映画だったかな。そうだ、映画だった。海外の某有名男優が出ていたから見たのだ。

映画はとても面白かったけれど、別に現実には首なし騎士を見たかったわけじゃない。

「はいバルトロメオ様！ オレがお世話をするようにって魔王様が直々にご命令して下さいましたっス。オレ嬉しくて、それで、お妃さまを迎えに行つて、今から魔王様にご挨拶に行くんス」

「そうかそうか。では我もともに行くとしよう。娘さん、お名前は？」

「……み、水紀です、よろしく」

そう言つと、デュラハンのバルトロメオは呵々大笑し、私の肩をばしばし叩いた。

痛いっつーの。

「おお！ よろしく頼みますぞ、ミスキ殿！ 我のことはバルトと気軽に呼んで下され。よろしければ、ぜひ後で我が愛馬のテイフオーネにお乗り頂きたいものですな。名前の通り、あなたを台風に巻き込むように所定の場所に移送してさしあげられますぞ」

「は、はあ。ありがとうございます」

私は、自分より縦も横もはるかに大きいバルトの言葉にそう返して、さらにぐったりした。先ほどの移動魔法といい、このデュラハンのいう馬といい、ここにはアクティビティまがいの移動手段しかないのかよと怒鳴りたい気分だ。

「では、行きましょうぞ」

「行こっつス！」

非常にテンションの高いふたりに向け、私はげんなりしつつなずいたのだった。

【4 魔王様とご対面】

相変わらず薄緑色の中を歩いて、真ん中あたりの塔にさしかかった頃、バルトが振り向いた。

「さあ、あの扉を開ければいよいよ魔王様とご対面ですよ！ 魔王様はとも力のあるお方、くれぐれも粗相などのないようにしてください。もし機嫌をそこねでもしたら、あの方の使う爆炎魔法であとかたもなく焼きつくされてしまいますぞ」

「き、気をつけます」

彼の言葉に、私は思わず血の気が引いた。気軽に説得だ！ なんて思っていたのだが、そんなに怖いんじゃないかといいような気もする。

けれど、こんなところで一生暮らすのも嫌だ。しかも、妙に臨場感があるので夢だとも思えない。

感情が追いつく前に、ことは進んでいく。

「だ、大丈夫っすよ！ 魔王様は心が広い方っす、オレみたいなものを使って下さるし、それに、人間の姿をしているときの魔王様はそれはすごい美形なんスよ！」

「そうなんだ、じゃあもとはどういう姿なの？」

「そっつすね……めちゃくちゃデカイ頭が三つくらいあるオオカミみたいな感じっすかね？」

「わあ、そうなんだ。それは見たくないなあ」

私はそう言ったが、ガーグは気にせず手を引つ張る。そのままぐいぐいと階段をのぼりきると、扉がきしみながら開く。うわ、いよいよだ、嫌だなあきつと悪そうな顔してそう。

勝手に想像した魔王像は、お寺にある仁王様みたいな顔をしていた。私はそんなイメージを抱きつつ、赤い絨毯を辿って、やたらと広い広間のような場所に入っていく。

「ジエズアルド様！ お待ちかねの娘御をガーグが連れてまいりましたぞ！」

のどはちよん切られているのに、どこからそのやたらと大きい声が出てくるのだろう。私は空いている左手で左耳を押さえながらそんなことを考えてしまった。

広間は、それまで歩いてきた場所とは違い、ちゃんとオレンジ色の炎がたいまつが壁に取り付けられたただっ広い空間だった。まっすぐに視線を移動すると、赤い絨毯が玉座の足もとまで敷きつめられている。床は多分だけ黒い大理石。壁は、灰色の木肌をした細い若木をつめこみましたという感じ。天井はかなり高く、とがっているのがわかる。

私は、あちこちを見たあと、おそろおそろ玉座を見る。

最初は、おや？ という感じだった。思っていたより、大きな。もつとこう、歩くときにずしーんずしーんと音を立てそうな人物を想像していたのだ。

「おお、待ちかねたぞ。娘、近くへ来い」

なぜか魔王様の声は低く、耳触りのよい爽やかなものだった。ただ距離があるので、顔や体格は把握できないけど、私は少なくとも魔王様はすでに人間の姿をしているのだなと思ってややほっとした。

ガーグの言う、首が三つもある化け物とご対面なんて絶対に避けたい。

「行くツスよ！」

「う、うん」

ガーグに手を引かれ、少し後ろに首なし騎士を連れて、私は行く。

一歩、足を踏み出すことに？魔王？の姿がくつきりと視界に映る。

顔は、ものすごい美形。どこかひとを見下したような冷たい表情が良く似合っている。まあ化けてるんだから美形でも驚かないですけど。

体格は、西洋人ほどムキムキ筋肉でもなく、すらりとしている。日本人をお手本にしたのかな？ 肌も、変な青とか赤じゃなくて、ちゃんと白い。まあ、白すぎたらそれはそれで嫌だけど……。

服は、意外とこざっぱりしていて、現代的。黒いコートに、ズボン、革の靴だ。肩に赤と金の豪華なもようの布をかけているのがあ。魔王様だな〜という印象。手には、金色の柄をした剣。鞘がいろいろな色に輝いているので、宝石がまぶされているのだろうなあと思う。

髪の色は黒。王冠とか妙なものはかぶっていない。長さは肩甲骨くらいまである。

現実にいたら正直微妙だ。役者さんかコスプレイヤーならまあ許容範囲だけど。

私は顔を引きつらせながら、魔王様の前に立ち、真っ向から向き合う。

魔王様の、切れ長で鋭い目は赤い色をしていた。

「良く来たな、娘。名前を聞こうか」

「水紀です。工藤水紀……」

「ミスキか、なるほど……お前の能力にぴったりの名前だな」

魔王様はそう言うと、肩の布をひるがえして立ち上がり、いま私
が立っている場所より少なくとも1mくらいは高い、玉座のあると
ころから階段を下りてきた。

「さて、では早速婚礼の儀をとりおこなうこととしようか」

その言葉に、私は思わず突っ込みをいれた。

【5 丁重にお断り致します】

「あの、すいません、私たち、まだ付きあってもいませんよね？」

「気にするな。お前の意思など関係ない。余が妻にすると言った以上、お前は妻になる。それだけだ。愛はなくても良いし、恋なども特にする必要はない。しかし、一応は求婚しておこうか、ミズキ、余と結婚して欲しい」

傲慢なのに律儀な感じで魔王様は言いきった。

なんですか一応って。愛も恋も関係ないとかどんな結婚ですかそれ。王家の政略結婚とかじゃないんだし、そんなロマンスのかけらもない求婚されて即OKする女がいたら見てみたい。ただし、金持ちでイケメンの人間は除かないとだめな気もする。少なくとも私はそんな無味乾燥な結婚は嫌だ。

まさに魔王様そのものなもの言いだなと思いつつ、私は冷静に返した。

「丁重にお断りいたします」

きつちり腰を九十度に曲げて、手はちゃんとふとももの横につけ、頭を下げながらきつぱりとお断り申し上げる。少なくとも、結婚するなら人間の男がいい。化け物の妻なんてありえない。と、言うか、それ以上にこの場所に耐えきれない。もう帰りたい。ふとんにくるまっつて寝たい。

「お前、余の言葉を聞いていたのか？ 意思は関係ないと言ったで

あろうが」

「関係あるうとなかろうと私には意思があるんですから言いたいこと言うにきまっています。何も言わないでハイハイ言うこと聞くとかただの人形ですよねそれ。だいたい、どうして私を妻にしたいんですか？」

「お前、雨乞いの能力があるだろう？」

「……ありませんよ」

なんだそれは。能力ってなんだ。雨女なのは能力のせいだったのか？ 全く雨を乞っていないのに向こうから勝手に降ってくるんですけど？

「行く先行く先で雨を降らせるという人間がいるのはわかっている。見てわかるように、余は魔族のなかでも火の性質をもって生まれたのだ。それゆえに、魔界はあれほどまでに荒れ果て、川は枯れ、湖は干上がってしまった。さんざん魔界のものに泣きつかれて、水の性質の女を探したんだが、どういうわけか魔界にはいない。そこで人間界の女に目をつけたという訳だ」

魔王様は丁寧の説明してくれた。だが、さっぱり意味がわからない。

見てわかるようにと言われても、火の性質だの、水の性質だのことなど知らないのだから、わかるほうが変だ。ただし、わかったこともある。ようするに、私が雨女だからこんなところに連れて来られてしまったということだ。

どこまでついてまわるんだろう。雨女のレットル。

目から雨が降りそうだよ。ゆううつな気分で、私は言う。

「以上じゃありません。嫌です、帰して下さい」

「なにゆえそれほど嫌がる？ 余はこれでも妻になる女のことを考えて、人間の女が好むような姿に化けた。お付きの者も化けられる者を選んだ。その上、余の妻になれば魔界を支配できる立場になる。お前は好きに下々に命令できる。金銀を身につけ、ぜいたくな暮らしも出来る。なにが不満だ」

「いえ、別に支配したくないし、命令とか無理ですし、金属アレルギーなんでアクセサリーは付けられませんし、ぜいたくって言うても、そもそも魔界のぜいたくとか理解出来そうもないので、改めて心より丁寧にお断りさせていただきます」

ふしぎそうな魔王様に、私は理由を説明してやはり頭を下げた。

丁寧な対応になるのは仕方ない。うっかり変なことと言って爆炎魔法とか放たれたら嫌だ。そう思い、失礼にならないような対応を心掛けていると、魔王様はうなりだす。

私は顔をあげてそっとその顔を盗み見る。本気で悩んでいるらしい。

「ならばどうすれば納得して嫁いでくれるのだ？ 出来ることはするぞ。妻が快適に暮らしを送れるようにするのは夫の義務だからな」

「あの、魔王様のお心がけはとてご立派だと思うのですが、私は

単に家に帰りたいただけなんです」

本心を言うと、魔王様は私を称賛するような顔でながめた。

「ほほう、欲がないのだな。ますます妻にすたくなつた。いまは帰りたいかもしれないが、慣れればここが快適になるであらう。お前がここに慣れるまで、婚礼は先延ばしにしても良い」

言つて、魔王様は手を打ち鳴らした。

すぐに、広間にいくつもある小さな扉が一斉に開く。私はぎよつとして後ずさつた。扉からは、見たことあるような新しいようなモンスターたちがぞろぞろと出てきて、また一斉にひざまずいた。

私はその光景をあつけにとられてながめる。

そこへ、魔王様が肩に手を置いてほのかに笑う。破壊力抜群のほえみだつた。思わず恋してしまいそうになるくらい、綺麗な笑顔だつた。

だが、私はふんばつた。そんなものに負けてたまるか。相手は首が三つもあるオオカミの化け物なんだ。あのキラキラした笑顔は、ホストの営業用スマイルみたいなものなんだと言ひ聞かせる。

「疲れたであらう、まずは妃の部屋へ行くが良い。あと少しで夕餉の時間だ……あの者たちを好きに使つてくれて良い。着替えたり、休んだり、ゆるりとくつろぐが良いからう」

そう言い置くと、魔王様はまた赤い布をひるがえして玉座に戻ると、響くような声で言つた。

「この者は余の妃となる娘である。くれぐれも丁重に扱おう。今宵は妃が来てくれた祝いも兼ねて盛大に晩餐会を開こうと思う。各々、急ぎ準備にとりかかれ！」

『はっ！』

たくさんの魔物たちが返事をした。耳が変になる。なんでこの住人は声量がやたらとデカいんだ。そう思っていると、手を引かれた。ガーグだ。

「さあお妃さま！ お部屋に案内するっすよ！」

「え、ええ」

「我も途中までおともいたしますぞ！ まだお妃さまの顔を知らぬものもいるかもしれぬゆえ」

「そ、それはどうも」

そのお妃さまって言うのヤメテ！ まだ確定じゃない、確定じゃないよ。

ガーグに手を引かれ、バルトに後ろを守られながら、私は心の中で叫んだのだった。

【6 お妃の部屋】

ガーグに連れられて向かった妃の部屋は、思っていたよりも微妙だった。

なんでこうこの場所はいちいちいらないところで想像を超えてくれるのか。もう一度心から思う。想像を超えないで……お願いだから。私は脱力しつつ、改めて部屋をながめる。

妃のために用意されたというその部屋は、完全に全体が桃色というか、少女趣味全開という感じだった。まあ、不気味でなかったのだけは不幸中の幸いだけど。魔王が言っていた通り、一心人間の女について調べてはみたらしい。ただし、人間の女というものに対するイメージが激しく間違っているとは思うが。

一体どういうところから知識を仕入れたのか、直接聞いてみたくてたまらない。

……いや、やっぱり怖いからやめとこう。うん。

「……ああ、疲れる」

ぼやいて、一緒に部屋についてきたガーグを見る。傷心だということに、浸るひまなどまるでない。いや、その方がいいにはいいのだが、なんとなく気分は微妙だ。

そんな私にかまうことなく、彼はいそいそと衣装箆笥らしき木の箱をあさり、中からびらびらしたレースやらフリルが大量についたドレスを引っ張り出して私を見た。

「お妃さま！ ご入浴の準備が整いましたので、いらしてくださいませ」

「え、入浴？」

まごついていると、人間の女性と同じような乳房のある猫たちが私のまわりを取り囲む。え？ え？ と脳内をハテナだらけにしているうちに、腕をむんず、とつかまれて立たされると、容赦なくどこぞへ連行される。それはすぐ隣の部屋だった。

「何、何なの！ 何するの！」

「ご入浴していただくだけでございます」

「え、いいです、自分で出来ます」

「そういうわけにはまいりません。ガーグ、適当なドレスを選んでおいてちょうだいね」

「了解っス！」

メンバーの中で一番偉そうな猫がガーグに言う。でも、みんな猫だから見分けがつかない。しかも全員がとら猫みたいな模様をしていて、私より遥かにナイスバティだ。

うわー、なんか微妙に落ち込むんですけど。何なの、このプチ嫌がらせ。どうせ私は洗濯板ですよ。

「お体を洗いますので、じっとしていて下さいませ」

猫はそう言うと、ほとんどはがすように私から服をぬがせ、タイル貼りの部屋に置かれたバスタブに放りこんで、全身を五人がかりで洗いだす。恥ずかしいうえ、くすぐったいので、終わるまで私は笑いつづけた。

三十分後、入浴タイム終了。

……っ、疲れた。

ここに来てからというもの、疲労ばかりがたまっていく。あの恥ずかしいピンク部屋でいいから眠らせて欲しい。そして出来れば夢オチの夢を見たい、じゃなくて夢オチということで自室で目覚めたい。

「さあ、ドレスにお着がえになってください。ガーグ、選んでおいた？」

「選んでおいたっス！ 三着選んだんで、後はお妃さまに選んでいただくだけっス！」

ガーグは胸を張って言った。私は彼がピンク色のサテン生地のカバーがかかっているベッドの上に広げたドレスを見て、薄い笑みを浮かべて固まった。

あれを着るのか？ 私が？

そこに広げられていたのは、鮮やかな黄色のスカート部分がやたらとふくらんだもの。深紅の露出が多いセクシーなもの。イエローグリーンはやっぱリスカート部分が後ろの方にせり出しているものの三着だった。どれもこれも、結婚式でお色直しに着るくらいの派手さだ。しかも時代が古いものばかり。

私は恐る恐る猫たちとガーグを交互に見やる。

もともと着てきた服じゃダメ？ と訊いてみたかったが、許して

くれそうにない。

私はさらに精神的疲労を感じながら言った。

「じゃあ、黄色で……」

「わかりました、ガーグ、それを持っていらっしやい」

「はいッス！」

嬉しそうなガーグの笑顔を見て、私は心ならずも癒されてしまった。それから私はまた猫たちに囲まれて着替えさせられ、ぐったりしながら晚餐の席へと引きずられていった。

もう、これ以上疲れたくないよ……さっさと食べて寝て、頭がスツキリしてからものを考えよう。そう思った私だったのだけど、そういう訳にはいかなかった。

【7 晚餐】

かんべんしてよ、なんで傷心なのにこんな目にあわなきゃならぬいの？

広間に向かつて、拡声器で叫んでやりたい気分だ。

着替えさせられた私が連れてこられたのは、玉座のある先ほども来た大広間。

とうぜん、あの気持ちの悪い目玉のついた通路を通り、やわらかいなぞの手すりにつかまりながららせん階段をいくつか下りてやってきたのだ。目の前にはものすごく長いテーブルがいくつもつながられて置かれており、その上には良いにおいを放つ食べものがある狭しと並んでいる。

じっくり見ないと料理の内容はわからないが、今はそれどころじゃない。

ああ、このまま消えてしまいたい。

注がれる無数の視線で胃が足もとまで落っこちそうなくらい重い。

なぜなら、永遠とも思えるほど長いテーブル席には、魔物たちが片端から腰を下ろしており、その目玉はすべて私を見ていたからだ。もう色々と怖すぎて倒れてしまえそう。そんな思いを押し込めて、私はガーグに引っ張られるまま、上座に向かつて歩き始めた。

この悪夢はどうやら覚めてくれないらしい。

やがて、一番の上座に来ると、美麗な魔王が少し前に見たのとまったく変わらぬ出で立ちで銀の酒杯を持っているのが見える。魔王は私に気づくと、杯をかかげてほほえんだ。

「ようこそ、我が妃よ。その姿は可愛らしい月の精のようだ。お前の美しい瞳が余に向けられる日が来るのが待ち遠しいぞ。さあ、今宵の宴はお前のために開いたのだ、存分に楽しむが良い」

「は、はい」

全身が粟立つような口説き文句を吐かれ、私はもうどうしたらいいかわからなくなった。そのまま、ガーグに引っ張られて魔王の横に座る。

ありがとうガーグ。君がいなかったら私はもう一步も動けてない。

心の中でそんなことを思いつつ、呆けたように目の前の大皿を見ると、なぞの生きものの丸焼きがあった。他にも、見たことのない植物がサラダのように刻まれて和えられていたり、少し色が毒々しすぎる緑色のゼリーが揺れている。パンにいたっては炭かよと突っ込みたいくらい真っ黒だったり、逆に真っ白だったり、綺麗なグラスに注がれている飲みものは、美味しそうに泡立ちながらもテーブルにでるでるとスライム状になってこぼれていた。

あはは、なんですかねこの料理たち。食べたら毒にあたって死にそう。だって色が変わだよ？ まあしょうがないか。人間の食べものじゃないもんね。うふふ。

正気が薄れていく中、隣の魔王様が立ちあがり、言う。

「さあ、宴の開始だ！ 皆、思う存分飲み、食べるが良い！ 乾杯！」

『乾杯ー！』

魔物たちがそれぞれの杯を打ち鳴らして、食事がはじまった。魔物たちが食べものをがつついている光景は見ないようにする。ただでさえ消えかけている食欲がさらになくなってしまっからだ。

こんなストレスフルなことがつづくようなら、食べておかないと体力が持たない。何でもいいので、食べても危険そうに見えないものを探す。

やがて私は困惑気味に、近くに置いてあった、何とかのどに押し込めそうなゼリー寄せを引き寄せて、フォークでつついてみた。何かの肉片が入っている。何の肉だろう。しばらくゼリー寄せとにらめっこした結果、私はあきらめた。

無理だ。よほどお腹が空かない限り、口に入れられない。

すると、飲みものなどを給仕しているあの猫たちのひとり？が私のところへやってきた。手に、よくレストランで見る、銀色のボウルをひっくり返したようなふたをした皿を持っている。

「お妃さまにはこちらを召し上がっていただくようにとのことです」

猫はそう言ってふたを取った。すると、中からなじみのある食べものが現れる。

牛丼だった。

「え、あの……?」

「余が用意させた。いきなり魔界の食べものに慣れるというのも難しい話だと思つてな。以前にそなたのように連れてきた人間の妃は、それですぐに死んでしまった。二の舞はごめんだ」

私は魔王の気づかいに一瞬感謝したあと、すぐに背すじが寒くなつた。

つまり、ここにある何かを食べたら死ぬということだ。私はテーブルの上を見渡して、どれがそれなのだろうと考えた。

「その魔界草だ。それには決して口をつけるな、今お前がつついているゼリー寄せは食べても平気だ。魔界の酒脂豚しゅうじつたの肉が入っている。他の人間にそれを食べさせたが影響はなかった。ただし、アルコール度数が非常に高いから酔う、気をつける」

無表情で魔王は言い、酒杯を傾けた。

私は、どう反応して良いのかわからないが、とりあえず言った。

「……ありがとうございます。それじゃあ、頂きます!」

私は手を合わせて言った。魔王は、そんな私をほほえまじげに見てくる。その笑顔の破壊力はやはり抜群だったが、それでも結婚は嫌だった。

目の前の牛丼からは、なじみの美味しそうな匂いがしてくる。給

料がピンチのときには、よくお世話になったものだ。私は、さっそく食べはじめた。

美味しい。やっと少しほっと出来た気がする。

そうして何とか食事を終え、最後にまたしても魔王様に恥ずかしい口説き文句を吐かれたあと、私はあの恥ずかしい部屋へ戻り、ドレスよりはまだましな、青いワンピース風の寝間着に着替えてベッドに横になった。

「はあ、これで夢オチが来ればいいんだけどなあ」

望み薄な気もしないではないが、私はそうぼやいて、目を閉じた。

幸いなことに、疲れすぎたせいか失恋の痛みを思い出すこともなく、私は熟睡したのだった。

【 8 魔界の朝】

「わお、夢じゃなかった」

目覚めてすぐの第一声。みなさま、おはようございます。私は今日もゆううつです。

「おはようございますッスー！」

上半身を起こしてぼんやりしていると、扉が勢いよく開いてガーグが入ってきた。私が頼みこんだことを聞いてくれているのか、すでに人間の姿だ。だが、いきなり大声に心臓が早鐘を打っている。

「お、おはよう」

まだ寝ぼけたまま、私は言う。ガーグは、ふたたびいそいそと箆笥をあさりながら言った。

「今日は何着ますかお妃さま！」

彼の手により、着るのが恥ずかしいドレスたちが絨毯の上に次々と並べられていく。それを見ながら、私はどうしたものか、と考えた。もう一度、魔王に会って説得するべきなのはわかっているのだが、どうにも近寄りがない。

出来れば明日までには戻りたいのだが、それが出来るかどうかは怪しいところだ。会社のひとが何て思うか考えただけで気分が落ち込むが、私はその思いを振り払って、ベッドから出る。

特に暑すぎも寒すぎもしない。初夏の天気の良い日くらいの気温だと思う。そもそも、魔界に季節があるかが不明ではあるのだが、天気の違いはありそうだ。なにしろ、雨が降って欲しいから雨女の私を呼んだということじたいが、ここにも雨が降るといふ証明になる。

「あの、私が昨日着てきた服はどうしたの？」

毛足の長い、もふもふする絨毯の上を歩きながら訊ねる。

「あれはバステトたちが洗濯したっす。まだ乾いてないと思いますし、魔王様はドレス姿のお妃さまを見たいと思ってるはずっすよ」

「バステト？」

「猫の頭をした侍女たちがいたでしょ？ 彼女たちはバステトという種族なんすよ、オレがガーゴイルなのと同じっすね」

「そっか、バステトっていうんだ。それで、今日もその中から何か選ばないといけないのね」

私はおとぎ話の中のプリンセスたちが着ているようなドレスをながめて言った。仕方がない。着るものがないよりはマシだと諦め、一番シンプルなドレスを選ぼうとしていると、例によってバステトたちがなだれこんできた。

「おはようございますお妃さま。本日もわたくしたちがお世話させていただきます」

私が動悸を感じて呆気にとられている側から、彼女たちは世話を

焼き始める。

「あ、あの、自分で出来ることはしますので！」

「そういう訳には参りません。魔王様より、決して不自由はさせるなど言われております。さあ！　まずは身だしなみを整えますよ！」

中でも最も偉いらしいバステトが、毛皮に覆われているところさえ別にすれば、人間と変わらない形の手を叩いて言った。私は、もう嫌だ、と思いながらも彼女たちに逆らう勇氣はなく、そのまま囲まれて昨日と同じように強制身づくろいをさせられた。

お願いだから、もう少し羞恥心というものを理解してほしい。

私は涙目でそう思った。

「おお、おはようございます。今日も魔界は良い天気ですぞ！」

部屋を出て、魔王を訪ねようとして通路に向かった私は、こちらへ来る途中だったらしいバルトに行き当たった。

ちなみに、朝食は部屋で食べた。昨夜のように、出前でもとったのだろうかという形でバステトのひとりが運んできたのは、朝にはあまり食べないうどんだった。それも、あたたかいやつで、具はわかめとねぎ。超のつくうどん好きさんや、讃岐地方のひとはどうだか知らないが、朝にうどんは初体験だ。味はふつうにおいしかった。

「は、はあ」

天気が良いと言われても、昨日とまったく変わり映えない赤茶色ばかりの風景だ。

起きてすぐこれじゃ、なんだか気が滅入る。

そもそも、空はどんよりとした赤黒いガスがたちこめてる感じだし、太陽が見えないのに薄っすら明るいのがふしぎでたまらない。なにより、魔界というのは私のいたところから見るとどうい場所なのだろう。風の吹きつける通路手前で、私はひとり首をひねった。

「今日のお召しものもなかなかですな。昨夜は可愛らしかったが、今日はとてもセクシーです。魔王様もお喜びになられるでしょう」

バルトの言葉に、私は微妙な気分になる。今私が着ているのは、白い生地で、細かい金系のレース飾りが胸元と袖口についているゆったりしたドレスなのだが、一番シンプルで飾りの少ないものを選んだら、やたら胸元と背中がいているつくりだったのだ。

正直、洗濯板にはかなりつらいドレスである。私はその話題をさけるように訊ねた。

「そ、そうですね。それで、魔王様はどこにいらっしやるんですか？」

「いつもの広間ですぞ。ご案内してさしあげましょう。昨日の今日で、この巨大な魔王城ガズルラーヴの通路を覚えるのは大変ですからな」

「そうですね。じゃあ、お願いします」

私が言うと、隣のガーグがふくれた。ああ、その姿でそういう顔しないで。かわいいんだよ。なんでその正体はあんなに気持ち悪いんだろう。そうでなければ、ぎゅっと抱きしめてしまいたい。

「別にバルト様がおいでにならなくても、オレがちゃんと連れてくつもりだったっす！」

「はっはっは、それはわかっておるよ。しかし、我とお妃さまとお近づきになりたいのだ。ともに行けば良いではないか、な？」

さとすように言うバルト。なんだかじいさんと孫みたいだ。私は思わずほほえんだ。

「わかったっす、オレがお妃さまをひとり占めしちゃダメってことっすね。じゃあ行くっす！」

「よしよし、行こう行こう。さあ、今日はひときわ風が強いので、お手を。吹き飛ばされでもしたら、我らが魔王様に殺されてしまいます」

「わ、わかりました」

バルトの言葉にやっぱりぞっとしながら、私はその手をつかんで、魔王のもとへと向かった。

【9 再談判】

広間へ入っていくと、魔王様は昨日と同じように玉座にかけていた。相変わらずさまになっている。まあ、魔王なんだもんね、さまになってなければ変か。

「魔王様！ お妃さまがお話があるとのことですよ！」

バルトが広間いっぱい響き渡るような声で言った。魔王様は立ち上がることもせず、言う。

「何だ？ 余と結婚する気になったのか？」

どこをどうとつたらそんな極端な結論が飛び出してくるんでしょうね。私は玉座のある場所まで歩いていくと、真っ向から魔王様を見た。

「残念ながら違います。お願いがあつて来ました」

「ふむ、言ってみるがいい」

私はのどをぐくり、と鳴らして昨夜少しかだけ考えた要望を口にした。

「せめて昼間の間だけでも帰してもらえませんか？ 仕事があるんです。ずっと休んで首にでもなつたら困ります」

「却下」

魔王様はにべもなく言い切った。私は、昨日の疲労祭りの最中、これくらいなら許されるのでは、と考えた案をすぐに却下されて、すこしムツとした。

「検討もしてくれないんですか？」

「する必要がどこにある。お前は余の妃になるのだぞ？　今は猶予期間を与えているに過ぎぬということを忘れるな。お前の生活に必要なものは全て余が揃える。仕事などせずとも、お前が生きていくには何の不都合もない。以上だ」

「じゃあ、せめて外に出して下さいよ。息がつまります」

「却下」

私はうめいて、もっと上手い考えはないものかさがして、ふと思っ

「もし、私がここにおいても雨が降らなかつたらどうするんです。もういらなからつてもとの場所に戻された場合、暮らしていけないじゃないですか！」

「大丈夫だ。自分の行いには責任を持つ。それが君主というものだ。例えお前が雨乞いに失敗しても、死ぬまでの面倒くらい見てやる。以上」

ああそうですか。私は何を言っても無駄だとわかって肩を落とした。

「わかりました、失礼します」

「いつか色よい返事が返ってくるのを待っているぞ」

魔王様は微笑をうかべて言った。破壊力に変わりはない。けれど、少し慣れてきた私は薄笑いをうかべただけだった。

それよりも、一生をこの赤茶けた場所で過ごさねばならないと思うと、うんざりしてくる。しかも、部屋はあのありさまだ。そう思ったとき、私はひとつ思いついた。少しだけ、快適に過ごす方法を。

「そうだ、出られないなら、あのお部屋の模様替えをしてもいいですか？」

「何だ、あれでは不満だったのか。地上の若い娘が好む本を取り寄せてそのようにしてみたのだが、なぜ早く言わなかったのだ、すぐに配下のものを呼んで……」

そんなことしてたのか。

私は魔王が若い女の子向け雑誌を眺めているようすを想像して吹き出しかけた。お、面白い。見られなかったのが残念なくらいだ。

しかし、またぞろ、魔物の皆さんが大挙して押し寄せるのは困る。皆丁寧に対応してくれるけれど、やっぱり、まだ見た目が怖すぎる。こればかりは慣れようとしてもすぐに慣れられるものではない。

なので、私は慌てて言った。

「いえっ！ お手伝いしてくれる方が少しいればいいですから、ガ

「グもいますし、あとは……」

私は振り向いてバルトを見やる。彼はすぐに気づいてくれた。少しでも顔見知りにももらったほうが安心する。私はほっとした。

「おお、我は構いませんぞ！ どうせいつも城の中を巡回しておるだけですからな」

「そうか？ 必要ならば誰でも呼びつけて使うがいい。欲しいものがあれば、城の物置にさまざまなものがあるから好きに使え。ただし、中には危険なものもあるからな、バルト、気をつけるのだぞ」

「はっ！ 仰せの通りに。それではお妃さま、戻りましょうぞ」

「はい。それじゃあ、また」

私は少し遠慮気味に別れのあいさつをする。魔王は少し寂しそうな顔をしていた。いや、気のせいだろう。私はそのままきびすを返し、ガークとバルトをともなって広間を後にしたのだった。

【10 城の物置】

「ここが物置きかあ、広いなあ」

私はバルトに案内されてやってきた城の地下に作られている物置を見て、ため息をついた。

そこは、先ほど見てきた、玉座のある大広間よりも広大で、長い間に集められた無数のものたちがひしめきあっていた。床と壁は大広間と同じ感じ。違うのはちゃんと平坦な天井があつたことだろう。

中はたくさんの棚で埋め尽くされている。

光沢がなく、見たことのない黒い素材で作られており、触っても冷たくなってほんのりと温かい。その中に大量の物品が納められている。

ふしぎなことに、これだけ広いのにもかかわらず、チリやホコリが全くない。どうやって掃除しているのだろう、と思つて見ていたら、何か黒くてもこもこした、グレープフルーツ大のかたまりが棚を這っている。

「ねえ、あのもこもこしたモノって？」

「あれは黒毬くろまりたちっス。この物置には千匹くらい住んでるんすけど、外では絶滅しかかつてる希少な魔物っス。今の魔王様が憐れんで、ここに住みかを与えたんす。そのお礼にと、城じゅうを掃除するのが黒毬たちの仕事になつたっス」

「そうなんだ」

なんともかわいい魔物だなと私は思った。正直、怖いかグロい方々ばかりだったので、棚をもそもそ動くその黒毯とやらの姿には癒される。

同時に、魔王って優しいんだなと思う。

魔王などというと、ファンタジーでは魔物たちのボスで、悪逆非道の限りをつくしたり、世界を滅ぼそうとしていたりするイメージがあるけれど、どうやらそうではないらしい。

多分だけど、魔界の首相みたいなものなんじゃないかな。

いや、まあ仕事しているところを見たことはないけども。

そんなことを考えつつ、私は物置の中を歩き始めた。

良く見てみれば、まるで映画のセットにでも出てきそうな物がごろごろ置かれている。宝箱や、輝く剣、高価そうな宝石をふんだんに使ったネックレス、金の腕輪、真珠の髪飾り、薬草の束みみたいなものなどなど。

「お妃さま！ カーテンや寝具などはこちらになりますぞ！」

右手の方から、バルトの大声が聞こえた。

私はどこから声が出たのかすぐにはわからず、あちこち見まわしてようやくバルトの姿を見つけると、小走りに近寄っていく。そこには、木箱に入れられたたっぷりした布がたくさんあった。中には、

虹色にキラキラと輝く布地もあり、私は思わず歓声をあげてしまった。

「うわー、なにこれすごい綺麗」

「それは虹の粒子を閉じ込めた羽衣ですな。ドレスの上に羽織りなされるとよろしい。あちらに家具もございますよ。衣服なども見つくるって行きますかな？」

「はい、ぜひ。すごいなあ、何でもある」

買い物に来たみたいで気分が、私は物色をはじめた。

「お妃さま、くれぐれも勝手に触ってはなりませんぞ！ 中には危険な魔法や魔物を封じたものもありますゆえに、見たい場合は我がガーグに訊ねてからにしてくださいませ！」

「はい」

彼の言葉に生返事を返す。あまりにも興味をひくものが多いので、私はバルトの言葉を半分くらいしか聞いていなかった。

使えそうだが重たそうなものはバルトに頼んで取ってもらい、あまりに高い棚にあるものは、ガーグにお願いして取ってきてもらった。彼は、人間に化けた姿のままでも羽根を使えるのだそうだ。今は、少年にこうもりの羽根が生えたような状態になっている。

そうして、部屋のレイアウトを考えながら見て回っていると、小さい箱に納められた小瓶が目に入る。ひとつひとつが宝石で作られているかのように輝いており、思わず棚から手に取ってしま

う。

小箱の中に納められていた瓶は三つだった。赤と青と黄色の美しい瓶だ。ここにも花があれば一輪さしに出来るのに、と思いながら口に巻きつけられた茶色い紙をはがす。

「お、お妃さま！ それに触ってはなりませんぞ！」

バルトが大声で叫んだ。彼の声ににじんだ危機感にただならぬものを感じた私は慌ててそれを棚に戻そうとしたが、出来なかった。なぜなら、瓶からガーグが使った移動用魔法と良く似た、光の線だけで構成された魔法陣が出現したからだ。

「え？」

私はそれを手放そうとしたが、箱はまるで手に吸いついているみたいに離れない。

「何、これ何なの？」

「それは、先々代の魔王様が封じたとされる魔界でも極めて危険な魔物たちです！ 早くお放しくだされ、のつとられるかもしれないぞ！」

バルトの言葉に、私は半泣きで手を上下に激しく振るが、離れない。どうしたらいいの、誰か助けて、と内心思っていると、魔法陣から何かが飛び出した。

同時に、手から箱が転げ落ちて瓶が床に転がる。

フェルトを敷きつめたみたいな床なので、瓶が割れることはなかった。だけど、私にはそちらを見る余裕はない。物置の天井いっぱいを埋め尽くさんばかりの大きさのもの、人の姿をしているもの、牛と良く似た姿をしているものの三体だ。

「違う……あれは今の魔王様が苦勞して封じられた、伝説の魔界の賊！」

バルトが驚愕の声をあげた。

私は思わず目を丸くした。

【11 魔界の賊】

え、伝説？

どこのゲームの話ですかと突っ込みかけ、私は彼らをながめる。言われてみればそんな雰囲気醸し出していないこともない。

「感謝するよ、その娘……褒美に僕の奴隷にしてあげるよ」

「は？ 奴隷、そんなの褒美じゃないでしょ？」

その中でも、まっ黒なマントを着た人の姿をしたものが、ねつとりとした喋りで言う。私は我慢できずに、思わず突っ込んだ。だが、完全に無視される。

ちょっと、話題にしている人間の声くらいは聞いてよ……。

うんざりする私は放置して、三体の賊とやらは勝手にもめ始める。

「待て、俺の世話係にするんだ。邪魔すんな」

黒い牛が言う。

「何だと、あの娘は我がもらいうけるつもりなれば、貴様こそ邪魔をするでない」

青い蛇をデカくしたような奴が言う。

これが漫画だったら目からバチバチ火花が散っているところだろう。話題の人物を放置したまま三者は睨みあい、やがて宣言する。

「それでは、こうしようではないか！ これより魔界全土に呼びかけをし、中で最も多くの魔物を従えたものがあの娘を貰い受けるのだ」

「ほほう、再戦というわけか。いいぜ、しかしその前に今の魔王を倒さねーとな。忌々しいことに俺らを封じてくれやがった奴だ……そこは共闘といこうぜ」

「僕は賛成だよ」

何やら勝手に話が進められていく。これだけ色々な物が詰めこまれている物置きなんだから、何か声を張れるものがあるはずだ。私は必死にあちこちを見回し、灰色のメガホンらしきものを見つけると素早く手に取り、口にあてて叫んだ。

「勝手に話を進めるなー！ーっ！」

声が物置内に反響して、こだまみたいに返ってくる。さすがの三体もこつちを見た。

「そうですね、このお方は魔王様のお妃となられるお方！ この命かけてもお主らに渡したりはせぬ！」

バルトが格好いい啖呵を切る。

つづいてガーグも叫んだ。

「そうッス！ オレは非力ですが、お妃さまは渡さないっス！」

睨みあう五体の魔物たち。見た目の感じからして、圧倒的にこつ

ちが不利そうだ。というか、城の中でこんなことが起きているのに魔王様は出てこないのだろうかと思っていると、ふいに横で声がした。

「面倒なことをしてくれたな」

耳のそばでささやかれた声に、思わず私は飛びあがる。私のすぐ隣に魔王様が立っていた。なんて心臓に悪い現れ方をするんだろう。お願いだから二度としないで欲しい。胸に手を当てながら、私はすぐに謝った。

「すみません、すごく綺麗だったので、つい……」

完全に自分のせいなのはわかっているので、私はうなだれる。

「そうだろうな、バルト……危険なものがあるから気をつけさせろと言ったはずだぞ？」

「は……申し訳ありません。私の注意が足りませなんだ」

心から悔やむようにバルトが言う。大きな鎧姿が、少し小さく見える。

「失敗は失敗だ……わかっているのではあるうな？」

底冷えのする声に、私は慌てた。自分のどうしようもない失敗のせいなのに、親切にしてくれたバルトがとばかりを受けるなんておかしい。

「ち、ちょっと待って下さい！ バルトはちゃんと危ないって言う

てくれました！ 私がいけないんです。うかつに触るなって言われていたのに、出来心でつい手にとっちゃったんですから！ バルトにひどいことをしないで下さい」

私は思わず魔王様が肩にかけている布をつかんで言う。

その言葉に、魔王は目をすがめて鼻を鳴らした。

どこか不満そうだ。

「お前は余よりバルトが好きなのか？」

「え、何でそんな結論になるんですか？」

「そんなに必死な顔で言うからには、そう思われても仕方あるまい。余の妻となる女が、別の者に好意を持つことは我慢ならないな」

魔王の冷たいルビーみたいな目がバルトを見やる。私は、とにかく説明することにした。恋愛感情とただの好意をこっちゃんにされては困る。

「そんなんじゃないやありません！ 色々と親切にしてもらったし、悪いひとのようにも思えないですし、大体あの変な魔物が出ちゃったのって完全に私のせいじゃないですか。責めるひとを間違えないでくださいとお願いしているだけです、話を変な方向に持っていきたくないでください！」

私は必死に言葉をさがして並べる。魔王はしばらく氷のような視線をバルトに注いでいたが、やがてふいっと目をそらすと、つぶやくように言った。

「まあいい、今はそれよりも奴らをどうにかせねばな」

言つて、魔王は空に浮かんでいる三体を冷たい目で見やる。

私は少しだけほっとして、思う。彼らはいったいどのような魔物なのだろう。見た目は強そうなのだけど、昨日の今日では微妙に実感がわかない。魔法も魔物も、まだまだ私にとっては理解の外の存在だ。

ふと、ガーグを探してみれば、彼は棚にくっついて怯えたような顔をしている。威勢の良いことを言っていたが、やっぱり怖かったようだ。その気持ちは痛いほどよく分かる。正直、私だって怖いのだ。魔王が怒っただけでも怖いし、私を射るように見てくる空中の三体も怖い。

私は自分を責めた。

何でもっとちゃんとバルトの言うことを聞いておかなかったの。

私の大馬鹿、超阿呆。

「さて、分かるところが、お前たちにはふたたび瓶の中へ戻つてもらうぞ」

張っていないのによく通る声で、魔王様は三体に向けて宣戦布告した。

【12 魔物たちの争い】

浮かんでいる三体の魔物たちは、それぞれに別々の反応を示した。

「はあ、誰がもう二度と同じ轍を踏むかよ！」

「やれるものならやってごらんよ」

「以前のように行くと思うでないぞ、若造め」

彼らは一斉にしゃべったので、私には誰が何を言っているのかさっぱりわからない。三体も気づいたのか、お互いに睨みあいはじめ。少し前まで協力しあおうと言っていたのに……きつと相当に相性が悪いのdarouな、と私は観察しながら考えた。

「もう良いわ！ やはりお前らと共闘など出来ぬ。我は我でやらせてもらおう」

青い大きなへびが苛立つ声で言うと、体を伸ばして天井に激突した。棚からぼろぼろと物が落ちてくる。危ないよ、大きな家具が落ちてきたら死んじゃうじゃない。私は近くの棚に避難しようとしたが、魔王が静かに言う。

「余の側にいれば物に当たることはない。ガーグ、お前も来い」

魔王が言うと、ガーグが怯えた表情で近寄ってきた。そして私の近くへ来ると、非常に申し訳なさそうな顔で体育座りをする。怯えて逃げたことを気にしているのだろうか。私は彼の近くに同じように座って言った。

「怖いよね……あんなのからは逃げるのが正解だと思うよ」

ガーグは一瞬私の顔を見てから、首を左右に振ってひざのあいだに顔を埋めてしまう。

今は何を言ってもだめそうだ。

私は顔をあげて様子を見る。すると、魔王は結界（だとしか言いようがない）ものを張ったらしく、私たちの周辺は透明な半球状の膜に覆われていた。それが落ちてくる物と粉塵をすべて弾いているのがわかると、私は気が抜けた。なんとか命は助かりそうだ。そう思うと、ふいにおかしさがこみ上げる。

そうだよな。なんてったって魔王なんだもの。落ちてくるモノを防ぐくらい何でもないよね。けれど、このままでは物置きが壊れてしまう。私は結界の中に入ってきたバルトの姿を確認すると、ふたたび上に目を向けた。

さらには、怯えた風の黒毯たちも結界に入り込んでくる。たちまちふわもこに囲まれてしまう。こんな状況じゃなければちよつと幸せかもしれない。けれど、今は色々怖くてそれどころではなかった。

大きな青い、例えるなら龍のような魔物は、何度も天井に体当たりを食らわせつづけている。やがて天井が派手な音を立てて崩れ落ち、上空へとびる塔の先端が視界に映る。そのまま、龍は空中を泳ぐように塔へも体当たりして壁を破壊すると、外へと出て行ってしまった。

「ちっ、お前たちはここで大人しくしている。すぐに余の配下の中でも戦闘力の高いものが駆けつけるはずだ、余は奴らを追っ」

そう舌打ちして言うと、魔王の背中から音もなく羽根が生えた。

ガーグと同じようなこもり羽根みたいなものだ。私はその姿を見て、まるで悪魔みたいだと思いながら、言った。

「あの、気をつけて！」

すると、魔王は驚いたように私を見るとほのかに笑った。すごく嬉しそうな笑みだ。こっちの心臓を止めようとしているとしか思えない。魔王はその顔のまま、返事をしてくれた。

「心配はいらない」

そう言い置くと、彼はばさりと羽根をはばたかせて結界の中から出て行った。

私はそれを見送ると、ふたたび物置きが崩れていくさまを見る。魔王の結界のおかげで、物が落ちてきて危険なこともないけれど、綺麗なモノたちが壊れていくのを見ると、少し悲しくなった。

すると、結界の上から重いものが落下したような、ずしん、という音が響く。私はまた顔をあげた。そして、思わず小さく悲鳴をあげる。結界の上に、牛の怪物が乗っていたのだ。

「ふん、さすがの魔王でも三体相手になんかしてられないよな。さて、そのの女、こっちへ来い」

牛は若い男の声で言う。どこか粗野な響きがあり、少し掠れのある声だった。

「嫌です！」

私は即答した。普通のホルスタインの三倍はありそうな牛の側に

など行きたくない。全身全霊で拒否したい。すると、牛は複数の目で私を見やり、言う。

「お前の意思なんかどうでもいい。必要だから連れていくだけだ、望みがあれば言えば叶えてやるぞ」

まるで魔王みたいなことを言う牛。何でそんなに私はこの魔界だと有用なんだろう。いったい何をしたというのだ。前世の行いで何か悪いことでもしたのか。

「貴様！ カトブレパスめが、お妃さまを連れていかせはせぬぞ！」

バルトが叫んで、私と牛の前に立つ。彼は腰の大剣を抜いて構えている。もちろん、片手で。だつて左手には彼の首がのつているのだから。そんなバルトを、牛は大きな鼻を鳴らして嘲笑う。

「けっ、お前なんか俺が止められると思うなよ。下っ端のデユラハン風情が」

そう言いながら、牛は結界が侵入者を近づけまいとして放つ雷撃をもともせずに、中に侵入してくる。バルトは私たちの前に立ち、微動だにしない。彼は先ほど言ったとおり、決死の思いで私たちを守るつもりなのだろう。とはいえ、申し訳ないのだが、彼だけでは心もとないのも事実だった。

魔王の言っていた配下の者たちはいつここに来てくれるのだろう。この城にどれだけの魔物がいるのかは知らないが、早く来ると私は祈った。見かけは怖いが、今は彼らが頼りである。正直、ちゃんと話を聞いてくれる魔王の城にいるより、目の前の牛の怪物に連れ去られる方が何倍も怖かった。

私は恐怖から思わずガーグの手を握る。彼の方も怖いのか、私にしがみついていた。その小さな体は震えている。最初に彼を見たときに抱いた嫌悪感などすっかり消えていた。

そんな私たちの眼前に、ふわふわと薔薇の花びらが舞い始める。

私は何が起こったのかと首を左右に動かしてみた。すると、牛の右側に人の姿をした黒いマントの青年が、艶やかな微笑を浮かべて立っているのが見える。それが先ほど空中で言い争いをしていたうちのひとりと気づいて、私は青ざめた。

【13 牛と吸血鬼】

「抜け駆けは許さないよカトブレパス。その娘は僕の奴隷にするんだから」

美しいはちみつ色をした巻き毛の、彫像みたいに整った顔の青年が言う。ヴィクトリア朝の紳士みたいな恰好をして、ステッキを持った姿は妖しく美しい。薄く官能的な唇からは、鋭く輝く牙がこぼれ見えている。彼が巻き散らかすピンクの薔薇のせいでよく見えなけれど、大きめの瞳は魔王のそれとは異なる血色に輝いていた。

彼の正体は私でもすぐにわかった。

私の好きな少女漫画ではポピュラーな存在。

ヴァンパイア、つまり吸血鬼だ。

だいたい、まとってるマントが特徴的すぎる。なんでそんなに襟をたてる必要があるのかが正直謎だ。牙があるから顔を隠す必要があるのかなと勝手に想像して現実逃避してみる私。

まあ、それはいいんだけど、とにかくさつきから無意味にまき散らしてくるこの薔薇邪魔なんですけど。うざったいんですけど。視界が一気に桃色の吹雪に染まるとか、桜並木を歩いているならまだしも、花びら一枚一枚が大きいので、口にへばりついたりして、かなりうっとうしいんですけど。

見れば、ガーグも必死に花びらを払い落しながら、埋もれてしまっている黒毬たちを掘りだす作業に忙しい。バルトも腰まで埋まっ

てしまっていた。私はガーグを手伝いながら、牛と吸血鬼の会話に耳をそばだてる。

「何だよ、お前もシー・サーペントのじじいに魔王押しつけてきたのか。やるうつてんなら相手になってやるよ。だがここではだめだぜ。そいつが傷ついたら俺の世話係がいなくなる。世話をさせるのなら、人間に限るからな」

「それには僕も同意見だ。魔界の住人の血なんか吸っても不味いばかり。しかも若い娘だからね、君にあげるつもりはないよ」

またしても火花を散らす牛と吸血鬼。私は世話係にも食糧にもなりたくないかないんですけど。だが、魔物たちは勝手に話を進めていく。

「その娘を口説き落とすのは決着がついてからだ、命拾いしたな、デュラハンにガーゴイルの小僧」

牛はそう言い放つと、まるで八エが大量に飛んでいるかのようなぶうんという音とともに、ガーグが使った移動魔法陣と良く似たものを出現させて、どこかへ消えた。

「僕の可愛い奴隷ちゃん、もう少し待ってて。やつと決着をつけたら、天国へ連れて行ってあげるからね。そうすれば永遠の命もあげよう、じゃあね」

吸血鬼は口に指を当てて投げキッスをすると、同じように魔法陣を出して消えた。

あまりの寒さに、全身に鳥肌がたつ。

私は彼らが消えた虚空を見て、恐ろしい疲れを感じた。自分がしでかしてしまった事態の重さをひしひしと感じる。過去に戻るものならば、失態をした自分を締め上げてやりたい。

ついでに、妙な確信がうかぶ。恐らく、あのデカくて青い龍も同じことを言いそうだ。

いわゆる逆ハーレムに近いと思う。しかし、全く嬉しくない。何といっても、言い寄ってくるのは魔物ばかりなのだ。もしかしたらこれって体質なんだろうか。そのせいで人間の男にはモテなかったとしたら、最悪だ。そんな考えが頭の中に浮かんでは消える。

「ふう、内輪もめで去って行ってくれましたな。しかし、厄介なことになりましたぞ」

「ごめんなさい。私の不注意が招いたのに何も出来なくて」

私はしょんぼりとうなだれる。自分のミスなのに、自分でそれを取り返せないなんて、悔しい。

「そんなことは、私の注意が足りなかったのも原因なのです。さきほどはかばって頂けて、我は心から嬉しかったですぞ。しかし、責任はとらねばなりません」

「そんな、責任をとらなきゃならないのは私です！ バルトさんが気に病むことじゃありません」

「しかし……」

バルトは納得のいかないようすでうなる。兜のすきまからのぞく目が、苦悶に翳っていた。

「それならオレも同罪っス、お妃さまは気にするなと仰いましたが、オレは側仕え失格っス！」

「そんなことない！ あんな怖い目の前にしたらふつうは逃げて正解なの。もう、ふたりともお願いだから気にしないで。そんなに言われたら私がつらいじゃない。せつかく友だちになったのに。これから側においてくれるんでしょ？ どうせまた私のことだから世話かけるはずよ、それで帳消し！ わかった？」

私は半ば本気で言った。こんな訳のわからないところに連れて来られた私に、ずいぶんと親切にしてくれたのだ。ガーグは私のために見た目も変えてくれたし、バルトはたくさん世話を焼いてくれた。もう十分だ。

ふたりはしばらく困惑したように私を見ていたが、やがてうなずいてくれた。

「わかりました。魔王様がお許しになれば。ずっとお世話いたしましよう」

「オレ、頑張るっス」

何やら感動したように言われて、私は照れ臭かったがとりあえずほっとした。

「……あ」

そのとき、魔王の言っていた配下の者どもが物置きの入り口から

なだれこんできた。私はそれを見て、遅いよ、と内心ぼやいたものの、彼らの姿に安心している自分に気がついた。どうやら、魔界生活に少し馴染んできてしまったようだ。

あまり喜ばしいことではないが、帰してもらえない以上仕方ないか、と思いつながら、私は荒れた物置きを眺めて、言った。

「さて、ここからさつき集めた物を見つけて、片づけないとね」

【14 三本の腕輪】

さっそく掃除を始めた私だったが、スムーズにはいかなかった。

なぜなら周囲の魔物の皆さんに、

「やめてくれ」

「そんなことはさせられない」

「魔王様に殺される」

と泣きつかれたからだ。だが、私はゆずらなかつた。だって、自分のせいでこの物置きはこんな惨状になってしまったというのに、片づけの手伝いくらいはさせて欲しい。このくらいはしないと、気が済まないではないか。

私はバルトやガーグに、触っても大丈夫なものを聞きながら床に落ちたものを拾い集め、黒毬たちと一緒にほこりを集めて歩いた。顔をあげると、赤い空が見える。いつも夕暮れ時のような空だ。

少し疲れを感じて、私は手を休める。

そしてふと思う。ここの時間の進みはどうなっているのだろうか。

昨日は周囲に流されるまま入浴から食事、就寝まで流れ作業で終わってしまったけれど、時計もないし、空は常に夕焼け状態。私はお腹に手を当てて思った。空腹くらいしか時間をはかるものがない。

これでは困る。後で誰かに時間を確認する方法を聞いてみなくちや。

そう思ったとき、私は床に転がる三つの瓶を見つけた。近くには、その瓶が納められていた透明なガラスケースが転がっている。

「もしかして、封印するとか言ってたからまた必要になるのかな」

もうすでに中身の危険物たちは出てしまっていることだし、ちゃんと棚に戻しておこう。私は瓶のあるところまで行くと、青い瓶を拾い上げた。その時、また瓶が淡い輝きを発し始めた。

「えっ、まだ何かあるの！」

油断していた私は、慌てた。しかしもう遅かった。

瓶は溶けたガラスのように形を変え、私の左の手首にくるんと巻きついてしまう。それにつられるように、他の赤と黄の瓶も輝きだし、私のところへ飛んでくると、同じように巻きついてしまった。

「やだ、ちょっと、取れないし……何よこれ」

自分のうかつさを再び呪いながら、これ言った方がいいよねと内心思いつつ、またやらかしたのか、と思われるのが嫌で声を掛けられない。私は嫌な汗をかきつつ、なにごともしませんように、とひっそり祈った。

やがて、魔物たちもお腹が空いたのか食事の時間となり、私も一旦お妃の部屋へと戻ることとなった。

お昼ごはんは宅配ピザだった。大好きなので、ちょっと嬉しい。

それを持ってきてくれたバステトにお礼を言っと、早速頂くことにした。ウーロン茶とお手拭きもついている。それでちゃんと手を拭いてから、久しぶりに食べる。宅配ピザは私の収入で買うには高いので、結構ごちそうだ。

部屋はまだピンク真っ盛りだが、それは無視して、クロスのかかった丸いテーブルに置かれたピザの箱を開ける。おいしそうな匂いが室内に放たれて、私は知らずほほ笑んでいた。

ちなみに、魔物たちには食事の必要なものとそうでないものがない、バルトは必要ないのだそう。ガーグは、魔物たちが食事をとるための食堂へ行っている。

私は部屋で食事をとりながら、ふと、魔王はお金をどうしているのだろうか考えた。

「だってこれ、○ザラの○タリ○ーナだし、多分昨日の牛丼も今朝のうどんも出前だろうし」

つぶやいてからふと気づく。まだ魔王は帰ってこないようだ。いくらなんでも遅い。

あの青い龍がどれだけの強さなのかは私にはわからないけれど、魔王というのだから、この魔界とやらで一番強いはず。なのに、こんなに戻ってこないのは、やはりとんでもなく強い魔物だったのだろうか。

そんなことを考えながら食事をつづけていると、突然扉がひらいて、その魔王が入ってきた。彼は驚いている私のそばまで来ると、腕をつかんでそこにある三本の腕輪を見てため息をつく。

「やはり、こうなってしまうていたか」

声に、やや疲れがにじんでいる。やはり大変だったのだろうか。聞いてみたいが、変なことを聞いて逆鱗に触れでもしたら怖いから聞けない。代わりに私は謝った。

「あの、ごめんなさい。また使うかもしれないと思って、片づけようとしたらこんなふうになっちゃって……どうやっても外れないんです」

あのと、部屋へ戻ってきてから必死に引っぱったり回したりしてみたのだが、どうしても抜けないのだ。せっけんで滑りを良くする方法も試してみたかったのだが、あいにくと手を洗う場所がなかった。

「いや、忘れていた余の責任だ。これは魔界に存在する中でも希少な鉱物で、魔力を吸いとり、無効化させる力がある。魔力を持たない魔物に加工させ、術式をほどこし、作り上げさせたものだ」

魔王は腕輪自体には触れないようにしながら説明をしてくれる。

私は黙って聞いた。

「そして、また奴らがここから解放されぬよう、魔力を持たぬ者には開封できぬようにしておいたのだ。同時に、開封したものでなければ、これを使えないようにした。余が封じられてしまわないように……わかるか、この意味が」

私は考えた。そして、理解した。

いや、出来れば理解しなくなかったのだが。そして、私は訊ねた。

【15 ふたつの贈り物】

「つまり、あの三体を封じられるのは私だけってことですか？」

「その通りだ」

ほとんど無表情で答える魔王。私は、ますます面倒な事態になったことを感じ、激しい疲れを感じた。だが、彼はすぐに、私を安心させるように淡く笑う。

「大丈夫だ。余もついていく。余が弱らせたところを封じてくれれば良いのだから」

「そ、そうですね」

答えつつ、私は内心帰りたくてたまらない気持になった。けれど、今回のことは私が悪い。そうするしかないなら、やるしかないのだろう。今までだって、そうやって人生を乗り切ってきたのだ。

「わかりました。私はどうすればいいのか教えてください」

そう言うと、魔王はますます笑みを深めた。その長い指が、あごにかかる。私はぎょっとして体をのけぞらせるが、あごにかかった指の力はすごく強く、動けない。というか、痛い。

「何と素直な……今まで何人も人間の女を連れてきたが、このような事態になっても混乱したり泣いたりしなかったのはお前が初めてだ」

「そ、それは災難でしたね」

「やはり、何としてでもお前を妻にしたい。早めの返事を期待している、むろん、断ることは出来ないがな」

そう告げると、あごから手を離し、魔王は部屋の入口へ向かう。私は椅子に座りなおして、その背を見つめる。こ、怖かった。心臓が早鐘を打っている。

「後で封印のやり方について教えよう。食事の邪魔をすまなかつた。では、広間で待っているぞ。ああ、そうだ、忘れるところだった。お前にこれを渡しておこうと思ったのだ」

魔王は退室しかけていた足をとめ、上着のポケットから、透明な青い雫をそのまま固めたような美しいペンダントを取り出した。白い手袋をはめた手の上で、銀色の鎖が涼やかな音を立てる。

「なんですか、すごく綺麗ですけど」

「ガーグが持っていたものと同じ魔法石だ。スイテルⅡホナと唱えた後で行きたい場所を告げると、一瞬で移動できる魔法陣が現れる。そのたびに歩いて広間へ来るのは面倒だろうと思っただ、人間用に調整してあるから、ガーグのものより移動しやすいはずだ」

言いながら、魔王は私の背後に回ると、それを首につけてくれた。私はなんだかくすぐったくて、少し笑ってしまった。

「えと、ありがとうございます」

「いや、これで気軽に余に会いに来てくれるようになればそれでい

い
「

穏やかな声で言うと、魔王は今度こそ部屋を出て行った。私は、胸元に輝く青い石を見る。気軽にと言われても、当分むりなように思う。それでも、魔王の気づかいは嬉しかった。

「さて、残りも食べちゃおう！」

せっかくのごちそうだ。私は気を取り直して、ピザを胃につめる作業に戻った。

「スイテル!! ホナ、ガズルラーヴの大広間？」

食事を済ませると、私は魔王に言われたとおりにしてみた。大広間の名前はわからなかったので、城の名前も一緒に言ってみる。すると、石が青白く輝いて、ガーグの作りだしたものよりも淡い色の魔法陣があらわれた。

「よし、行くわよ！」

私は言うと、飛び込んだ。魔王の言ったとおり、ジェットコースターに乗っているようだった前回の移動ほど圧はかからなかった。しかし、エレベーターの下りに乗っているときのお腹がふわっとする感覚は健在で、大広間の入り口に出たときはほっとした。

なかなか慣れないや、この移動方法。

私はそんなことを思いつつ広間に入っていく。すでにガーグとバルトがおり、魔王は手に何かを持って玉座にかけている。他に魔物たちの姿がないのは、やはり物置き掃除に駆りだされているからなのだろう。

「来たか……では、これをお前に」

私が近くまで歩いていくと、魔王はさっさと玉座から下りてきて、手に持っていた「それ」を渡してきた。え、あの、これをどうしろと。とりあえず受け取りながら、私は訊ねる。

「あの、もしかして封印をするのにこれを使う訳じゃあないですね？」

「いや、これを使う。これで奴らを渾身の力で叩けばその腕輪は小瓶の形になり、奴らは中に封じられる。ただし、正確に頭頂部を狙わなければならないがな」

「ま、待って下さいよ。だってこれ『ハリセン』でしょう？」

そう、魔王がおもむろに私に渡してきたのは、ひどく丈夫そうだがなその素材でできている「ハリセン」だったのだ。これは、私に突っ込めと言っているとしたか思えない。あんな怖い魔物たちに、漫才みたいなことをしろというのか。

「そうだな。まあ、以前はそのような形ではなく、羽をあしらった美しい扇子だったのだが、作らせた細工師が当時始まっていた人間界のテレビとやらに夢中になっていてな。強力そうな形を見つけたと狂喜乱舞して是非その形で作らせて欲しいと言ったので、好きに

しろと答えたらそうだったのだ」

なんてこった。私はテレビの影響力がこんな場所にまで及んでい
ることに恐怖した。

「お似合いっスよお妃さま！ それを使って、お妃さまに無礼な口
を叩いた奴らを封じてしましましょう！」

「え、ええ」

私は「ハリセン」の柄を強く握りしめながら誓った。ガーグには
あとできつちり教えておかなくてはならない。似合っていると
言われて嬉しいものと、殴りたくなるものがあるということ。

「そうだな。なかなか凜々しいぞ、さすがは余の妃だ」

魔王にも教えなければならぬようだ。

ただひとり、バルトだけは何も言わない。兜のすきまからのぞく
目が、憐憫に満ちているように感じるのは気のせいだろうか。でき
れば気のせいであって欲しくはないのだが。彼にまで称賛されたら
さすがにこの場で突っ込みを入れてしまいかねない。

そんな私に気づくようすもなく、魔王は忠告してきた。

「だが気をつけるよ。それで叩いた魔物はすべて小瓶に封じられて
しまうからな。奴らや、危害を加えてくるもの以外には使えな。特
に余や、この城の魔物たちにはな」

「わ、わかりました、じゃああの、物置きに行ってきます」

私は虚ろな気分で告げる。

「余の妃は掃除など自分でしなくても良いのだぞ？」

「いえ、部屋に使いたいものをもう一度集めたいので、行きたいんです。それに、掃除は好きですから」

私が言い張ると、魔王は「そうか」とふしぎそうな顔をして言った。

「では余も手伝おう。どうせいつも椅子に座ってばかりで退屈だったのだ。余の妃がどのような部屋を好むのかも知りたいしな。さあ、行くぞ」

魔王は誰にも口をはさませずに言い放つと、私たちを追いたてはじめる。私はハリセンの柄を握りしめながら、叩いちゃだめだ、と自分に言い聞かせた。普段はしまいこんでおいたほうがいいのかもしれない。

私はそう思いながら、魔王とガーグ、バルトと連れだって、物置へ向かった。

ちなみに、魔王と一緒に行った結果、物置で作業していた魔物のみなさんが恐慌状態におちいり、中々片づけがはじめられなくて、その日の夜もピンク部屋で休むことになったのだが、それはまた、別の話。

【16 魔界生活六日目】

こんにちは。今日もいい天気ですね。

太陽がないからわからないけど。雨が降らなければ私にはすべていい天気。

魔界に連れて来られて今日で六日目。無断欠勤は四日目に突入。完全にクビまっしぐらなんだけど、魔王は帰さないの1点張り。私は今日も魔王と談判したが、結果は変化なし。ああ、帰りたい。

そのうえ、私のミスで解きはなってしまった三体の魔物たちの行方はようとして知れず、封印に向かうことも出来ない始末。

私はあきらめて、今日も部屋の模様がえにいそしむことにした。何か違うことしていないと気が変になりそうだ。失恋のことも思い出さなくなかったし、なるべく忙しく動き回ることに決めた。

昨日までにやったことは、家具を落ち着きのあるものに変更し、カーテンは、けばけばしいピンクから、ベージュと優しい桜模様にベッドカバーは、光沢のあるピンクのサテン生地から、薄いブルーの無地に変えた。それなりにくつろげる部屋になつてはきたものの、まだまだといった感じだ。

それと、バルトやガーク、時々魔王に、ずっと気になっていたことを聞いてみた。

まずは時間。ここでは太陽による明暗や、気温変化などはないものの、流れそのものは二十四時間周期で、あっちと同じらしい。頼

んで時計を設置してもらったので、今が何時何分かはわかるようになった。ちなみに、現在の時刻は午前11時32分。あと少しでごはんの時間だ。

それに、そのごはんだ。代金はどうなっているのかと魔王に聞いてみたのだが、人間たちに混じって暮らしている魔物が思いのほか結構いるらしく、お金は彼らから献上品という形で納められたものを使っているのだそうだ。それに、中には事業をしている魔物もいるとかで、結構な日本円がここにはあるとか。

私は部屋の整理をしながら、ふと、向こうから来るときに持ってきた傘を見た。壁に立てかけて置いておいたものを手にとって広げてみる。今まで私が住んでいた社宅の部屋と異なり、この妃のための部屋は広く、傘をひろげる余裕すらある。

「青空が見たいなあ」

くるくると、空色に雲の模様が描かれた傘を回して思う。

そつえば、雨が降らない、と。

魔王はああ言っていたものの、このまま雨女ぶりを発揮できなければどうなるのだろう。魔王はなにもしなかったとしても、周囲の魔物たちに役立たず認定されて消されるのではないだろうか。そんなの嫌だ。お願いだからちょっと降って欲しい。

正直、雨に降って欲しいと思ったのは久しぶりだった。学校のマラソン大会のときにはよくお祈りしたものだ。まあ、その時は降らなかったけど。

なにはともあれ、一番ありがたかったのは、古色蒼然としたドレスたちから解放されたことだ。古めかしい上に、魔王の元お妃たちが残して行ったドレスを日々着るのは、精神的にも結構きついものがある。

物置には、男性ものだったが洋服もあり、私は嬉々としてそれを着ることにしたのだが、しばらくは周囲の魔物さんすべてに難色を示された。まあ、押し通したけどね。

そのあとで魔王にも、いつも着ていたような服装をさせて欲しいと頼んだ結果、通販のカタログを渡された。選んだものは地上で人間に化けて暮らしている魔物が受け取り、魔界に届けてもらうことに決まった。ようやく恥ずかしい思いをせずに済むようになって、私はほっとした。ちなみに、服は昨日届いた。

今の服装は、水色で丈がひざまであるチュニックを、白いレース飾りのある半そでTシャツの上に重ね着し、下はジーンズにスニーカーという動きやすいものだ。本当に落ち着く。というか、自分の雀の涙な給料で買った服よりやや上等なのがなんともいたたまれない。

そんなことを思いつつぼんやりしていると、扉がノックされた。軽快な音だったので、すぐにガーグとわかる。何か用なのかな。私は傘を閉じて、ベッドから立ち上がった。

「お妃さま！ 魔王様が大広間に来てほしいと仰ってますっス！
ようやく、カトブレパスの足取りがつかめたそうなんス！ 行きましようっス！」

「かとぶればす……ああ、あのデカイ牛？」

一瞬何の足取りがつかめたのか分からなかったが、私は数日前の記憶をたぐり、ようやくやや粗暴な言葉づかいをしていた魔物のことを思い出す。確か、大きな黒牛がそう呼ばれていたはずだ。

「そつっス！ やつの犠牲者が発見されたんス」

「犠牲者……」

ガーグの口から発せられた言葉に、私はうなだれた。自分がミスをしなければ、出ることのなかった犠牲者だ。見ず知らずの魔物に謝りながら、私は訊ねた。

「じゃあ、ついに封印に向かうのね？」

「多分そうなるんじゃないっスかね。魔王様がお話するって言うてますから、行くっスよ！」

ちよつと緊張気味のガーグを見て、私も気合いが入る。そのとき、頭にぼとつ、と何かが落ちてきた。私はすぐに正体がわかった。

「何、クロスケも一緒に行くの？」

頭頂部に手をやると、ふわふわした感触がする。黒毬である。

どうやら、一緒に掃除したりしているうちに、そのうちの一匹になつかれてしまったようなのだ。いつもお妃の部屋に来ては、ホコリ掃除などをしてくれるようになった。バルトが言うには、オスの黒毬だとのことなので、クロスケと呼ぶことにしたのである。

クロスケは体を上下させてうなずくようなしぐさをした。私は苦笑して、魔王のくれたペンダントに触れる。すると、ガーグが部屋の片隅に見えないよう置いておいた「ハリセン」を持ってきた。

「これを忘れちゃだめっスよ！ お妃さま」

「あ、うん……そうだね。ありがとう、じゃあ行こう」

私は顔を引きたせながらそれを手にし、ガーグの手をとると言った。

「スイテル¨ホナ。ガズルラーヴの大広間」

【17 首輪な指輪】

大広間につくと、魔王とバルトの姿が見えた。他にも、魔物の中でも強そうな側近たちがいる。彼らは魔王の前にひざまずき、顔をあげて何かを言っている。バルトも同じようにひざまずいているが、彼らの後ろの方にいる。

並び順は、地位とか階級を現しているようだ。バルトはどのくらいの位置にいるのだろうか、という疑問が浮かぶ。

私はガーグと連れだって歩いていく。すると、魔王はすぐに気づいた。

「おお、来たか。封魔扇ふうませんもきちんと持ってきているようだな」

え、このハリセンそんな格好いい名前だったの？

どうしよう、激しく似合わない。指摘したいけど、していいものなのかどうか迷う。だって、振り返った側近の皆さんが「おお、あれが封魔扇」「なんと美しい」「流石は彼の細工師の作!」などと口々に言うのだ。似合わないなんて言えない。

微妙な気持ちのまま、私は歩いて行って側近さんたちの後ろから、小さく頭を下げた。

「あの、犠牲者が出てしまったと聞いたのですが……」

「ああ。それより、もっとこちらへ来い。お前は余の妃なのだ。そんなところできしこまっている必要はない。さあ……こちらへ」

手を差し伸べられ、私はびくつきながら歩いて魔王の隣へ行く。

近くまで行くと、魔王は玉座から立ち上がり、淡い笑みをうかべて私の手をとると、左の薬指に持っていた指輪をはめた。プラチナ色に輝く、繊細な指輪だ。台座には赤い石がはまっている。ルビーに見えるが、ちょっと違うようにも見えた。

私はぎよつとして、魔王を見やる。

「あの……何ですかこれ。私、まだお返事してないですよね？ あと、これ金属製でしょう？ 金属はつけられないんです。かぶれちゃうので……」

「それは結婚指輪ではない」

魔王のセリフに、私は首をかしげる。

「本来なら城に閉じ込めておきたいところなのだが、今回そうはいかなくなってしまった。ゆえに、その代わりだ。余からお前が一定距離離れると、勝手に結界を張り、お前を閉じ込める。解放できるのは余だけだ……お前が逃げ出さないようにな。それと、移動魔法で逃げようとしても無駄だ。あれは城内でしか使えないように調整してあるからな……。かぶれ、についてはわからないが、ならば指輪自体に結界を張って対応してみよう」

私は指輪をしげしげと見て思った。綺麗だが、ようするに首輪じゃないか。しかも、魔王の言いつぶりからすると、これも腕輪と同じで外せないのだろう。

「……別に逃げませんよ。だって、あなたの近くが一番安全だって仰っていたじゃありませんか」

上目づかいに見やると、魔王はうなずいた。

「確かにな。まあ、万が一を考えてのことだ。余が側にいてやれないときに、お前の身を守る役目を果たしてくれるしな。愛しい妃が傷つくのは困る」

そう言つと、魔王は私の長い髪をひとふさつかんで、口づける。

どこか面白がっているような目だ。心臓が一回転したような気分で、私は息を止める。

全く、なんて心臓に悪いことをするのだろう。しかも、何という色気。こんなの隣の隣に並んだら自分なんか見劣りしまくる。ここが魔界で良かった。人間の美的感覚あんまり関係ないし。やがて魔王は髪から手を離すと、ふたたび玉座に収まった。

私は恥ずかしくて、バルトの大きな背中に隠れたい気分満点だったが、そこは押さえて魔王の隣にややつつむきがちに立つ。うう、小心者にはつらいよ。

「そういう訳で、余はしばらくここを留守にする。留守は頼んだぞ」

『はっ！』

側近の皆さんが大声で返す。耳が痛い。

「では行くぞ」

言って、魔王は歩きだした。私はそのあとを小走りについていく。魔王の歩幅は結構あるので、そうしないと遅れてしまうからだ。そんな私の後ろにはガーグとバルトがつづいた。

すると、魔王が後ろを見て、立ち止まる。歩く速度をゆるめてくれたのだろうかと思いきや、彼は追いついた私の手を取ると、笑った。何の前触れもなく、移動用魔法陣が出現する。淡く、どこか紫がかった色合いの陣に、私は魔王に引つ張られるままに飛び込んだ。

目の回るような感覚の中、私は思わず魔王にしがみつく。

そして、私はようやくガズルラーヴ城の外に出ることが出来た。

【18 馬車の中にて】

ようやく外に出られた私は、大きく息をついた。が、魔王にしがみついたままだったのに気づいて、慌てて離れる。

「別に離れなくても良いだろうに」

「い、いえ、私なんかがつついたままじゃ動きにくいですよきつと」

笑ってごまかす。魔王は気に入らなそうだったが、私は視線を反らして辺りをうかがった。

何にしても、壁のない場所なので、解放感が違う。これで晴天が拝めたら言うことないのに、と思いつつ、無理なモノは無理、と頭の中で可能性を叩き潰す。視線をあたりに巡らせると、ガークともここに訪れた時のことを思い出した。

門番は相変わらず直立不動でそこにいる。

やがて、きよろきよろしながら周囲を見てみると、バルトがとても大きな黒い馬を引いてくるのが見えた。しかし、私は思わず逃げだして城の中に戻りたくなった。わかつてはいたが、首がなかったのだ、その馬には。

想像していなかったわけではない。けれど、実物を目にするとどうしようもなく気持ち悪い。なにしろ、切断面がそのままなのである。そこは覆うかどうかして隠して欲しい、と私は痛切に願った。

「さあさあ、ようやくご紹介することが出来ますな。これが我が愛馬、ティフォーネです！」

バルトが自慢げに馬の首を撫でて言う。どこから聞こえてくるのやら、いななきが聞こえた。

私は普通のサラブレッドよりも大きなその馬の首を、思わず探してしまう。その馬につながれているのは、黒い箱型馬車だった。もしやあの中に、と思ったものの、同時に、自分がそこに乗り込むことを考えて恐怖する。

「あの、もしかしてこの馬車で行くんですか？」

「そうだ」

「移動魔法って外では使えないものなんですか？」

「いや、使えるには使えるが、お前には耐えられないだろう。それに、一度行ったことのある場所しか行けないのだ。余も、今回行く場所は初めて足を踏み入れるし、ガークもバルトも同じだ」

「ああ、そうなんですか」

魔王の答えに、私は肩を落とす。わざわざ長いこと怖い思いをしなくても、移動魔法で一瞬だけ怖い思いをすれば済むかもしれないなどと虫のいいことを考えたのだが、いくら魔界という常識の通用しないような場所であっても、そこまで都合よくはいかないらしい。

「大丈夫ですぞお妃さま、ティフォーネの足ならばすぐです！」

バルトが胸を張って言う。いや、そういう意味じゃない、と言いたかったけれど我慢した。なぜなら、彼がものすごく張り切っているような気がしたからだ。

私は、曖昧な笑みを浮かべて「すごいんだね」とだけ言っておいた。

「では乗り込むとしよう。面倒なことはさっさと終わらせるに限る」

魔王は面倒そうに言った。それには私も同感だったが、同時に、怖さがつきまとう。あの大きな牛に近寄って、このハリセンで頭を叩くなどということが私に出来るだろうか。

私は不安を抱えたまま、魔王とともに馬車に乗り込んだ。

中に馬の首が乗っているということもなく、座席に収まると、馬車が動き出した。ガングは外を飛んでいくのだそうだ。中の座席は対面式になっていて、魔王と向き合うかたちになる。私はちよつと緊張した。こんな狭い中で、ふたりきりというのは経験したことがない。

やがて、馬車はがたつきながらスピードを上げる。気がつくと車並みの速度にまで達し、しかも未舗装の道ならぬ道を進んでいくため、激しく揺れる。酔うかもしれない、なんて甘かった。むしろ、怪我しないよう、座席にしがみつかなければならぬほどだ。

すると、魔王が手を伸ばして私の腕をとった。

「え、あの」

そのまま、ぐい、と腕を引つ張られ、横に座らされる。その途端、体を感じる揺れが小さくなった。驚いて魔王の顔を見ると、口もとに薄く笑みが浮かんでいる。

「……あ、ありがとうございます」

「苦しそうだったからな。もう少し余を頼れ……お前は妃なのだからな」

私は困惑しながら笑った。少しだけ、胸が痛む。けれど、考える余裕はない。なにしろ、状況だけ抜き出せば、狭い馬車の中で、美形男性に肩を抱かれているのだ。未経験の状況に、妙に焦る。

こんなふうには、誰かに触れられたことはない。私は、捨てられた子どもだった。父親は最初からいなくて、母親は気づいたらいなかった。幼すぎて、何も覚えていない。怒りや恨みを感じるような記憶は、なにひとつ残っていないかった。それだけは、不幸中の幸いだろう。

といつても、小さい頃は人と違うことが悔しくて、誰との間にも壁をつくっていた。そんな私を誰もが遠巻きにした。それでは生きづらいと、学校に行くようになって感じ、どうすればいいか考えた結果、表面をとりつくるって、社交のルールにのっつって対応すれば大抵のことは何とかかなるとわかった。

そのせいか、言われた言葉がある。ずっと心の傷だ。

笑顔がうさんくさいよ。

それ以来、人に本音を言えなくなった。だから、先輩に告白も出

来ないままだったのだ。

私は、肩に触れるぬくもりに、顔をうつむけた。嫌なことを思い出してしまった。優しくしないで欲しいと思った。勘違いしたくない。それに何より、彼は魔王で、人間ではない。私はそんなことを言い聞かせながら、体を縮めて、早く目的地へ着いて欲しいと思った。

【19 湖のカトブレパス】

そんな思いが届いたのか、ほどなくして馬車は止まった。が、停止すると同時に壊れるんじゃないかと思うくらい激しく揺れる。魔王に支えられていなければ天井か床に頭を打ち付けていたところだ。顔を引きつらせていると、扉が開いてバルトが顔を出す。

「到着しましたぞ！ どうです、早かったですでしょう？」

そう、確かに速かった。ただし、早くても命の危険にさらされるのは困る。どう答えたものか頭の中で言葉を出したりしまったりしていると、魔王が先に口を開いた。

「早いのは結構だが、中は危なかったぞ。もっと安全運転を心掛けたほうが良い」

「そ、そうでしたか。申し訳ありません……つい」

バルトは大きな体を小さくしてうなだれる。首がない代わりに、肩がものすごく落ちていた。私が声を掛けようかと迷っていると、近くにガーグがふわりと舞い降りる。

「到着したっスね、見て下さいよ。あいつ、もうあんなに魔物を石化させてるっス」

私の近くに立ったガーグは、初めて聞く硬い声で言う。彼の視線を追いながら、私は馬車の中から周囲をながめる。空はガズルラー

ヴ城にいたときと同じだが、岩石と土、砂ばかりだった光景が一変していた。なによりも驚いたのは、湖があったことだった。

ただし、水は緑色ににごり、湖底からかなり大きな水泡が上がってきては水面で弾けている。久しぶりに水気を見たのは嬉しかったが、なんとも気味の悪い場所だ。

周辺は湿地だったが、魔界は砂漠化しつつあると聞いたとおり、少し遠くを見やれば乾いた大地が見える。残されたオアシスのような場所なのだろう。魔物たちが、ここへ水を求めて集まって来ているのはすぐにわかった。彼らの姿がいくつもあつたからだ。

ただし、その魔物たちすべてが、石像となつて地面から生えていく。

「なに……これ」

「カトブレパスの仕業だ。あいつの能力は見たものを石化させるといふものだからな。自分の意思でコントロール出来るから、全てを石化する訳ではないが」

魔王が説明してくれた。すると、私の頭の上でクロスケが震えるのがわかる。置いてくれば良かったと今さらちよっぴり後悔したが、もう遅い。それに、あの黒い牛は私を世話係にするとかなんとかいっていたから、多分、標的にはされないはずだ。

「これ、元に戻るの？」

「……一度石化させられたら、カトブレパスが元に戻さない限りだめっス」

「そんな」

私は、たたずむ石像の数に圧倒された。自分のせいなのだ……手に持ったハリセンを強く握りしめて、私は激しく打つ心臓をなだめる。怒りがこみあげる。何としてでも、これでもう一度封印するのだ。そして、彼らを元に戻してもらおう。

「そんなに気負うな……事故だったのだから、仕方がない」

魔王が優しく声を掛けてくれる。だけど、私は首を横に振った。

「いいえ、出来ることは何でもします。自分のミスで、こんなにたくさんの命が消えるなんて、そんなの嫌です」

「そうか……ああ、奴が気づいた」

魔王が湖面を見て、表情を引き締める。私は、彼の視線を追いかけた。緑色のどろりとした水面に、ごぼごぼと大きな泡がわき出してくる。泡は次々と湖面で弾けた。それが激しさを増すと、勢いよく水しぶきがあがる。

私たちの目の前に、あの牛がいた。薄いしゃぼん玉のようなものの中に、巨体が浮いている。

「おでましか、言うておくが、簡単に封印される俺様じゃないぜ」

「かつて余にあれほどの大敗を喫したことを忘れるとは、ずいぶんとお目出度い頭をしているな」

魔王が不敵に笑いながら、てのひらを上に向けた。そこに、紫色を帯びた電撃を、むりやり丸い形にしたようなものが現れる。私は驚いて後ずさった。

すごい、魔法だ。映画の中で繰り広げられているような光景が、現実のものとなっている。

「うるせえよ……俺だって対策を考えてこなかった訳じゃないぜ」

黒牛は言つて、首を左右に何度も振る。やがて、巨体がかげろつのように揺らぎ、小さくしぼんでいく。気づくと、黒牛は人の姿に変化していた。私は、ガーンに聞いた話を思い出してぞっとする。人間に化けられるのは、ごく一部の魔物と、凄まじい力を持つ魔物の二通りだけだというものだ。

つまり、相当手ごわいということである。

「ほう、その姿は久しぶりだな、マッシモ」

「魔力合戦するんなら、牛より小回りのきくコツチの姿の方がいいからな。あのときもこうしてれば勝てたって封印されてる間中、ずっと考えてたんだ。今度は負けねえぜ、魔王の地位も、その娘も俺が頂いてやるよ！」

マッシモと呼ばれた黒牛は、そう言つと叫んだ。

「スオール・ストウツファ！ 砂よ、俺の声を聞け！」

【20 魔法属性】

マツシモ 黒牛 の声に呼ばれたように、湖周辺の砂が彼の周囲に集まりだす。しだいに、それはひとつの形をとった。巨大な牛の姿だ。黒牛よりもさらに大きい。マツシモは歯を剥いて笑いなから言う。

「行け！」

巨大な砂の牛がこちらに向かってくる。私の前に、バルトとガーグが盾のように立った。思わず悲鳴を上げかけたが、邪魔になってはいけないと慌てて口を手で覆う。

「お前たちは下がっている。出番は、もう少し後だ」

そう言うと、魔王は空中に飛び上がり、てのひらの上の雷の塊を投げつけた。それは牛にあたり、頭を大きくえぐるが、すぐに砂が集まり、元通りになってしまう。

「お妃さま、もう少し離れましょう。ここは危険です」

「うん」

バルトの言葉に私はうなずいたが、なんとなく、よほど遠くでなければ彼らの戦いの余波から逃げきることは出来ないように思えた。それでも、怖いので私はおとなしく言うことを聞いて、バルトたちとともに、湖から離れる。

「大丈夫かな」

小声でつぶやく。ハリセンを強く握って、私はときおり振り返りながら馬車のところまで行く。赤く、夕焼けのように染まっている空に、黒い点がふたつ舞っている。魔王は何度も雷玉で攻撃を仕掛けてはいるが、相手は形があるようでない砂なので、何度破壊しても元に戻ってしまう。

「相手も考えたツスね」

「え、どういうこと？」

険しい顔で、私と同じように上空を見ていたガーグがつぶやいたので、思わず問う。

「魔王様の属性は炎と雷なんツスよ……魔物は、生まれ持った属性の魔法しか使えないんす。オレは風で、バルト様は闇なんすけど、あいつは砂とか土で、魔王様が炎を使ってもあいつにはあまりダメージを与えられないんす、それどころか、あいつの強度を増す結果になっちゃいますよ」

「そんな、じゃあどうするの？」

魔界に来て日数もたち、そちら方面の知識もだいぶ増えてきた私は、ガーグの説明をすぐに理解した。ようするに、魔王とあの黒牛では、黒牛の方が有利ということだ。

「以前に魔王様が奴を封じたときは補佐する者がいたのです。木の属性の魔物でしてな、ですが、その者はこの魔界が乾き始めてから徐々に力を失い、亡くなってしまったのです」

ガーグより早くバルトが答えた。私は、そんなにここが水不足で深刻だなんて思っても見ず、改めて自分がここに呼ばれた意味を知って、困惑した。

心から、雨に降って欲しいと思った。なのに、あれから一滴の雨も降らない。

「私たちに、何か手助け出来ればいいのに、何か弱点とかないのかな」

こんなことになったのも私のせいだ。なのに、手助けひとつ出来ないなんて、はがゆくてたまらない。

「ヘタに手出しすれば、かえって魔王様の邪魔になります。ここは、耐えて待ちましょう。なに、魔王様のことです、多少苦戦したとしても必ず勝ちますとも」

バルトは胸を張って請け合った。けれど、私は先ほどからくり返される同じ光景を見て、不安にさいなまれないではいられない。考えろ。何か、手助けできる方法があるかもしれない。

もちろん、その前に魔王が勝ってしまうことだつてある。それならそれでいいのだ。そうだったら、私は役割を果たせばいいのだから。

「せめて、こっちに注意を引けたらいいんだけど」

ぶつぶつと声に出してつぶやく。考えるときの悪いくせだ。友人には気持ち悪いからやめろ、と言われたものの、結局この年になっても直らない。

戦う魔王と黒牛の下に広がる湖に並ぶ石化した魔物たちを眺めていると、ある考えが浮かんできた。大した考えではないが、やってみる価値はあるかもしれない。

でも、と私は思った。いくら協力して欲しいと頼んでも、バルトもガーグも全力でダメと言うだろう。魔王も、そんなことすれば怒るかもしれない。せめて、黒牛の注意をこちらにむけられればいいのに、そう思いながら、戦いの行方を見守る。

やがて、魔王は砂の牛を攻撃するのはやめ、本体の人間の姿になった黒牛に標的を変更する。だが、黒牛もそう簡単に攻撃はさせない。砂の牛をうまく使い、また、砂で幕を作って魔王の雷撃を防ぎつつ、攻撃もしている。

やがて、魔王の動きが少しずつ鈍りはじめた。

攻めあぐねた魔王は、なぜか一瞬こちらを見やる。私は困惑しつつ、その顔を見返す。もう少し距離をとれということなのだろうか。そんなことを考えていたら、砂牛の角が魔王に当たった。

ごくわずかな隙を突かれたのだ。

そのまま、勢いよく跳ねあげられて水面に叩きつけられる。

私は口を両手で覆い、顔をゆがめた。彼が負けたらどうしよう。先ほど考えたにわか作戦が効くような相手とは思えない。私は、駆けだしたい衝動をこらえ、水面を凝視した。

ほんのわずか、黒牛から目を離す。その間に、黒牛は私の方へ移

動してきていた。そのことに気づいた時にはもう遅く、黒牛は私の背後に立っていた。

魔王がくれた指輪が反応し、私のまわりに結界を作る。だが、マツシモはものともせず、薄い膜状の結界を拳でたたき壊した。守るものの消えた私の胴を、左腕をまきつけると、そのまま上空へと連れ去られてしまう。

私は思わず怒鳴った。

【21 鏡の中の目】

「ちょっと！ 離してよ、どこ触ってるのよ！」

「嫌だね。こうしてれば、あの魔王も攻撃出来ないだろ？ それに、いずれお前は俺の専属世話係になるんだ、どこ触ろうが所有者の自由さ」

私は彼のもの言いにかなり腹が立った。いくらなんでもモノ扱いはないだろう。私は誰の所有物でもない。というか、モノじゃない。こんなやつ世話なんて、意地でも焼きたくない。

「お断りよ！ 私はあなたのモノじゃないし、世話係になんかなりたくない！」

「嫌だろうがどうだろうが、魔王の持っているあらゆるものは俺のものになるんだ。いい加減諦めな」

耳触りの良い声が耳もとをくすぐる。顔を真っ向から見ただけではないが、恐らく魔王やガーグと同じで、マッシュモも美形のようだ。わざわざ不細工に変身する意味がないためだろう。私は、魔王より遙かに体格の良い彼に向けて、ひじを突きだしたり、暴れたりしたが、全く意味をなさない。

「無駄な抵抗はよせ。大丈夫さ……：…いずれは俺のとりこになる、そうなれば、魔王のことなんかすぐに忘れて、いい思いをさせてやるさ」

「忘れるも何も、結婚とかしてませんから！」

そう怒鳴りつけると、背後でひゅっつと口笛が鳴る。

「なんだ、まだ手を出してなかったのか。あいつらしいが、それに何の意味があるんだか」

嘲笑うような口調で、マツシモが言う。

「あんたみたいなのよりずっと格好いいわよ！」

いちいちカンにさわる言い方をするマツシモに、私は声を荒げて言う。ちよつと怒鳴りすぎてのどが痛いけど、そんなことはどうでもいい。私はなるべく地面を見ないようにしながら、もがいた。

「ふん、じゃあ俺の姿をよく見てみるよ。人間は大抵外見に騙されるからな」

そういうと、腕の中でぐるり、と回されて私はマツシモと向き合う形となった。間近で見た人間形の彼は、確かにものすごく格好良かった。落ち着いた神秘性のある魔王とはある意味真逆の、どこか危険な雰囲気を持つ美形だ。

乱雑で固そうな髪は茶色みを帯びた黒。口は大き目で、牙がのぞいている。魔王のものより大きめの目は妖しい紫色に輝いている。まとう衣は、ファンタジー風味で、袖のない貫頭衣だ。むきだしの腕には筋肉がつき、肌の色も、やや褐色がかっている。魔王とは違い、日本人風な美形ではない。どちらかというと、外国人俳優を思わせる。

私はその姿を見て、鼻を鳴らした。

「全然騙されない、美形なら魔王様で慣れたわよ」

「へえ、じゃあもつと別の方面から攻めた方がいいようだな？」

顔が近づいてくる。私は青ざめていつそう激しくもがいた。キスする気らしい。まだ誰ともしたことないのに、牛男なんかに奪われるのは死んでもごめんだ。

ああもつ、なんで私はこんなに魔物にばかりモテるんだ。

そう思っていると、足もとの水面が泡立ち、中から魔王が飛び出してきた。そのまま、出てきた勢いのまま殴りかかるうとする。

「おおつ、と」

マツシモは余裕の笑みで攻撃をかわす。魔王は怒りに目をつりあげている。濡れそぼり、髪に緑の藻らしきものをからめた姿には、少し前まで感じられていた威厳がない。その上、腕の一部が人間のものではなくなっている。黒い毛むくじやらの腕は、犬の前足に似ているような気がした。

私の存在が足手まといになってしまっているのだ。迷惑をかけたくないのに、私は悔し紛れに暴れたが、マツシモの腕はびくともしない。非力な自分が嫌になる。

けれど、と私は疑問を抱いた。魔王がこんなに苦戦するとは、正直思っていなかった。

なにしろ、魔王と呼ばれているのだから、もっと簡単にやっつけ

られるとばかり思っていたのだ。馬車の中で、心配するなど言った声に不安は感じられなかったし、少し前に言った言葉にも嘘の匂いはしなかったように思う。一体、何があったのだろうか。

そんな私の中の葛藤はよそに、魔王は怒声を放つ。

「妃を離せ、この下郎！」

「やなこつた！ 中々いい女だからな、ありがたく頂くことにするぜ。あんたは石にしてやる。恨むんなら、年月の経過による弱体化を恨みな！」

マツシモの目が、妖しい銀色に輝き始める。魔王に意識が向かっているせいか、腕の力が弱まり、少しならば身うごきがとれる。私には必要になるかもしれないものを詰めた、小さなシヨルダーバッグから手鏡を取り出した。長方形の折りたためるタイプの鏡だ。

「じゃあな！」

銀色の光が強くなる。魔王は避けようとするが、体にまとわりつく藻が自由を奪っているらしく、素早く避けられない。私は、急いでマツシモの顔の前に鏡をかざした。

「なっ！」

驚きの声とともに、胴に絡められた腕から力が一気に抜ける。次いで、鏡が音を立てて割れた。私は突然支えを失い、空中に体が投げ出された。のどが詰まったように悲鳴が出ない。一瞬視界に映ったのは、体の半分が石になったマツシモの姿だった。

「水紀！」

魔王の声があった。私は湖に落ちる覚悟をして体を縮める。だが、覚悟していた衝撃はやってこなかった。

【22 封印】

ふわり、と浮き上がる感触がして、目を開けると目の前に魔王の顔があった。心配そうにのぞきこむ彼の顔を見て、私は思わず顔をひきつらせた。

笑ってはいけない。しかし、頭からわかめでもかぶっているような姿に、思わず笑いがこみ上げる。このままここで笑い転げるのは困るので、私は震える手を伸ばして髪から藻をどける。

「ああ、すまない」

「いえ。えと、ありがとうございます」

私が礼を言うと、水面に何かが落ちる音がした。おそらく、マツシモが落ちた音だろう。見れば、魔王を襲っていた砂の牛も、ただの砂山と化している。

「いや、礼を言うのは余の方だ。まさか、ここまで自身の力が落ちているとは思わなかった。もう少して、元の姿に戻るところだった」

悔しそうに魔王はぼやいた。私を支える左腕は、まだ毛むくじやらのままだ。この腕を持つのが、魔王本来の姿なのだろう。一体、どのような姿をしているのか。見てみたいような気がした。

やがて、魔王は湖の岸に下り立った。私は地面に下ろしてもらい、状況に少し赤面する。良く考えてみなくても、お姫様だっこされたのだ。ちょっと嬉しいが、同時にものすごく恥ずかしい。そこへ、

バルトとガーグがやってきて、謝罪をはじめた。

「魔王様、申し訳ありません！ お妃さまを守りきれず、かくなるうえは、この命をお取り下され！」

「オレも、守れなくてすみませんっス……どんな罰でも受けるっス」

ひざまずいてうなだれるふたりの落ち込みぶりを見て、私は慌てて魔王に言った。

「わ、私は大丈夫だったんですから、ふたりを罰しないで下さい」

「……罰したりはしない。そもそも、妃を危険な目にあわせてしまったのは、余の力不足だ。それにしても、先ほどお前は何をしたのだ？」

返ってきた言葉にほっとした私は、問われたことについて説明をはじめた。どう言えばいいのだろう。

「あの黒牛の能力は視線で敵を石化することだと聞いたので、それを逆手にとつて、逆にあいつに向けてみたらどうなるんだろうって考えたんです。鏡の中に映った目に見られたら、もしかしたら跳ね返せるんじゃないかなあって。どうせダメだろうと思ってたんですけど、何か、上手くいっちゃいました」

しどろもどろに説明した後、私は「あはは」と乾いた笑い声をあげる。こんな思いつき作戦上手くいくわけがないと思っていたのに。

「なるほど……そんな方法があるとは考えもしなかった。さすがは余の妃だ」

魔王は心から嬉しそうに笑った。私は思わず小さく呻く。この笑顔、どうやら魔王はそれと意識せずにやっているようなのだが、ハッキリ言っただけでとことん心臓に悪い。なんだかどんだんほだされてきている気がする。ヤバい。

「まあ、相手が油断しているのが大前提ですけどね。それで、封印はどうすれば……」

私が訊ねると、魔王は「そうだな」と言ってから、ガークに声をかけた。

「ガーク、あいつをあの場合からここへ引き上げる」

「あ、はいっす！」

まだひざまずいていたガークは慌てて立ち上がり、両手を前方にかざして言う。

「ウエルテ・マラーキオ」

その言葉の後で、ぶわっとなつむじ風が巻き起こる。私は思わず顔を覆った。砂ぼこりをあげてつむじ風は進み、湖に半身を沈めたマツシモをすくいあげるように引きずりあげると、こちらへと運んでくる。やがて、風はその勢いを弱め、私たちの前に体半分を石化させたマツシモを転がす。

彼は自分では動けないのか、残った片目でこちらを睨むが、力を使おうとはしない。また鏡を使われたら完全に石化してしまうのがわかっているのだろう。それに、どうやら舌も半分石化しているせ

いか、喋ることも出来ないようだ。

私は、ふと思ったことを聞いた。

「あの、他の石化させられた魔物たちを戻すにはどうすればいいんですか？」

「それなら、封印すればいい。あれは魔法を一旦完全に無効化する力があるうえ、解放されないかぎり、封じた者の使役下に入る」

「えっと、つまり、使い魔みたいなものですか？」

「そんなところだ」

魔王の返事に、私は想像してみた。この牛にご主人様扱いされる光景を。ありえない。とても言うことを聞いてくれそうな気がしない。けれど、私は湖に彫像よろしく点在している魔物たちを見て、息を大きく吐いた。

あの魔物たちだけは元にもどしてもらわないと。

よし！ やるぞっ！ 私は覚悟を決めると、ハリセン（封魔扇）を振り上げて、思いつきりマッシモの後頭部に振り下ろした。その瞬間、ぼふんという音がして、マッシモは輝く金色をした光の粒子になり、黄色い腕輪に吸い込まれた。

次いで、腕輪が輝き、するりと私の腕からはずれると、小さな小瓶の形にもどって砂の上に落ちた。

「……出来た」

私は呆然とつぶやき、砂から瓶を拾い上げると、魔王とバルトとガーグを振り返って訊ねた。

【23 帰還】

「あの、次はどうすれば……あの魔物たちを元に戻させたいんですけど」

「ああ、それだったら簡単だ。出でよ、マツシモと名前を呼んでやればいい」

私は少しずつ恥ずかしくてたまらなくなってきた。こんな年になつてそんなことを言わなければならいなんて、思っても見なかった。

「い、出でよマツシモ」

羞恥心のあまり、小声でつぶやくように言う。それでも、小瓶は反応した。中に豆電球でも入っているみたいに輝くと、ぽん、と気の抜けるような音がして、封じたマツシモが出てくる。最初は光の粒子の塊だったが、それが地面にわだかまり、しばらくして光が消え去ると、その姿を現す。

「……小っさ！」

私は思わず言った。そう、黒牛は、小型犬くらいの大きさまで縮んでいたのだ。相変わらず目つきは悪いし、ちゃんと牛だが、脅威を感じるほどではない。

「てめえ、もとに戻しやがれ！ 俺の魔力をこっそりと奪い取りやがって！」

「それはこっちのセリフよ、いいから、あの石化させた魔物たちを元に戻して」

キィキィとわめくマッシモを、私は腕組みしつつ睥睨した。魔王たちは特に手も口も出してこない。その必要がないからだろう。マッシモは、しばらく悔しげにわめいていたが、私が再度「戻して」と言うと、一度こちらを睨みつけてから、やたらと悔しげにトテトテと湖まで歩いていくと、言う。

「リリーフィオ」

完全にふてくされてやる気ゼロな声だ。だが、効果はそのままらしい。湖に点在していた石像たちに、小さなヒビが入りだす。やがて、彼らの周りの砂が溶け落ちるように流れ去り、もとに戻った。

「これでいいんだろ？」

「ありがとう」

私は心からほっとして、ふと思った。また魔王を振り返り、問う。

「あの、また瓶に戻すにはどうすればいいんですか？」

「おい！ ちょっと待てよ、用済みになったらすぐにまた瓶詰めにするのかよ！ やっと娑婆の空気を吸えたって言うのに、なあ、頼むよ、もう少し出しといてくれよ。そうだ」

マッシモは慌てて言うと、複数ある目を閉じた。やがて、体を妖しい砂色の霧が覆う。何をする気だろうと思って見ていると、彼はみるみる大きさを増し、あの人間姿になっていた。

「こつちの姿でいれば色々と役に立つぜ、どうだ!」

彼はふんぞり返って言い、硬直した私の側までくるとあごをつかんで笑った。

「なんだつたら、夜のお相手も務めるぜ。そのへタレ魔王より俺のほうが上手いぜ?」

「……も、戻れ　　っ!　瓶の中に戻れっ!」

私は叫んだ。そこへ、魔王が顔を引きつらせて割り込んでくる。マツシモと私の間に入り込むと、彼は氷点下の笑顔で告げる。

「貴様、何度言ったらわかる。この娘は余の妃だ」

「別にいいじゃねえか、お前だって今まで散々女とつかえひつかえしてきたんだろうが。まあどの道、こいつがいいって言わない限り俺は何も出来ないが、浮気されないように気をつけときな」

マツシモはにやっと笑って言うと、私に向かって片目をつむる。様になっているのは認めるが、牛を恋人にしたいとは思わない。私は目を反らしたあと、バルトを見た。

彼はすでに移動魔法陣を描いた布の上に馬車をスタンバイさせている。大きなものはああして運ぶらしい。ガークも羽根を出現させ、帰る気まんまん。私は薄く笑みを浮かべながら、ふたりに言った。

「……帰ろう、疲れちゃった」

「そっスね。オレも、お腹空いたっス」

「帰りは移動魔法が使えますからな、すぐですよ」

私は彼らと頷きあい、首飾りに触れる。ちょっと振り返ってみれば、魔王とマツシモがなぜかまだ睨みあいをしている。乙女だったら喜ぶべき光景かもしれない。一応、ふたりに言い寄られて奪いあわれるヒロインの図、とかそんな状況なのだろう。多分だが。

ただまあ、相手が魔物で、愛とか恋とかが通じそうにない場合は話が別だ。しかも、奪いあう理由が、私には正直嬉しくない。最初は雨女として（まだ雨は降ってないけど）、次は魔力がないので、封印を行える存在として（これは自業自得もあるけど）。マツシモに至っては、人間だから世話係にうってつけというそのまんまな理由。色々と文句はあるけれど、どうやら私は彼らにとって役にたつ存在のようだ。

例えば悪いかもしれないが、現在魔王とマツシモが繰り広げている争奪戦は、ただのお役立ちアイテムを取りあってるだけだともいえる。

そんなお役立ちアイテムな私は、生ぬるい目をしつつ一応声を掛けた。

魔王が色々和小細工してくれたので、私はひとりでは帰れないはずだ。

「魔王様、帰らないんですか？ その牛はどうするの？ 一緒に行くの、行かないの？ 小瓶に戻されたいの？」

ふたりは私の声に気づいて振り返ると、慌てた様子でこっちへ来た。やがて、全員が集まると、それぞれに移動魔法を使って城へと

戻る。私は、魔王の作りだした移動魔法で一緒に戻った。

正直、腰をつかむ魔王の手の力が妙に強くて痛かったけれど、とにかく私はようやく慣れてきたのか、酔わずに城へと帰ることが出来たのだった。

【24 魔王の先妻】

マツシモの封印から、約一週間が経過しました。

魔界に来て半月。完全にクビ決定です。とほほ。私はもう魔界で生きてくしかないのかもしれないですね。最近はなんだかちよつとした悟りの心境に到達したような気分です。

そんな訳で、私は半ば諦めのていで、暇つぶしを考えるのに苦労していた。何より、いい加減店やものは飽きてきた、というか、このままでは体重が恐ろしいことになると思うので、魔王に訊ねて、料理を試みることにしたのだ。

もちろん、専属料理人がいるので、別に自分で作る必要はない。けれど、ただじっとしていると、色々とつらいのだ。じっとしていると、余計なことも思いたす。そう、私はまだ失恋から立ち直ってはいなかった。なので、バルトに聞いて、魔界植物辞典なるものを借りて、とりあえず勉強してみることにした。

さらに意外なことに、人間でも食べられる食材について調べていたら、ガーグが詳しいことを教えてくれた。

「これと、これは毒っス。人間界でも毒扱いされてるはずっスよ」

「へえ、詳しいんだね」

「オレの魔法の師匠が人間と多く関わる魔物なんスよ。これはその師匠に教わったんス。役に立つかどうかわからん知識でも、もしかしたら役立つかもしれないからとりあえず詰め込めるだけ詰め込んで」

どけ！　っていう指導方針だったツスから」

ガーグはちょっと懐かしそうに言う。私は、師匠なんているんだ、と内心思った。

それに、対マッシモのとき、ガーグが使った魔法は凄まじかった。威力など、詳しいことや細かいことのわからない私には、魔王の雷玉にも引けをとらないように思えるくらいだ。

見た目は少年に化けているし、話し方からしてまだ若い魔物のようだ、こうして魔王直々に妃の側に置くくらいだから、きっと力の強いなんだろうとは思う。だが、脅威を感じないのでイマイチぴんとこない。けれども、今は目の前の珍しい魔界の植物に興味を引かれていたので、特に強く問うことはしなかった。

「あはは、何かその通りになっちゃってるね。それで、これは……？」

どう見ても食用じゃなさそうな毒々しい緑色をしたきのこを指で示して問う。

「ああ、これはツスね……」

ガーグが答えようとしたときだった。突然、何の前触れもなく後ろの扉が開いた。

私とガーグは振り返り、目を点にした。てつきり魔王がバルトかマッシモかと思ったが、違う。

私たちは驚いた顔のまま扉の外に立っていた人物をながめた。

ちなみに、今は私がアレコレと皆に協力してもらいながら頑張つて、過ごしやすいとお妃の部屋にいる。時刻は昼過ぎで、先ほど試しに魔界料理を試してみたところだった。今夜も試してみる予定なので、何なら食べて良いかという話から始まり今に至っている。

いや、それはまあいいとして、その人は入り口で困惑したように立ちつくすと、早速私を目に止めて言った。

「ねえ、ここっでお妃の部屋よね？」

入口に立っていたのは、美しい人間の女性だった。ただし、人間とは思えない妖艶な美貌を持ちながら、なぜか同時に清楚さを持つ、男性なら放っておかないタイプの女性だ。年齢は、私より少し年上っぽい。体の線がまともに出る、チャイナドレスみたいな真っ黒い服を着て、濃い藍色の瞳でこちらをじっと見つめてくる。

あれ、男じゃないのに何かどきどきするし。

「はい、まあ。そうですけど……あの、えっと、誰でしょう？」

私は思わずガーグを見て問う。だが、彼は固い表情で女性を見つめており、返事は返ってこない。

「あなたは使用人じゃないの？ それとも新しく入った方かしら、じゃあ最初に自己紹介するわね。私はビビアーナ。魔王の妃なの。ここは私の部屋、何だか様子が変わっちゃってるから、後で好きに改装させてもらおうかしら……とにかくよろしくね」

女性は言っつて、ふんわりとほほえんだ。

えっと、妃？ 確か魔王の妃は別れたとか死んだとか聞かされていたけど。私は混乱してガーグを見やる。すると、彼はすつくと立ち上がり、美女の前に立って告げた。

「ビビアーナ様っスか？」

「そうよ。私、ちょっと疲れてるの……やっぱり、故郷へなんて戻るものじゃなかったわ。後でジェズアルドに来るように言っておいてくれないかしら？」

「申し訳ないツスけど、出てって下さいっス」

きつぱりと告げたガーグを、美女、ビビアーナは驚いたような顔で見る。私はどう介入すればいいのかわからず、とりあえずその場から動かずにじっと聞き耳をたてる。

「魔王様はすでに新しいお妃さまをお迎えになったツス。魔王様はひとりしか妃は持たないと仰っていますし、ビビアーナ様は追い出されたはずツスか？」

「新しい妃？ まさか、そこの方のことじゃあ」

不安げな顔で私を見る。やめてください。別に、好きでここへ来たわけじゃないし、それにまず、私は妃になるとはまだ言っていない。と言いたいが、なんとなく言える空気じゃないので、私は黙秘する。

彼女は、ぐつと何かを飲み込む様な顔をして、問う。

「ジェズアルドに会うわ。今すぐ、彼はどこ？」

「ここにいる……久しいなビビアーナ、息災で何よりだ」

入口に手を掛け、どことなく暗い目をした魔王が答えた。

【25 救援の要請】

「ああっ！ 会いたかったわジェズアルドっ！」

ビビアーナは嬉しそうに笑い、魔王の首に抱きつこうとする。が、魔王はさっと避けた。空振りしたビビアーナの両の腕が空を抱く。魔王は彼女をスルーして、部屋に置いたラグの上に座り込んでいる私の側まで来ると、背後に回り込んで肩に手を置く。

え、あの……どういう意味ですかこれ。

「妃の前でそういう行為はやめて欲しい、ここはこの娘のものだ」

私は顔を引きつらせた。どうしたら良いかわからない。私の見ている前で、みるみるビビアーナの目に涙がたまり、やがて、つとこぼれ落ちた。お願いやめて。それじゃあ私が完全に悪者じゃないか。

「そうよね、ごめんなさい。まだ、あなたが新しい片割れを見つけたことを知らなかったから。まだ元に戻れると思うなんて、厚かましいわよね。もしかしたら、妃なら少し無理なお願いでも聞いてもらえるんじゃないかって思ったのがいけなかったのね」

ビビアーナは目もとを指で拭いながら言う。肩に置かれた魔王の手に、力がこもった。私は、魔王の顔をそつと盗み見しながら、どうして彼女と別れたのと訊きたい気持ちでいっぱいになった。肩が痛いのは、まだ彼女に未練があるからじゃないのかな？

そんな私の疑問はよそに、ビビアーナは話をつづける。

「実は、助けを求めに来たの。私の故郷、サキュバスたちが暮らす場所が、ウィンディゴに目をつけられたわ」

彼女の言った魔物の名前に、魔王の顔色が変わった。

サキュバス……ということはやっぱりこの美人も魔物なのか。確か、魅了した人の精気を奪うとかいう魔物じゃなかったかな。私は黙って話を聞きながら考えた。

「あまりにも雪が降らないせいか、住む場所を追われて下ってきたみたいなの……仲間が次々と病になってしまって、もう、あなたに頼むしかないと思って。それに、私たちの里の近くにはガーゴイルたちの暮らす廃墟もある。そこも、少しずつ影響を受けているよ」

彼女は、ちらりとガーグを見やって言う。ガーグは相変わらず固い表情だ。

「そうか、そんなことがあったのか。そんな弊害が出てくるとはな。わかった、余が出向いて話をしてみよう。どうしてもダメならば、退治するか封印する」

「本当！ ああ、良かった……」

魔王の返答に、ビビアーナは心から安堵したように笑った。びっくりするほど魅力的だ。私はつかまれた肩が痛かったが、何も言わなかった。まだ知り合って日が浅いのに、かけられる言葉などある訳もない。

少なくとも、私にとって魔王はまだ友人なのだし。

何にしても、この話には私は関与しなくても済みそうだ。まだ吸血鬼や大きな蛇の魔物は見つかっていないので、城で料理を練習して過ごすことにしよう。私がそう決めてひとり安堵していると、魔王が声を掛けてきた。

「水紀、すまないが、お前にも来てほしい。もしウインディゴが説得に応じない場合を考慮し、封印の出来る者が必要だ」

「……え」

私は思わずうめき声をあげた。今回は関係ないと思ったのに。視界の隅にひっかかったハリセン（注 封魔扇）を恨めしげに見て、思わずあんなもの捨ててしまいたいという思いに駆られる。

「大変なのはわかる。だが、お前も余の状態は知っているだろう？」

「こそつ、と耳打ちするように言うてくる。弱体化のことを彼女には知られたくないらしい。それに、城に帰還後も、魔王には固く口止めされている。私も、その理由が分からない訳ではないので、一応黙っていたが、まさかこんなことになるとは思わなかった。

私は、自身の着ている服や、部屋を見回しながら、息を吐く。

今の私は、魔王の温情で生活している。本来ならば、働いて手にするべきアレやコレを、すべて与えてもらっているのだ。これに報いなければ、なんだか気持が悪い。

「わかりました……仕方ないですね。生活費だと思って働きます」

大体、まだ妻でも何でもないので養ってもらっているわけなのだ。そのくらいはしてもいいだろう。多分。ただし、前は魔王に助けてもらえるという安心感があつたが、魔王が弱体化していることを知つた今、彼の守り期待できない。つまり、危険に身をさらすことになるかもしれないのだ。なので、ホントは嫌だ。

なのに、私がうなずいたのは、横目で見る魔王の悔しげな顔のせいだった。

そんな顔をされたら、手を貸さずにはいられないじゃないか。私は思う。もうすでに、私は魔王にほだされてきているのかもしれない、と。

少なくとも、来たときから魔王に悪い印象を持ったことはない。魔王が嫌いというわけではないのだ。ただ、恋愛感情と好意は別のものだというだけだ。

「すまない」

小さい声が耳元でし、私の心臓がぎゅっと痛む。そんなに苦しまないで欲しい、と思った。

「いいえ、私でお役にたてるなら、ごはん代くらいは頑張ります」

小声で言つて、私は後ろの魔王に笑いかけた。魔王は少し驚いたような表情をしていたが、すぐにそれは苦笑に変わり、つづいていつもの無表情に戻つた。

「ビビアーナ、明日、サキュバスたちの暮らす山へ向かう。今日は

この城に部屋を用意させるから、休むがいい」

魔王はそう言って、手を鳴らした。すぐにバステトたちが入ってくる。

「彼女を客室へ案内して欲しい」

「……は、はい」

バステトの中で一番偉そうな、マールラ　後で聞いてみたら女官長なのだという　がどこか警戒したような表情でビビアーナを見たことに、私は気づいた。ガーグも、相変わらず固い表情のまま押し黙っている。

ビビアーナといえば、優雅な動きでバステトにあいさつをする　と、言う。

「では、案内してください」

バステトはうなずいて、どこか警告を含んだまなざしを魔王に投げかける。言いたいことがありそうだが、魔王は彼女らから目を反らし、私の肩をつかんだままうつむいている。正直、何があったのが、ものすごい知りたい。

やがて、ビビアーナはマールラに案内されて部屋から立ち去って行った。足音とさやかなきぬ擦れの音、甘やかな花の香りを残して。私は、それらの恐ろしいまでの魅力を何とはなしに感じ取りながら、魔王が何か言うのを待った。

【26 言い争い】

が、魔王もガーグも微妙な顔をして動かない。私はじれったくなってきた。そのとき、またしても部屋の扉がひらいた。入ってきたのはマツシモだった。

封印の際に、魔力をこっそりと小瓶に吸われたため、中級の魔物クラスになってしまった彼は、身の安全と私をモノにするためと称して、この城にとどまることにしたのだそうだ。

「なんだよ、葬式みたいだなお前ら。で、今サキユバスとすれ違っただけど、あれも妃候補か？ だったら水紀はいらないよな、という訳で俺にくれ」

「断る」

魔王は即答した。

もう何度目かわからないやり取りだ。

「ちっ、やっぱりか。けどよ、何であんな性格悪そうなのが来てんだ？ 俺はあいつらが嫌いだぜ。大体、いつも食事のことばかり考えてるようなところが最高に気に入らねえ。まあ、外面は綺麗だから、よく人間の男が騙されて結婚してすぐに精気を奪われつくしておっ死んじまうらしいが、あれを妻にする奴の気がしれねえな」

マツシモの嘲笑混じりのセリフに、魔王がのどの奥でうめいた。

私にはよくわからないので、黙って話を聞くことにした。すると、

何やら金属がこすれあうガシャガシャという音がして、開けっ放しの扉からバルトが入ってきた。

「魔王様！　なぜあの女を城へあげたのでございますか！　あの女は、うまいこと魔王様の弱みにつけいって妃の地位についたような女ではありませんか！」

バルトはこちらの鼓膜をぶっ壊そうとするかの勢いで叫んだ。うう、耳が痛いよ。ここしばらく彼が叫ぶような事態は起こらなくて安心していただけなのに、このタイミングで来たか。

しかも、弱みにつけいる？　私は不穏な言葉を聞いた気がして、魔王を振り返る。

「へへえ、てことは、よっぽど弱ってんだなお前。魅惑チャームごときに屈するなんて、今の俺よりヤバいんじゃないの？」

「黙れ、余だとして好きでここまで弱体化した訳ではない」

「そんな体たらくでよく魔王の椅子に腰かけてられるな。ヘタしたらお前、側近の奴らにも負けるんじゃないかねえのか？　だとしたら、それ言いふらしたらお前、終わりだよな」

「そんなことを言わせる前にお前を殺す」

何やら魔王とマツシモの間に火花が見える。

私はだんだんうんざりしてきた。

「そうですね！　今魔王様を失ったら、魔界はまた先代の魔王のときのように荒れます。魔王様、このような牛めは、我が相手にな

りましようぞ！」

今度はバルトも入ってきた。ガークをちらり、と見やると、何やら入ってきたそうにしているが、怖いのでやめているようだ。ただし、あと一步の勇気がわいてしまえば、参入しかねない。

さらに、頭の上にクロスケがぼとり、と落ちてきた。小さな体を震わせて、何か言いたげではある。クロスケが言いたいことは、良く分かる。私はため息をついた。

「俺はかまわねえぜ、外へ出る！ 今すぐただの金属片にしてやるよー！」

「……あの、ちょっといいですか？」

盛り上がっているところへ、私は思いつきり水を差した。だが、全員聞いている様子がない。魔王すら、すぐそばの私よりマツシモを睨みつけ、威圧することに全力を傾けている。

私は、仕方なく近くのハリセン（注 風魔扇）を手に取り、それをばしっと床に叩きつけた。

叩いた衝撃で風が起こり、ほこりがキラキラと宙を舞う。

四人の視線が一齐に私に集まった。まずは、挑発馬鹿からなんとかしないと、と思った私はマツシモに微笑みかけた。ただし、目は笑っていない。というか、こんな状況で楽しい笑いなんかこみあげる訳もない。

「ねえ、マツシモ……私あなたにお願いしたよね。封印しない代わ

りに、そのことは言わないし、むりやり押し倒すような真似もしないでって言ったよね？」

少し前に敬語はやめて欲しいと言われたので、私はマッシモに対してはガーグに対するように喋ることにしている。それは、今言った事柄をお願いするために話をしたときのことだ。

「約束を破るつもり？ 破れないよね？ だってあなたは私の支配下にあるんでしょ、確か破ったら存在が消えてなくなるんじゃないかな？ たっけ？ 確かそうでしたよね？」

私は魔王を振り返って問う。

「あ、ああ。その通りだ」

魔王がやや怯えた声で答える。

私は内心少しビビりながらつつける。

ここしばらくのことでもわかったが、マッシモは下手に出るとつげあがるタイプだった。なので、あまり強いことを言うこととあとで心臓が破れそうになる小心者であるにも関わらず、私は強い態度に出ただ。

うっ、嫌だよこんな高飛車なこと言う自分。最悪だ。マッシモの馬鹿牛め。

「じゃあ、そうなら死ぬね。それでもいいんだ？ それとも今すぐ封印される？」

言いながら、すぐ近くの棚に置いておいた黄色い小瓶をちらっと見やる。

「ぐっ、それは嫌だ」

「じゃあ、変な言いがかりつけて喧嘩するのはやめてね。バルトも、魔王様も何でそんなに皆していかがみあうのか、私にはわかりませんが、目の前で喧嘩されるのは、すごく嫌。お願いですから、やめてください」

激しい動悸を感じながら、それでも私は言い切った。

ああ、疲れた。仲裁などという真似はほぼしたことがないので、素晴らしく心臓に悪い。というか、これで大丈夫かな。不安に思いつつ、目の前の面々を見渡してみると、皆呆けたような顔をしている。

「も、申し訳ありませんでした！ 熱くなりすぎました……情けない、少し考えれば、カトブレパスめはお妃さまの下僕になっておったことに考えが至ったはずなのに、我は頭を冷やしてきますぞおおっ！」

バルトは雄叫びをあげるかの如く叫ぶように言って出て行った。

「何だと、俺はこいつの支配下にはあるが下僕じゃねえ！」

そのあとをマッシモが追いかけて行く。残された私と魔王とガーグは、しばらく黙りこんだ。だが、ガーグが居心地悪そうにしはじめ、ちらり、と魔王と私を見ると、あいまいに笑う。

「えと、オレちょっと用事思いだしたツス」

「え、うん。じゃあ後でね」

私は出て行くガーグに手を振った。気づくと、クロスケもすでに仲間のもとへ戻ったのか、部屋にふたりきりとなる。魔王もすぐに出て行くのだろうと思っていた私は、彼が中々動かないことにしびれを切らした。

限界だったのだ、足が……。

「あ、あの、足を崩したいんですが」

そう言うと、魔王ははつと我に返り、肩から手を離してくれた。そのまま、隣に腰を下ろす。びりびりする足をさすりながら、私はようやく一息ついて、思った。

何で、魔王は戻らないのだろう。

私は困惑したまま足をさすり続けた。すると、魔王がようやく顔をあげて言った。

【27 現在と過去】

「突然ですまなかつたな」

「え、何がですか？」

私は本当にその言葉の意味がわからずに問う。いつも無表情な魔王の顔が、どことなくかげつているような気がする。

「ビビアーナのことだ。正直、あれが戻ってくるとは全く考えていなかった」

「ああ、それは話を聞いていればわかります。大丈夫ですよ、私は気になりませんから」

「気にならないのか？」

真つ直ぐに、私の目を見て訊ねてくる。すぐにそうですね、と言いかけて、私は言葉を飲みこんだ。それを口にすれば、魔王が傷つくような気がしたからだ。

それに、全く気にならないかといえば、ちよつとうそになる。私は、少し考えてから、訊ねた。

「いえ、あの、聞いてもいいのなら、聞きますけど、その、今まで、どんな方々と結婚してきたんですか？」

「ああ、そうか、まだ何も教えていなかったな。どうせ他の連中も

みんな知っていることだから、構わんさ。今まで迎えた妃は、ビビアーナを除いた8人は、色々だった。まだ余が未熟だったせいで、死なせてしまった妃もいる。だが、本当の意味で、ちゃんと添い遂げられた妃はいない」

魔王は窓から外を眺める。いつもと同じ、夕暮れにしか見えない赤い空。私は、なぜか胸がぎゅっと痛んだ。うまくいかなかったことを思い出しているのだろうか。それはどれほどにつらいのだろうか。痛くてたまらなくならないのだろうか。

そう、私のように……。

ふいに、私は思う。今まではただ自分が戻りたい、とか、自分の失敗をなんとかとり戻さなくちゃ、という思いで突っ走ってきた。けれど、ここに来て初めて、私は魔王のことを考えてみた。

「余は魔界の王だ、その妻の座が欲しいだけだった女が最初の妃だ。それも、そのあと4人目までがそうだった。次は人間を選んだ。だが、以前にも言ったように、魔界のものを食べて死んだ」

どこか虚ろな目で、魔王は語る。

私は、彼のつらそうな顔を見て、一瞬やめてくださいと言おうとした。なのに、のどが詰まったみたいに声が出ない。それで、先を知りたいのだという自分の思いに気がついた。

「次は、刺客としてやってきた魔物だ。ほら、お前も見ただろう、あの青い蛇、本来の魔物名はシー・サーペントという。その彼を愛する女だった。それは、余の手で殺した」

魔王は大きく息をついてからつづけた。

「もう魔物を迎えることに疲れた余は、また人間の女を選んだ。だが、呼んだ女は余を恐れた。最初に、本来の魔物の姿を見せてしまったのが良くなかったようだ。彼女は塔から飛び降りて死んだ」

私は思わず息を飲んだ。なんというか、壮絶すぎる。お気の毒すぎて、逆にご愁傷さまですとすら言えない空気だ。魔王は、そんな私のような見つつも、まだつづける。

「次にあのビビアーナだ。その頃になると、余の力はかなり落ちていた……そのせいで、余は魔法にかけられてしまった。サキュバスが人間にかける魅了の魔法だ。だが、初夜のはずの夜、彼女は魔界に人間の男を引きずり込み、食事をしていたので」

それはつまり、そういうことなのだろう。花嫁が初夜にそんなこととしている光景など見たら、完全に女嫌いになってもおかしくない。と考えて、私は首をかしげる。ならなぜ、魔王は私をここへ呼び寄せ、妃になれと迫ったのだろうか。

「それでも、余は彼女から離れられずにいた。しばらくはこの城に置いていたが、男を引きずり込んだところを側近が見つけて追放した。これがすべてだ……」

それで、ガークやマーラの態度が腑に落ちた。そんなのが戻ってくれば、警戒しても無理はない。

「あの、何とというか、何も言えません」

私は正直に言った。すると、魔王は苦笑した。

「まあ、そうだろうと思う。これでわかっただろう、今まで余は一度も、きちんと添い遂げられたことはないのだ」

そう言った魔王は、寂しげだった。ただ、そこまで聞いたら、やはり疑問がわく。私は、この際なので、思いきって聞いてみた。

「でも、それだけくり返してダメ続きだと、もう結婚とか嫌になりませんか？ 私だったら、もう諦めてます。なのに、どうして私を連れてきたんですか？」

「ああ……そうだな。それは、説明したように、余の属性ばかり強すぎて、魔界が徐々に乾いてきているからだ。そもそも、魔王が妃を迎えるのは、バランスを整える目的があるのだ」

私は、魔王の説明に聞き入った。そうしないと、理解が追いつけそうにない。

「そもそも、魔王は在任の者の余命が少なくなった時点で、最も強く、かつ魔界を統べる能力のある魔物から選ばれる。子が生まれても、その子に引き継がれる訳ではない。そして、余と魔界は一体だ。魔王となったときに、切り離せないものとなるのだ。余の力が弱っているのは、魔界が悲鳴をあげているのと同じことなのだ」

そう言って、魔王はきっぱりと言った。

「だからどうしても、水の属性の女が必要だった。もう結婚は嫌だから、そんな理由にはならんだ。だから、お前を連れてきた」

私は、最初に会ったときのことを思い返し、なんとなく納得した。けれど、なぜかその言葉はあのと時とは違い、私の心に氷の刃となつて突き刺さつた。

「なるほど……でも、雨降りませんね。ごめんなさい」

「いや、何か理由があるのだろう。それに、徐々にだが、お前が余の側にいることで、少しずつ、水気が戻ってきている。婚儀をあげれば、もっと強くなるはずだ。水紀、まだ答えは出ないのか？」

ふいに問われ、私は返事に窮した。

あときは嫌だと即答できた。だけど、今はできない。嫌だ。その言葉が出てこない。私はこうして質問されてみてようやく気づいた。自分が、それでもかまわないと思っっていることに。

「あの、もしかしてこのまま弱りつづけたら……」

「そうだな……多分余は死ぬだろうな。むろん、まだ余力はあるから何十年も先になるだろうが」

魔王はそう答えて、私をじつと見る。見ないで欲しいと思った。この場で、いいですと言っつてしまいたい。けれど、同時に言いたくない気もしていた。

私が、あるとき思ったこと。そんな恋することも、愛もない結婚なんてしたくない。それは今もまったく同じ思いだ。

「……私、恋愛結婚したかったんですね」

思わず、ぽんと言ってしまった。

【28 水紀の答え】

「余はお前が好きだぞ」

返ってきた答えはずいぶんあっさりしていた。私は思わず微妙な顔になる。

「何か、軽いような気がするんですが……？」

思いつきり友だち感覚の「好き」に思え、私は言う。

「軽く言ったつもりはないのだがな。それに、ここしばらく一緒にいてみて、お前ならもしかしたらと余は思っている。まだ何か足りないというのなら、その何かを言ってくれ。そして、なるべく早く返事が欲しい、いつ返事をくれる？」

魔王は真摯な目で私を見ながら言った。この半月ほど、かなりの時間一緒にいたので、少しわかったこともある。彼は、うそはつかない。

それに、答えを引き延ばすのもなんだかつらくなってきた。たかが半月だが、その間に起こった幾つもの出来事、特にマツシモとの戦いは、私にとって色々と衝撃を与えたのだ。

今まで、日本とそこから見える世界しか知らなかった。魔界という場所を知り、ゆっくりとはあるが世界は自分の認識に収まるようなものではないという感覚が生まれつつある。

幸せを追い求めるのに、生きる場所は関係ないのかもしれない、

という思い。自分らしくさえあれば、きっとそれはどこでもいい。それが魔界であっても、だ。

私は決意をこめて、言った。

「わかりました。なら、ビビアーナさんのことに決着がつくまでには、答えを出します」

「そうか。では、色良い返事を期待している。どちらにしたところで、ここから帰すつもりはないが、無理強いをしたくはないからな」

魔王はそう言うと、私に近寄り、額に唇を落とす。一瞬、何が起こったのか分からず、何度もまばたきを繰り返す。

「……つな、何するんですか！」

驚いて叫んだ私を楽しそうに見て、魔王は言う。

「妃にキスしただけだ。そうだ、今度からちゃんと名前で呼べ」

「え？」

「ジェズアルドと名前で呼んでくれ。別に大したことじゃないだろう？　いつまでも魔王のままでは他人行儀すぎるからな」

それは確かにそうかもしれない。けれど、実際に名前を口にするのはなんだか恥ずかしい。私は困惑しつつも、とりあえず言ってみた。

「ジ、ジェズアルドさん」

「さんもいらぬ。ジェズアルドで良い」

ますます困惑するようなことを言う魔王。いや、ジェズアルド。私は半ばあきらめ気味に、これも慣れだと自分に言い聞かせてもう一度名前を呼んだ。

「ジェズアルド、でいいですか？」

「ああ。これからはどこでもそう呼べ……では、余は仕事に戻ることにしよう。長いこと邪魔してすまなかつたな」

「あ、いえ、その……お話が聞けて嬉しかったです。言いにくいことを教えてくれてありがとうございます」

私は立ち上がったジェズアルドに慌てて言った。実際、とても言いにくいことははずだ。心の傷を教えて、と言っているようなものなのだから。それは同時に、つらかった記憶を思い出すことになる。私だったらきつと泣いていた。

「いや……済んだことだ。逆に、お前は聞いていて不快にならなかったか？」

「そ、そんなことはありません」

「そうか」

彼はそういつてやわからかにほほえむと、部屋を出て行った。私はしばらく動けなかった。頭の中が、ごちゃついてしまっている。キスされた額が熱い。しかも、最後に見せた笑顔がまぶたから離れな

い。

あんな顔しないで欲しかった。近頃は、あれほど好きだった先輩のことよりも、ジェズアルドのことばかり考えてしまっている。もっともつと、彼のことを知りたいと思う。

さすがの私も気づいていた。

私は、魔王ジェズアルドに恋している。

翌朝。今回も移動はティフォーネになるかと思っただが、ジェズアルドはそこを一度訪ねたことがあり、また、ガーグたちの種族、ガーゴイルが暮らす森も近いことから、今回は移動魔法でひとつ飛びすることになった。

正直、寝不足なのでありがたい。

昨夜は余計なことをいろいろと考えて眠れなかったのだ。

私は動きやすいように、ロングTシャツとクロップドパンツに、ぺたんこサンダルで行くことにした。

ちなみに、今回はマツシモとバルトはい残りだ。

マツシモはサキュバスが嫌いだから行きたくないのだそうだ。バルトは城の警備をしなければならぬ、と言ったが、本当はマツシ

モと同じような理由で行きたくないのだとこっそり教えてくれた。

ちなみに、クロスケはまたしてもついてきてしまったし、私もその姿を見て触れてもふもふすると癒されるので、だめとは言わなかった。

という訳で、私とジェズアルド、ガークにクロスケ、ビビアーナというメンバーが、ガズルラーヴ城の前に集まった。すでに大型の移動魔法陣が記されており、そこに乗って呪文をとこなえるだけだ。

「今回のこと、本当にありがとうございます。それでは、出発しても良いでしょうか？」

「ああ」

ビビアーナの声に、ジェズアルドが返事をした。私はそのジェズアルドに抱き込まれるような形で立っている。心から恥ずかしいが、この方が安全だからと言われれば私には何も言えない。

そんな私を、ビビアーナが少しきつい目で見た。それが嫉妬の感情なのか、それ以外なのかはわからないが、心に恐怖がわく。私は小さく唇を噛み、彼女から目をそらした。

やがて、ビビアーナの声が響く。

「スイテル¨ホナ、アコーニット」

【29 毒花の住処】

目まいのするような感覚に包まれてすぐ、妙な浮遊感が体を襲う。

ジェズアルドに抱えられていなければ、気を失っていたかもしれない。私はしばらくそれに耐え、目を閉じて体を固くした。やがて浮遊感がなくなり、足が固い地面の上についた感触がすると、目を開けて大きく息をついた。

「大丈夫か？」

「はい……何とか。やっぱりこれ苦手です」

私はジェズアルドの声にそう答えた。苦笑が返ってくる。それから、周囲を見渡してみた。魔界に来て、初めて見る光景だった。何より、空の色がガズルラーヴ城や、例の湖とはまるで違っていただけだ。

「夜だ……」

思わずそうつぶやいて、私は馬鹿みたいに口をぽかんと開ける。ここしばらくずっと見ることのなかった夜空だ。しかも、よく目をこらせば、星がまたたいて見える。どうなっているのかはわからないが、ひどく綺麗だった。

出発したのは朝なのに、まるで飛行機で地球の反対側に来たみたいな気分だ。いや、海外旅行なんてしたことないから、ただの例えだけれど、本当にそう思ってしまうから不思議だと思う。

それに、周辺の闇も濃い。例えるとしたら、満月の夜くらい明るさだ。見えないことはないが、見えにくい。ふと思立ち、ガーグやビビアーナの目を見てみると、猫のように光っているのがわかった。彼らにこの暗さは関係ないようだ。

今さらながら思う。

ここで暮らすには、人間で本当に不便。

さらに視線をめぐらせてみると、左手側には森が広がっていた。ガズルラーヴ城周辺では本当に植物が少ないので、うっそうと茂る木々を見ると、ひどく清々しい気持ちになる。ただし、幹が青かったり赤かったり、つるつるだったり、時々、風もないのにうねうね動くのが混ざっているのを見つけると、やっぱりここは魔界なのだと痛感してしまう。

きっと、大型の生きものを襲って食う、食虫植物が巨大化したようなのがいたりするんだろうな。勝手な想像だが、あながち間違ってもないはずだ。そんな確信がある。

空気もどことなく重々としてと絡みつくような重さがあり、私は体が重くなったように感じた。

「サキユバスの集落はあちらだったな。では、行こう」

「……………そうですね」

ビビアーナが妖艶にほほ笑む。私は、その笑顔のなかに何かを感じて、首をかしげた。ジェズアルドは気づいていないようだ。私はガーグを見やる。普段はかなりお喋りなのに、今朝からあまり声を聞いていない気がする。

何かが、おかしい気がした。まるで、罨に自分から飛びこんでいくような不快感。

それに、この甘ったるい匂いは何だろう。うっすらとただよう、紫色がかった霧から香っている気がする。花の香りと、動物的な香りの入り混じった匂い。正直、好きになれない。ずっと嗅いでいたら頭痛がして吐きそうだ。きっとこれは良くないものに違いない。

私はそう言おうとして、隣に立つジエズアルドを見やり、息を飲んだ。

「ジエズアルド……？ ガーグ？」

「ふふ、ようやく効いてきた」

含みのある声を耳にし、私は弾かれたようにビビアーナを見た。黒い蠱惑的な唇が、三日月みたいな形の笑みを浮かべている。背すじが寒くなる。私は思わず怒鳴った。

「何をしたの！」

「知らないの？ これは魅了チャームの魔法よ。私たち、闇に生きて精を糧とする魔物は、たいてい使える魔法。まあ、個体によって強さが違うけれどね。大丈夫、あなたを傷つけたりはしないから。だって、それが我が主のご命令だもの」

ふふふ、という含み笑いが聞こえた。私は持ってきたハリセン（注 封魔扇）をバッグから取り出すと、柄を強く握った。ピンチだ。どうすればこの状況を打開出来るのだろうか。

ジェズアルドとガーグは、死んだ魚みたいな目をして彫像のように立っている。私は彼らと違って、戦う力はない。ただの人間ではない私に、この状況をどうしろと？

せめてマツシモかバルトがついてきてくれていれば良かったのに、と思い、私は違和感に襲われた。そうだ。どうして今回に限って、ふたりはついてこなかったのだろう。いつもだったら、来るなど言ってもついてくるようなふたりなのに……。

「待って、まさか、あなたマツシモとバルトにも何かしたの？」

「あら、やっと気づいたの？ 彼らは私たちの計画に邪魔だから、寄せ付けないようにしたのよ。魔法を使ってね。あの偉大なカトブレパスも、あれだけ魔力を削られていれば私でも簡単に魔法にかけられたわ。情けないものよね」

楽しそうにビビアーナは言う。その様子は、完全に魔性の女だ。背中に黒い羽根があったとしても、その正体が魔物であろうと何だろうと、ふらふらついていく男性がいるのもおかしくはない。

「デュラハン是我们たちと同じ闇属性だから直接はだめだったけれど、間接的になんとかしたわ。さて、じゃあ後は」

ビビアーナは言いながら、口の中で呪文らしきものを唱える。

動悸が激しくなった。私の前で、ビビアーナの姿がゆらいでいく。それはまるで、目の前の風景をマールブル状にかき混ぜたみたいだった。ぐにやり、と歪んだ光景が今度は逆戻しに元に戻ると、私は啞然とそこに立つビビアーナ いや、ビビアーナであったはずの存

在を見た。

「何、私……目がおかしくなったの？」

「大丈夫、君はおかしくなんかなってないよ」

聞こえた声は、中音で、優しげに響く男性の声。彼は私の前までゆったりと歩いてきて、ほほ笑む。やってきたのは、ジエズアルドにも引けをとらないほどの美しい顔をした線の細い青年だった。黒いさらさらの髪、体にぴったりした黒い服、黒い唇。その顔立ちはビビアーナとよく似ていた。

「僕たちは一種の雌雄同体でね、誘惑する相手によって性別を変えられるんだ。ビビアーナはサキユバスだけど、僕はインキュバスだ。そして、この姿になった以上、ただの人間の君に、僕の魅了^{チャーム}から逃れるすべはない」

言いながら、そっと私の頬に触れて目をのぞきこむように見つめる。

私は必死に目を反らし、ジエズアルドとガーグを見やった。のどの奥から、助けると叫んでしまいそうになるが、ふたりとも動かない。

「目をそらしちゃだめだよ」

笑い混じりの声が耳をくすぐる。私は後ずさるうとしたけれど、すぐにあごをつかまれ、視線が強制的にまじわる。私は呻きながら、脳が芯からとかされていくような眠気と心地よさを感じた。

だめ！ 私まで意識を失ってどうするの？

そう言い聞かせても、体は言うことを聞かない。目の前に立つ淫靡な青年に、すべてをゆだねてしまいたくなる。私はぎゅっとハリセンを抱きながら、悔しさに唇をかむ。

やがて、あらいきれなくなった体は、青年に向かってぐらりと倒れた。

【30 薔薇の城】

頭が痛い。体がだるい。

私は重いまぶたを開けて、ぼんやりする頭で考えた。思考にかかった霧はなかなか晴れず、疲れ切ったときのように、すべてが気だるい。けれど、ゆるゆると思考力が戻ってくると、私は飛び起きた。

と、同時に、またしても嘔然とした。

「ちよつ、何コレ、何ココ、気持ち悪い！」

思わず叫ぶ。まだ頭はガンガン痛むが、それどころじゃない。私が寝かされていたのは、天蓋つきのふかふかベッドで、なぜか周囲に薔薇の花びらが散らされていたのだ。しかもすごい量。

それだけではない。ベッドの外にも花びらが絨毯よろしく敷きつめられ、目まいを起こしそうなほど強い芳香が部屋に充満している。室内はやや薄暗く、枕もとや壁などにろうそくが灯され、やわらかなオレンジ色の光がそれらを照らし出していた。

天蓋も薔薇模様で、ピンク色をしており、緑色の壁にも淡い桃色の薔薇が描かれている。あまりに薔薇だらけすぎて、むしろ薔薇嫌いになりそうだ。好きな花ではあるけれど、ここまで来ると完全に狂気の勢いである。

ジェズアルドが整えてくれたピンクだらけな妃の部屋が、ごく普通の部屋に見えてしまうほどだ。

突っ込みどころが満載過ぎて、むしろどつと疲労を感じた。突っ込み。その言葉で私はようやくシオルダーバッグがないことに気づいた。うそでしょう。あの中にハリセンが入ってたのに。私は焦って、周囲をきよるきよると見まわすが、それらしいものは見えない。取り上げられてしまったようだ。

「ああ……どうしよう」

つぶやくと、頭の上がもぞもぞ動いた。しばらくじっとしていると、手もとにクロスケがぼりと落ちてくる。小さな体を震わせて、何かを伝えようとしているのだが、残念なことにさっぱりわからない。

「ごめんね、でもあなただけでもいてくれて嬉しいよ」

ぼやくように言うと、私は少し冷静さを取り戻した頭であらためて部屋を見る。ここは寝室らしい。重厚な扉が足の方にあるので、そこを開ければ他の部屋に行けそうだ。妃の部屋よりも大きいような気がする。

全体的に陰鬱な印象で、壁は灰色の石。薔薇の花びらのすきまからのぞく床も、おなじ材質。窓は大きいが、外が暗いのであまり意味をなしていない。

「ああ、なんとなくわかってきたかも」

私はすぐ横の花びらをつまんで目の前まで持ち上げて眺める。疲れたような、乾いた笑いがこみあげる。これには見覚えがあった。

あの吸血鬼　ヴァンパイアがまき散らしていた花吹雪がこれだ

った。あの時は目や鼻や口をふさいでくれて、果てしなく迷惑だった。

「これって、畏よね」

ため息をついて、私は寝台から下りる。クロスケは私の頭に戻るふと、姿見が置かれているのに気づいて、着衣を直す。服は着てきたままだ。特になにかされたようすはない。ちよつとほつとしてから、心に不安が忍び寄るのを感じた。

「ジエズアルドとガーグ、大丈夫かな……」

もしもここがあゝの吸血鬼の根城だとすれば、私たちは完全に罠にかかったということになる。用があるのは恐らく私だけ。私はほとんどん思考がマイナスの方へ向かって行くのを感じ取り、思いっきり首を左右に振った。

「私になんとかしなくちゃ……」

そう言うてはみたものの、ハリセンがなければ私にはどうにもならない。

腕輪はきちんとはある。ただし、マツシモの黄色い腕輪はない。赤と青の腕輪に触れたあと、指輪を見る。ビビアーナ？に妖しい魔法をかけられたとき、これは反応しなかった。もしかしたら、ジエズアルドがあゝの状態ではきちんとは機能しないのかもしれない。

とりあえず、怪しい扉の前に立つ。鍵がかかっているかもしれない。そうなら、ここにあるもの全てぶつけてでも破壊してここを出てやる。私は気合いを入れて取っ手に手を掛けた。そつと押してみ

る。だが、扉は音もなくあっさり開いた。

拍子ぬけした気分で、私は扉の向こうへ足を踏み出す。

そこは居間のようになっていて、テーブルとソファ、大きな暖炉がある部屋だった。暖炉の上には油絵が飾られており、あの吸血鬼とよく似た美しい男性がこちらを見ている。その近くには、似た顔立ちの女性や子どもの絵もあった。

ヨーロッパの貴族の館みたいだ。映画で見た印象でしかないけれど、城館が何かのように思える。

吸血鬼に城館。ぴったりすぎる。

「あ、そうだ」

私はそこまで考えて、もっと良く室内を見渡した。

「もしかしたら」

吸血鬼の弱点を幾つか思いだして、私はごくりとのを鳴らした。もし、もしも、効果があるとしたなら、私ひとりでもなんとかなるかもしれない。だけど、と私は思った。そもそも、マツシモの時はうまく行き過ぎだったのだ。あんな簡単に終わるだなんて、予想の範囲外だった。

まあ、おかげで鏡をひとつだめにしただけで済んで良かったが。

「それでも、何も無いよりはマシね」

武器であるハリセンがない以上、にわか知識の産物でもあった方が
良い。私はそう決めて、とりあえず細長い棒を探す。室内にある
のは、カフェみたいなテーブルと椅子の組み合わせが三つほど。椅
子は、かなり重厚な作りで、私が壁に叩きつけたくらいでは壊れそ
うにない。

「ふむむ」

顔をあげると、きらびやかなシャンデリアが吊るされている。

さすがにあれには手が届かない。視線を暖炉に戻したところで、
なにやら長い鉄の棒が見えた。確か、中の灰をかきだすやつじゃな
かったつけ。私は暖炉のそばへ行き、それを二本手に取った。

「とりあえず、これを持っておこうかな」

つぶやいて、くつついた灰を叩き落としていたとき、背後から声
がかかった。

「何をしているんだい？」

私は振り向いて、ものすごく嫌そうな顔をした。そこには、予想
通りの人物が、やたら気取ったポーズを決めて佇んでいた。

【31 薔薇の姿見】

「ようこそ、僕の城へ。そういえば、君にはまだ名前を言っていないね。僕はロレンツィオ。よろしくね、水紀」

「よろしくして下さらなくて結構です」

私は即答した。

血を吸う男によるしくされても正直嬉しくないよ……。

けれど、私の答えに対する彼の反応は、余裕たっぷりのほほ笑みだった。

彼は何やら妙なポーズを決めて立っている。これみよがしに赤い薔薇を持ち、左手は腰に当てて立つ姿は、どこかナルシストっぽいとりあえず、私にはその奇行は理解不可能です。彼　ロレンツィオは中性的な美しい顔に妖しい笑みをたたえたまま、含みのある声で言った。

「ふふ、まあそんな態度をとれるのも今のうちだけさ。そのうち僕の言うことを聞くようになる、そうになったらそんな口は聞けなくなる。今のうちに好きなだけ言っておけばいいさ」

やや掠れのある甘い中音の声。ジェズアルドで慣れていたので良かったものの、たいていの世の女性は落ちそうだ。

だけど、と私は思った。ウザい。心底ウザい。いや、顔も綺麗だ

し、ポーズもばっちり決まっているし、ちゃんとそれが似合っているのは分かっている。でもウザい。とにかくウザい。私は鳥肌を立てながら、暖炉に突っ込まれていた棒　多分、名前は火かき棒を構えて問う。

「そんなことより、あのサキュバスは何？　あれは貴方の手下なの？　ジエズアルドとガーグはどうしたのよ！」

言ってみて、心に不安が影を投げかけたのを感じた。

「さあね。魔王は今頃ビビアーナが精気を奪っているかもしれないな、ガーグとやらは知らないが、まあ似たようなものだと思うよ。君の言ったとおり、彼女は僕の大切なしもべだ。僕が封印されている間、魔王の城に乗りこんで助けようとしてくれたそうだよ。まさか妃にされるとは思わなかったみたいだね。でも、結局は僕を見つけれなかったと言って、悔やんでいたよ」

遠い目をして語るロレンツィオ。私は陶酔状態の彼の表情を見て、怒りがこみあげた。でも我慢する。ここでただ怒って、怒鳴っても何の解決にもならない。

ジエズアルドとガーグのことは心配でたまらないけれど、私が暴れて何とかなるくらいなら、とつくの昔に何とかなっているだろう。

武器も奪われ、反撃のための手段もなにひとつ思いつかない。情けなくて、悔しくて、思わず目に涙がにじむ。大切なときになにも出来ないなんて、こんなに悔しいことはない。

すると、そんな私のようすに気づいたのか、ロレンツィオが気遣わしげに言う。

「余計なことは考えないほうがいいよ」

「考えるわよ！ 心配なもの、私があなたより強ければ殴ってるか蹴ってるところよ！」

思わず叫んでしまった。大きく息をして、涙のにじむ目でロレンツイオをにらむ。

「ふうん、君は魔王に心を奪われた訳だ。そうか……ねえ、君は彼の本性が何だか知っているかい？」

「本性？ 何のこと？」

私が問うと、ロレンツイオは唇を笑みの形に歪めて言う。

「今は人間に化けているけれど、彼は獣だ。魔獣だよ、人間型の僕とは違う。それでも君は魔王を愛することが出来る？」

当たり前、と言いつづになって、私は思いとどまった。ガーグのことを思い出したのだ。最初に見た彼の姿は、結構きついものがあった。魔物を見慣れた今でなら平気だけれど、あの姿をした存在と結婚すると考えただけで、ありえないと思っていたことを。

だから、拒否しつづけてきた。

マツシモだって、あの牛の姿を知っているから、どんなに甘い言葉をささやかれても心がぐらつくことはない。もちろん、友だちにはなれる。でも、恋人……ましてや、夫婦になることに対しては、ひどく抵抗があった。

声の出なくなった私を、ロレンツイオは実に楽しそうに見る。

「知らないんだね。それじゃあ、見せてあげるよ」

彼はほほ笑みを浮かべたまま、右手をすつと差し出した。

なにをするつもりなのだろうと思いつつ、火かき棒を構えて見ていると、そでの間から、薔薇の茎がしゅるしゅるとのびてきて、ある形をつくりだす。つる薔薇なのか、細い茎がからまりながら楕円形に変化していく。

やがて完成すると、ちいさくふくらんでいたつぼみが開き、淡い紫の薔薇がいくつも咲き誇る。その薔薇からも、芳醇な芳香が立ちのぼり、私は思わず目まいがしてきた。その香りのもとになっている水蒸気のような霧が、つるでできた楕円の中央に集まると、ピーンと音を立てて、まるで紫がかかったガラスをはめたみたいな物体へと変わった。

「闇の晶石を集めた鏡だよ。ここには、あらゆる過去のできごとが映しだされる……さあ、望むがいい。君の知りたいことを」

私は彼の言葉を聞きながら、見てはいけないと思った。

知りたいことは、ひとつだけじゃない、けれど、私はそこにまるで根が生えたみたいに立ちつくしていた。動けない。知りたいという欲に突き動かされ、私は鏡を見てしまった。

やがて、最初に映ったのは魔界ではなく、私が暮らしていた場所。けれど、街のなかではなく、会社でもなく、小さなアパートでもな

い。

黒や灰色でできた長方形の石が立ち並び、ときどき煙がゆらりとあがる場所。

お墓だった。

【32 闇と涙】

最初のうちは、遠すぎて石に刻まれた字が読めなかった。けれど、食い入るように見続けていると、距離が近くなり、読めるようになる。

ああ、そうか。

私はお墓に書かれた名前を見て、ふいに悟った。

ここに映し出されていることが本当なら、私にはもう、家族がないということになる。完璧に、誰もいなくなってしまった。親戚はいる可能性があるけれど、話に聞いたところによると、母とは仲が悪かったというから、縁は切れていると考えて間違いないだろう。

虚脱感におそわれながら、それでも私は鏡を見つづけた。

知りたいことは、自分の過去だけじゃない。

ここで座り込んで、目を反らすわけにはいかないのだ。本当は、足が崩れ落ちそうなくらい震えている。それでも、私は見ることをやめるつもりはなかった。

つづいて、映し出されたのはこの魔界だ。でも、今とは風景がかなり違う。何より、空の色が赤くなく、どちらかという薄青と金の雲にいろどられた、ひどく美しい色合いだ。

ガズルラーヴ城らしき影があり、人の姿をしているジェズアルドや、近くでようすを見ているロレンツイオの姿があるから、魔界で

間違いないと思う。

彼らは、何かと戦っていた。

ガズルラーヴ城の上空には、青味をおびた黒雲が渦巻いている。そこに、何かとても禍々しい印象を受ける顔が浮かんでいた。どうやら。あれと戦っているようだ。

画面には他にも、マツシモらしき黒い牛、緑色の髪をした綺麗な女性などがいた。やがて、彼らの姿が霧につつまれ、その本性があらわとなる。

魔王ジエズアルドの、魔物としての姿がゆらめく霧の中から、少しずつその姿をあらわにしていく。

私は、声を出せずに、ただ見ていた。

すると、ロレンツィオが懐かしそうな声音で教えてくれた。

「……それは、かつて魔王が狂ったときの戦いだよ。僕と、カトブレパスとシー・サーペント、そして彼を含めた四体の魔物は、魔王をのぞいて最も力が強かったから、魔界の四大公爵と呼ばれていた。実質、魔王の配下として、それぞれの領地も与えられていたしね。その主君が狂った……だから、僕たちで倒すしかなかったのさ」

言葉は耳に入ってくる。けれども、意味がなかなか飲みこめない。私は、画面にくぎづけになりながら、小さくその名前を舌にのせた。

「ケルベロス……」

どうしてすぐに思いだせたのかは分からない。どこかで読んだ程度の知識しかなかったのに、首が三つある漆黒の巨大な犬の姿を見たら、その名前がするりと口から飛び出して来たのだ。

「へえ、知ってたのか。そう、それが魔王ジエズアルドの魔物としての姿さ。彼は生れてからずっとこの場所に暮らす魔物だよ。この魔界はね、人間たちによって駆逐された存在が最終的に行きつく場所になってしまったんだ。もともとは、ここは冥界だったんだよ。僕ら吸血鬼も、かつては人間に混じって暮らしていたんだ」

「人間に……駆逐？ 冥界？」

突然にいろいろと語られて、私は混乱した。

「そう。もつと昔、闇が色濃く地上を覆い隠す、蜜のように甘い夜がまだ存在していたころは、僕たちは地上に暮らしていたんだ。森には精霊と魔物が住み、人も死ねば人外の存在となって、闇に生きられたころのことさ」

私は鏡から視線をロレンツイオへと動かして、彼の顔が郷愁にいろどられるのをじっと見た。

故郷を失う、ということがわからない私には、その思いを本当に理解することはできないけれど、つらそうに伏せられた長いまつ毛が、湿っているように見えた。

「少しは闇も残されたけれど、あの忌々しい電気の明りによって、僕らは地上に生きる場所を失くした……特に、僕の配下の魔物にはそういう理由で魔界落ちしたものが多い。なぜなら、僕らは人間から生まれた魔物だからね、純粹に最初から魔物だったものたちとは

違い、人の近くでしか生きられない」

「人から生まれた魔物だから？」

なんとはなしに聞いてみると、ロレンツイオは私を真っ直ぐに見た。

「まさにその通りさ……僕らは、人の血をもらう代わりに、同じ種族にしてしまえる。だから、魔王のように別種同士でつがうことはならない」

「私に、あなたと同じものになれるというの？ その方が、ジェズアルドよりも良いはずだって、そう言いたいわけ？」

「良く分かっているじゃないか」

言いながらロレンツイオはゆっくりと私に近づいてきた。私は火かき棒を構える。

私は歩いてくるロレンツイオに集中した。近寄ったら、これで殴りかかってやるつもりだ。だが、ふいに足もとに違和感をおぼえて視線を下に向け、私はぎょっとした。

「何よこれ、痛っ！」

足に、薔薇のツルがからみついていたのだ。たくさんあるとげが肌に刺さり、そこから幾筋もの血が流れだす。つるは生きもののように俊敏に動き、痛みにひるんだ私からから火かき棒をあっさりと取り上げてしまった。

「あっ！」

思わず手を伸ばすが、二本の火かき棒ははるか遠くに放り捨てられる。これで、十字架が効くかどうか、試してみることも出来なくなった私は、自分のまぬけさに小さく悪態をついた。

「むだな抵抗はやめなよ、せっかくきれいな肌をしているんだし、傷をつけたくない」

私は足だけでなく、腕や胸にまでからみついてきたつるから逃れようともがいた。けれど、つるは意外に固く、ちぎってもちぎっても次々と再生してくるため、ついには手首もからめとられる。こちらにはとげがなく、血だらけになることはなかったが、締めつけが痛い。

「結局は力にものを言わせようってわけね、最低！ ジェズアルドは紳士的だったわよ。あなたのはただの見かけ倒しね、そんな服装じゃなくてもっとそれらしくしたらいいわ」

私は怒って言った。

「いくら姿や種族が同じでも、こんなやり方する奴なんか私は好きにならない！ 軽蔑するだけよ、ジェズアルドの姿を見せて言いくるめようってそうはいくもんですか」

「へえ、じゃあ君はあの巨大な犬の妻になってもいいんだ」

問われて、私は言葉につまった。

心の中はぐちゃぐちゃだった。まるで磔にされたみたいな格好で、

今にも吸血鬼に襲われそうな状況の中、まともにものを考えるなんてできるわけがない。しかも、その前に天涯孤独であることを突きつけられ、淡い恋心を抱いた相手の、人間ではない姿を見せられているのだ。

涙が勝手に涙腺からあふれ、頬を伝う。

わからない、なにもかも。

でも、このまま吸血鬼になるのは嫌だ！

涙を払いたくて、まぶたを閉じる。そこに浮かんだのは、優しくほほえむ魔王ジエズアルドの顔だった。

【33 理解と反撃】

最初の出会いからずっと、ジェズアルドは優しかった。私はただ、ひとりで勝手に怯えたり、美形なのは外側だけで、中身は魔物で人間ではないのだから普通に考えて結婚なんて無理だ、と決めつけたりして、自分のことしか考えてこなかったのに、彼はずっと優しくった。

何度も拒絶した。ロレンツイオみたいに、むりやり言うことを聞かせようとすれば出来たはずだ。でも、ジェズアルドはそうしようとはなかった。絶対に結婚するし、逃がさないとくりかえしながら、それでも、私が嫌がることはしなかったし、馬車や移動のつらさをすぐに察してくれた。

ちゃんと、私を見ていてくれたのだ。

気づくのが遅かったけれど　今なら、その優しさが身にしみてわかる。だからこそ、気づいたときにはもう、心なんて決まっていたのだ。

ああ、もう私の馬鹿……。

でも、例えジェズアルドが生きてくれていたとしても、噛まれてしまえば、本当の気持ちを言うことが出来なくなってしまう。私は、ものすごく後悔していた。自分で自分の気持ちを疑ったばかりに、言う機会が永遠になくなってしまっなんて思わなかったのだ。

「ホント　どうしようもない、私」

腕は疲れきって筋肉が悲鳴をあげているし、足は無数の傷のせいで熱をもったように熱くて痛い。横に視線を移動させれば、まだつるで出来た姿見はそこにあり、彼らの過去の戦いを映し出している。大きな黒い犬が、口から炎を吐き出し、全身に紫がかかった雷を帯びて突っ込んでいく。

あの強さが私にもあれば良かったのに。非力さを恨んだのはこれが初めてじゃないけれど、今までで一番つらい。

「本当はね、こんなやり方は好きじゃないんだ。でも君は僕の言葉に酔わない、顔を見ても、ただ睨むばかり。言うことをきかせるには、力づくしかないとわかったよ」

つ、と伸びてきた優美な人差し指が、私の首すじをなぞる。

私は小さく呻いて、恍惚の表情で舌なめずりしているロレンツイオを見た。

嫌だ！ 誰か、誰か助けて！

心の中で、私は悲鳴を上げた。

そのとき、頭の上で何かが動いた。私はそれがクロスケだとわかった。まだ私の頭にくっついていたのだ。早く逃がしておけば良かった。さらなる後悔が心を締めつける。

だが、クロスケは私の頭のうえでざわざわとその黒い毛を逆立て、威嚇しているみたいだった。

「クロスケ！ いいから、あなただけでも逃げて」

頭の上の小さなふわふわした生きものが死ぬところなんか見たくない。私は頭を左右に振って、クロスケを払い落して逃がそうとした。けれど、クロスケは小さなかぎ爪がついた足で髪につかまり、落ちてこない。威嚇の音はますます大きくなっていく。

「……そいつは、黒毬！ まさか」

やがて、ロレンツイオがクロスケの存在に気づいた。

気のせいだろうか。私には涙で曇った視界に映る彼の顔が、妙に怯えているように見える。けれど、私がまばたきをくり返す前で、ロレンツイオは狼狽したように自身の足元や背後を見やっっている。

やがて、その理由が明らかとなった。

「う……わぁ」

思わず、感嘆のため息がもれる。

足もといっぱいに、小さくてふわふわした、うさぎやハムスターのような小動物が波のように押しよせて来たのだ。ねずみや、猫みたいなのもいる。ただし、みんな魔物らしく、牙が鋭かったり、角が生えていたり、武器なんかを持っているものも混じっている。

クロスケが頭の上で、さらに音を立てる。

すると、集まった小動物たちが動きだした。私を捕らえている薔薇のつるをかじり、切り刻み、ロレンツイオの足を針みたいなたいで刺しては逃げてみたりしている。可愛いが、これは恐ろしい。なに

しろ、数が半端ではないのだ。

最も多いのは、灰色のねずみだろう。目がくりっとしていて愛らしいものの、かつては伝染病を運び、食料を食い荒らす害獣としい忌み嫌われていた。その鋭い牙が、次々と薔薇を細切れにしていく様を見ていると？かわいい？という単語が自分の中から消え失せていくのがわかる。

こんな集団で襲われたらと思うと、寒気がする。

じりじりと、つるが細かくなつていくのを見ていると、外から轟音がした。私は驚いてそつちを見たが、壁しかない。だが、轟音の正体はすぐに知れた。

派手派手しい音を立て、壁が破壊されたのだ。

「きゃああっ！」

思わず目を閉じて悲鳴を上げる。

もうもうと砂ぼこりがあがり、私は思わず咳をしてしまった。

「よお、よくもこの俺様を騙してくれたな、この蚊野郎が！」

その声を上げたのは、牛に変じたマツシモだった。大きく穴の空いた壁から、バルトも入ってくる。じつと見ているとマツシモはすぐに怪しい霧をだし、人の姿へと戻った。この時ばかりは、マツシモがものすごく格好良く見えた。

「おお！ 無事でしたかお妃さま！ 我らはこやつ部下らに騙さ

れたのでございます。全く、面目次第もございませぬが、とにかく御無事でなにより！」

言いながらバルトは鎧をがちゃつかせて私の側へ来て、大きな手で手足を拘束している薔薇のつるをむしりとつてくれた。小動物たちによつてもろくなつていたつるは、簡単に引きちぎられ、床にはらばらと細切れになつて散らばつた。

私はバルトに受け止められ、赤いあざのついた手首をさすりながら、血のにじむ足首を見た。大したケガではないようだ。ほつとして、私はお礼を言った。

「ありがとう、バルト、クロスケ……それにマツシモ」

「無事で良かったな。お礼に俺の世話をさせてやる、だが、その前に……こいつを何とかしなけりやな」

私はマツシモの言葉に、小動物たちを追い払っていたロレンツイオに視線を戻した。小さな生きものたちはすっかり追い払われ、中には傷を負っているものもあるようだ。私はそれを見て、後で手当としてあげようと思った。

「もう来たのか。でも、忘れていたようだね、君は一度封印されたことにより力が半分になつてしまつていないだろうか？ しかも、僕はまだ全力を出していないしね」

そう告げると、また薔薇のつるがざわめきはじめる。ロレンツイオが力尽きない限り、この薔薇が枯れることはなさそうだった。限りなく増殖していく薔薇のつるを苦々しい思いで見ていると、背後から突風が吹きつけた。

その風はカミソリのようにつるを切り刻み、ロレンツィオの服と肌を少し傷つける。

彼の視線が鋭くなった。口もとに、悔しげな笑みが浮かぶ。

「そうか、生きていたか……ジエズアルド」

【34 歓喜と絶望】

私はロレンツイオが苦汁を飲まされたような顔で言った言葉に、振り向いた。心が一気に希望で満たされたような気分、のどがつまって声が出ない。

「そのようだな……正直、少し危なかったが、余はひとりではないのでな」

そう告げると、ジェズアルドの脇からガーグが姿を現す。彼の後ろには風が目に見えるほどの勢いで渦巻いてかたちづくられた、球形の空間があり、中にはビビアーナが女性の姿で閉じ込められている。

「……その風、その顔……まさか、バルバラの子か」

「そうだ。まだ幼いから彼女ほどの力はないが、幼いがゆえに、ビビアーナの魅了があまり効かなかったようだ。余より早く魔法から解放されたガーグのおかげで、ここへすぐに駆け付けることが出来たが、少し遅かったようだな」

ジェズアルドは楽しげに笑いながら告げた。

「お妃さま！」

ガーグが心配げな顔で駆けよってきて、私に抱きついた。私も思わず抱きしめ返す。ああ、とにかくふたりが無事で本当に良かった。後で、もっと詳しく話を聞こう。

「無事で良かったっス、あいつの魔法から覚めたらお妃さまがいなくて、オレ、役に立てなくてごめんなさいっス……」

「そんなことない、こうして来てくれただけで十分よ。ありがとう」

背中を優しく叩きながら私は言う。心からそう思っていた。小さな肩が震えている。泣いているみたいだ。私はそのまま抱きしめ続け、ふと彼が身につけているものを見てはっとした。ガーグは、私のショルダーバッグを持っていた。どうやら、気を失ったときにビアーナに奪われたらしい。

ガーグは、私の見ているものに気づいて、体を離すと、鼻をすすりながら手渡してくれた。

「これ、あのサキュバスが持ってたっス。封魔扇には触れなかったみたいっスから、中身は大丈夫だと思うっス」

「そっか、やっぱり。ありがとう、これであいつをぶっ叩けるわ」

言いながら、私はバッグの中からハリセンをひっぱり出した。ガーグの言ったとおり、中は全く荒らされておらず、ガズルラーヴを出てきたときのままだった。私はかんだ体勢から立ち上がると、ハリセンの先をロレンツイオに向けて言った。

「よくも吸血鬼にしようとしたり、皆を騙したり変な魔法にかけたりしてくれたわね。これで思いっきり恨みをこめて叩いてやる。マツシモのときみたいに手加減なんてしないから、痛いわよ！」

「へえ、君に僕がつかまえられると本気で思ってるんだ。ただの人間のくせに……それに、僕はまだ負けてないよ。困るだけで勝

ったと思うなんて可愛いね……君たちで僕を捕まえらるって言うんなら、やってみるがいいさ」

余裕たっぷりと言うと、ロレンツイオは両腕を大きく広げた。彼の背後から、薔薇のつるが凄まじい勢いで伸びて、私たちへと向かってくる。あれにからめとられたらまた磔にされてしまう。とっさにそう思った私だったけれど、それは杞憂に終わった。

私の隣にいたガーグが、風の魔法を放ったのである。目には見えないカッターが荒れ狂い、薔薇のつるは見る間にみじん切り状態になる。

「うわ、凄い……!」

私は思わず歓声をあげた。

「だろうな。こう見えて、ガーグは魔界の風属性を持つ魔物の中でも極めて強力なのだ。だからこそ、お前の付き人に選んだんだ」

いつのまにやって来ていたのか、ジェズアルドの音がすぐ近くからした。私はガーグと薔薇のつるとの戦いから目を反らし、首だけで振り返って彼の顔を見ると、声が出なくなってしまう。言いたいことがたくさんあったはずなのに、こうして間近で無事な姿を見ると、全部どうでも良くなってしまう。

それでも必死にのどをこじ開けて、私はぎこちなく笑いながら、つぶやくように言った。

「……そう、だったんだ。私、知らないことがいっぱいあるのね。

……と、とにかくふたりとも無事で本当に良かった。すごく心配だ

「だから」

ジェズアルドは嬉しそうにほほ笑み、私の肩に手を伸ばしかけてふいにやめた。どうしたのだろうかと思っただけで視線を追うと、彼の目がある場所に釘付けになっていることに気づく。

室内ではガーグが次々と薔薇のつるを刻み、バルトが剣で払い、マッシモが砂で根から枯らせているのだが、あの姿見のようなものは、彼らの攻撃対象から外れて、まだ残っていたのだ。中央のガラス状の部分は、まだ映像を映している。

本来のジェズアルドの姿も、くつきりと映っていた。

「あれを……見たのか？」

ジェズアルドは掠れた声で問う。その顔は、衝撃と絶望に暗くかげっている。私は暗い顔を見て、彼が話してくれたことを思い出した。確か、人間では二番目に妃として連れてこられた話だ。彼女はジェズアルドの本性に恐怖して、自害したのだ。

「……見たわ。で、でも！ 私は平気だから！」

慌てて言う。けれど、彼の目から疑いの色が消えない。私の言葉を信じていないのだ。どうすれば信じてくれるのだろう。何も思いつかなくて、私は焦った。

そのうえ、考えている暇もなかった。

大きな音がして、剣が床に落ちる音が響く。ガーグの風をかいぐくった薔薇のつるが、バルトの巨躯を捕らえたのだ。マッシモも砂

を使うだけでなく、剣を手につるを払っているが、追いつかない。ロレンツィオは、最初にいた場所から一歩も動いていないというのに。

ジェズアルドの目が、私から反らされた。

彼はロレンツィオに向けて叫んだ。

「余の部下を離せ！」

【35 決着し帰還】

ジエズアルドは叫んで、てのひらに火の球を生み出した。その火の球から、炎がいくつもロープとなって飛びだし、見ている前でムチの形をとる。ジエズアルドは、それを勢いよく振った。途端、飛び散った火の粉が、薔薇のつるにふりそそぎ、そこから燃えはじめる。

「くそっ！」

ロレンツイオの舌打ちが聞こえた。

やがてバルトをがんじがらめにしていたつるは燃え尽き、枯れ落ちる。解放されたバルトは再び大剣を振るってつるを切り払う。

「魔王様！ 申し訳ありません！」

大きな声で詫びを言うバルト。その後方から、マッシモの砂がじりじりとつるを覆い、ゆっくりと枯らしていく。気づくと、部屋を埋め尽くさんばかりにはびこっていたつるが、凄まじい早さで消えていく。

ロレンツイオは笑みを消し、口の中で何ごとかをつぶやきます。私にははっきりとは聞こえなかったけれど、何か嫌な予感がした。聞きなれたものとは違い、かなり長いが、それは魔法を使うための呪文のように感じたのだ。

幸い、足もとにはびこっていたつるはかなり無くなっている。私はとっさに走り出した。

「お妃さまっ！」

焦ったようなバルトとガーグの声。それでも私は急いで走った。

ジェズアルドの元へ。

そんな必要はなかったのだと思う。でも、体が勝手に動いてしまったのだ。脳裏を、最悪の想像がよぎる。私は急いでジェズアルドとロレンツイオの間に割って入るように立った。

ジェズアルドがあれに飲みこまれて消えたりしたら……！

「水紀？」

やがて、ロレンツイオの両手の間に、ぽっかりとした闇が生まれるのが見えた。後ろで、ジェズアルドが息を飲む音がした。

「どけ、水紀！ ここには……」

焦燥に彩られたその言葉を、私は最後まで聞くことは出来なかった。とつさに目の前にかざしたハリセンに、ロレンツイオが放った闇がぶつかるのがわかる。同時に、両手にびりつと電気が走ったような痛みを感じる。まるで静電気を十倍にしたみたいな痛さに、私は思わず悲鳴をあげる。

例えるとしたら、全力で思いっきりひっぱたかれた、というくらい痛い。

「きゃああっ！」

体は、すぐ後ろにいたジェズアルドが受け止めてくれた。

が、宙に放られたハリセンは、そのまま闇の水晶玉みたいなものとぶつかり合い、激しく火花を飛び散らせながら、その白い部分を闇へと染めていく。やがて、完全に闇に染まりきると、ハリセンは砕け散ってしまった。そして同時に、闇の水晶玉も消滅した。

砕け散ったハリセンは黒いきらきらした光の粒となり、私の前に降り注ぐ。綺麗だった。私は思わず手を差し伸べて、その残がいとも呼べる光をてのひらで受け止める。

「そんな……」

脱力したようなロレンツィオの声がした。彼はそのまま、崩れ落ちるように座り込むと、うつむいて動かなくなってしまった。

私は彼のようすを見て、それが最後の攻撃だったのだとさとした。でも、どうしよう。私は絶望的な思いで、抱きとめてくれるジェズアルドを振り返った。

「ハリセンが……どうしよう、これじゃあ封印出来ない」

今が千載一遇のチャンスなのはどう見ても明らかだ。けれど、肝心のハリセン……というか封魔扇がなければ、どうしようもない。

「……それなら恐らく、何とかなると思う。水紀、試しにあいつにげんこつをくらわせてみてくれないか？」

「……はい？」

私は思わず聞き返した。しかし、ジェズアルドは真面目な顔でもう一度同じことを言った。私は、疑い深いまなざしで彼を見やり、どうすべきか考えた。

ロレンツィオにげんこつを落とすことについては異論は全くない。クロスケが活躍し、バルトがマツシモと駆け付け、ジェズアルドとガーグが来てくれなければ、私は今頃吸血鬼の仲間入り、などというろくでもないことになっていただろう。

お返しにちよつとくらいし返しくらいはしたい。

でも、それで封印が出来るとは思えない。

「さあ……やってみてくれ」

言つて、ジェズアルドは体を離れた。私は困惑しつつ、ロレンツィオに歩み寄り、右の拳をにぎりこむ。誰も何も言わないし、咳ひとつしない、静寂に包まれた中で、あの姿見だけが、ブウンという家電製品がたてるみたいなき音を立てている。

「じ、じゃあ行くわよ!」

私はうつむいたロレンツィオを見て、ちよつと可哀想に思いながらも、ごんっ!と頭のとっぺんにげんこつを落としてやった。すると、彼は途端に紙袋を押しつぶしたようなぼふっ、という音とともに赤の腕輪に吸い込まれて消えた。

マツシモのときと同じように、腕輪は輝きはじめ、やがて小さな小瓶になり、私の足のひらにころり、と収まった。すると、中から

小さなキィキィという声があがる。よく耳を澄ませてみると、ロレンツイオらしき声が、出せとか何とか言っている気がする。

私は聞かなかったことにした。

マツシモのときとは異なり、出してやる必要はないからだ。それに、また出して血を狙われたら困る。そこらへんをよく話し合っただけで、ジェズアルドやバルト、ガーグラに防護策がないか相談してからでないと怖くて出せないし……。

そんな訳で、なぜか封印は成功した。私はふしぎな思いで振り返って、小瓶を皆に見せた。

「あの、何か封印出来ちゃったんですが……？」

「やはり、思ったとおりだったな。その手についている封魔扇の粉を媒介にして、魂を中継させられると思ったのだが……それにしても、まさかこんな簡単に行くとはな」

「お妃さますごいです！」

「流石ですな、魔王様が直々に選ばれただけのことはある」

「それでこそ俺が世話係に望んだ女だな」

皆したり顔で言ってくる。私はそれらの賛辞に対し、非常に気まぐずだった。まったく全然大したことをしていないのに褒められるとか、ばつが悪すぎるんですけど……。

穴があつたら入りたい心境になったのはここ最近では久しぶりだ。

お願いだから、不相応なことで持ち上げないでくれないだろうか、
と言いたいけれど、今までのことを思い出して口をつぐむ。ここで
否定したら、もっと褒めそやされるのだ。

私の頭の上でクロスケが跳ね、すべてが終わったことを確認して
安心したのか。他の小さな魔物たちも姿を現して私をきらきらした
目で見てくる。本当、お願いだからやめて……。

私は困惑しつつも、ジェズアルドの側へと歩み寄り、ぎこちなく
笑いかけた。

「と、とにかくこれであとは一体だけになったね。私のせいであんなことになったのに、ありがとう、皆も後少しだけお願いします」

そう言って、頭を小さく下げた。

ジェズアルドは、困ったように笑いながら私の頭に手を伸ばした。
私は逃げなかった。けれど、その手は寸前でぴたり、と止まった。
ジェズアルドの目が、一瞬姿見をとらえたことに、私は気づくこと
が出来た。彼は熱いものにも触ったようにすぐ手を引っ込めると、
言った。

「さあ、全て済んだのだ……城へ戻ろう」

【36 避けられて追って】

ロレンツイオの城から帰還して、一週間が経った。帰ったときには、皆疲れ果て、傷ついてもいたけれど、そこは魔物。すでに皆元気にいつもの日常をとり戻している。

ただひとつのことを除いては……。

朝食の席。

ジエズアルドに頼んで、調理してすぐに食べられるよう、厨房の片隅に置かせてもらったテーブルには、今日もガーグとマツシモが座っている。バルトが顔を出すこともあるけれど、彼は食事の必要がないので、話をしてくだだけだ。

ガーグは肉食、マツシモは体格に似合わず草食なので、一応どっちにも合わせて作っている。そして、いつもだったら必ずいるはずの姿がなかった。

ジエズアルドだ。

彼も肉食なので、いつもは肉を使ったあれこれを用意しておくのだが、ここ数日全く姿を見せなくなってしまったため、今日は用意をしていない。いつも事前にバルトが教えてくれるので、用意する必要があるかどうかはわかるのはとても助かる。

でも、いつも仕事を放り投げてはやって来て、甘すぎて脳を砂糖漬けにする気かと言いたげな言葉を投げかけてくるのに、ここ数日

はるくに言葉もかわしていない。私は正直、寂しかった。

「今日もおいしかったツス、お妃さま、どうしてこんなに料理上手なんスか？」

「え、そうかな？ ふつうだと思っけど……料理くらいは出来ない和生活出来なかったからだと思っよ。でもありがとう」

「謙遜することないと思っぜ、この草の味付けとか最高だ」

マツシモは言って、山盛りにしたサラダをもりもりと食べる。ドレッシングを作ったくらいでそんなに大した手間はかけていないのだが、さすがは牛、良く食べる。なぜか彼を見ながら、牧場で草をのんびりと食む牛を思い出して、私はほのぼのとしてしまった。

「ねえ、あの……ジエズアルドって今忙しいの？」

私はガーグに訊ねてみた。彼は水を飲みながら、首をかしげた。

「いつも通りだと思っつスよ。オレは魔王様付きじゃないからわかんないんスけど、そういえば、最近ここに来ないっスね、魔王様」

「ついに水紀を諦めることにしたか。俺の勝ちだな、これで世話係が手に入る」

ばりばりと野菜を食べながら勝ち誇ったようにマツシモが言う。私はふと、うんざりしながらずっと気になっていたことを聞いてみた。

「あのさ、世話世話って言うけど具体的に私になにさせるつもりだ

ったの？」

「ん、そりゃあお前、世話って言ったらブラッシングだろ。外で水を浴びて、ブラシでこすって体を綺麗にするんだよ。配下の魔物どもだと繊細な力加減が出来なくてな、以前ここに落っこちてきた人間を拾って世話させたらすぐ上手くてびっくりしたんだ。そいつはもう死んじまったけど、俺に拾われて嬉しかったって言ってたな」

「ふうん、何だ、世話ってそういうことだったの。それなら暇な時にやってあげてもいいわよ」

私は自分のごはんを口に運びながら言った。ちなみに、私が自分に作ったのは、ごはんと味噌汁に、きゅうりの浅漬け、市販の納豆、卵焼きだ。後でお茶を飲む用意もしてある。明日はパン食にしようかな、などと考えていると、マッシモが衝撃を受けたように言う。

「い、いいのか？」

私は思わず食べる手を止めて、マッシモを見た。何か、目が血走ってて怖いんですが。

「本当にいいんだな？ ブラッシング……」

「べ、別にいいわよ。どうせ暇だもん……まあ、体調悪いときかはダメだし、毎日は大変だから無理だけど……」

そう言ってやると、彼は放心したような表情になり、動かなくなってしまう。そんなに喜ばれるとは思わず、私はもしもへたくそだったらどうしようかと内心不安に駆られた。

けれど、それよりも今は……。私は空席を見つめて、決心した。

「ガーグ、後片付けが終わったらマールと一緒に来てくれる。ジェズアルドとどうしても話をしたいの」

「もちろんっス！　じゃあオレ、マールさんに声かけてくるっスね」

「うん、お願いね」

私は言っただけで笑むと、出ていくガーグを見送り、放心状態のマツシモは無視して食事をつづけた。何としてでも、ジェズアルドを捕まえて話をするのだ。そう決めたら、食欲が湧いてきた。私は用意した食事を全て平らげ、急いで後片づけに向かった。

ほどなくしてガーグがマールを連れて戻ってきた。それから三人で後片づけをしたので、思いのほか早く済ませることが出来たのだ。だった。

つ、捕まらない……。

私は目玉がぎよろつく廊下の壁に手を掛けて、せいはあと息をした。これが漫画だったら、顔に縦線が大量に描かれて青ざめる状態に違いない。アホ毛も何本か飛び出てると思う。

「何だか、魔王様、お妃さまを避けてるみたいっスね……何かあつ

たんすかね」

「だよ、じゃなきゃこんなに捕まらない訳ないわ」

私は今、ガーグとマールと一緒に廊下を歩きながらぼやいた。

最初はまず、いつもいる大広間に行ってみることにした。けれど、いたのは掃除している魔物のみで、ジェズアルドの行方をたずねたら、会議室だと言う。すぐにそこへ向かったのだけど、会議は少し前に終わったという。同じく行方を訊くと、食堂じゃないかというので戻ったら、もう食事を終えて外に出かけたと言われたのだ。

もの見事にすれ違いまくりである。ここまで来たら意図的に避けられていると考えるのがふつうだ。だけど、避けられるようなことをしたつもりはない。もしかしたら……ロレンツイオの城で、様子がおかしかったことと何か関係があるのかもしれないとは思っていた。

「どうしたんすかね、いつもだったら仕事が終わると率先してお妃さまのところに来るのに」

「……うん、その理由を知るためにもどうしても話をしたいの。……よし！ こうなったら手分けして捕まえましょう。見つけたら私の部屋に連れてきてもらえる？ 私もあちこち探してみる」

「わかりましたわ」

「了解っす！」

ふたりとも返事をする、私なんかじゃ足もとにも及ばない速度

で去っていく。

「さて……と」

腰に手を当てて、ため息をつくとき、私は歩きだした。さすがに走り回ったので、ちょっとわき腹が痛いのだ。落ち着くまでは走るのはやめよう。そう決めて、広大なガズルラーヴ城のどこにジェズアルドがいるか考える。

が、なかなか思いつかない。と言うのも、いつも向こうからやって来るのが当たり前になってしまっているせいで、彼の行動範囲がわからないのだ。仕方ないので、見かけた魔物たちに聞いてみようと思いつきながら、私は歩きつづけた。

【37 バルトの悩み事】

私は、たった一週間前に起こったあのことを思い返してみた。

ロレンツイオの城館で見させられた姿見に映っていた映像。そこに浮かび上がっていたジェズアルドの本性。それを、私は見てしまった。そのことを知ったときから、彼の態度がおかしいのだ。

「まあ、見られたくない姿を見られたら、嫌よね」

つぶやいて、緑色の鬼火がふよふよと浮遊する中を歩く。

妃のひとりに怖がられたことがよほどつらかったのだろう。私だって、見られたくない姿や、知られたくない秘密のひとつやふたつはある。ジェズアルドにとってのそれが、あの本性だった、ということなのだろうか？

私はそんなことを思いながら歩いた。脳裏に、ネガティブな考えが浮かぶ。もしもジェズアルドが、本性を知った私が恐怖することを恐れて、妃にならなくても良いなどと考え始めていたらどうしよう。

大丈夫。ジェズアルドは、そんなことはしない。きっと。

自分に言い聞かせながら、さらに廊下を歩く。まだ誰ともすれ違わない。

空気が重く感じる。相変わらず気温の変化はないが、少しだけ、

空気に湿り気がまぎってきているのか、肌にまとわりつく空気が重い気がした。彼は良い傾向だと言っていた。

私はふと、買ってもらったものの中に、温度計と湿度計が一緒になった物を思い出した。その数字をふたりで見れば、一喜一憂していた。湿度は、自分がちゃんと雨女として役に立っていることがわかる唯一の指標だったから、素直に嬉しくて、毎朝確認するのが日課になっている。

それでも、ジェズアルドは毎日部屋を訪ねてきては針が示した湿度を見て、私に笑いかけてくれたのだ。自分の力も少しずつ戻ってきていると言って、嬉しそうに眺めていた顔。私はその顔を見るのがすごく嬉しかった。

そんなに前のことじゃないのに、なんだか遠い日のことのようにだ。

「私、怖がったりしなかったはずなのにな」

姿見の映像で凄まじい形相の、犬というより狼に近い鋭い眼光と牙をもつ三つ首の怪物を見ただけでは、恐怖は感じない。映画の中のモンスターを見るようなものだからだ。だけど、と思う。それを実際に目にしたらどう感じるだろう。恐怖を感じるかもしれない。怯えて逃げたくなるかもしれない。

本音を言うと、その姿を見てみたいけど……。

きつとジェズアルドは嫌がるだろう。そう感じた。だったら、別に見ないままでもいいかなと私は思った。それでも、ちゃんと話をして避ける理由を聞かなくちゃ。私は少し直ってきたものの、まだ痛いお腹を押さえつつ、早足で歩く。

しばらく行くと、前方から金属が立てるがちゃがちゃという音が聞こえてきた。私は、バルトだろうかと思っただが、この城には彼以外にも鎧姿の魔物が何体かおり、定期的に巡回して警備しているのだ。私は顔あげて、こちらに向かってくる鎧を見た。

それは他の鎧さんたちではなく、バルトだった。私はすぐに声を掛けた。

「……あ、バルト」

彼はすぐに私に気づくと、立ち止まって待っていてくれた。その間ずっと、抱えた首の目が私に向いているのがわかる。しかも、いつもだったらすぐに大きな声で「おお、お妃さま！」と言ってくるのに、それがない。私は思わず立ち止まり、訊ねた。

「あの、もしかしてバルトじゃなくて別のデュラハンさんだったり？」

「いえ、我はバルトロメオでございますお妃さま」

返ってきた声は、妙に沈んでいた。私は初めて見るバルトの様子に、思わず問う。

「あの、何かあったの？ 落ち込んでるようだけど……」

「はあ……いや、しかし、お妃さまに聞いて頂くほどのことではありませぬし……」

何やらやたらと齒切れが悪い。私はジェズアルドのことも気にな

つてはいたものの、ひとまずそれは置いておくことにした。もしかしたら、ガークやマーラさんが見つ付けてくれているかもしれないし。そう決めると、訊ねる。

「そんなに沈んでいたら気になるじゃない。私なんかで役に立てるなら相談して、まあ、聞くくらいしか出来ないかもしれないんだけど」

「よろしいのですか？」

「もちろんよ」

私は大きくうなずいた。バルトはしばらく困ったように黙り込んでいたが、やがてぽつり、ぽつりと語り始めた。

何でも、ここ最近、城の裏手に女性のゴーストが出るのだという。バルトは巡回中、怪しい者かと思って大声を出して威嚇したのだそう。うだ。そうしたら、ものすごい速さで消えてしまったという。

その翌日、また巡回中にゴーストと出くわした。驚かさないう、今度はそつと近づいてみたのだが、やっぱり逃げられてしまった。けれど、顔は見られたのだという。

「それが……ものすごく美しい方でして……我は、我は、この冷たいはずの心臓が熱くなったような気がしたのでございます」

「え……つと、それってつまり、そのゴーストに恋をしちゃって困ってる、ってこと？」

「恋！　これが恋なのですか？　デュラハンとして生まれてこのか

た、そのようなことは経験したことがありませぬゆえ、わからないのですが、恋なのですか？」

いや、どう考えたって結論は「恋しちゃった」だと思うんだけど……。

兜の隙間からのぞく困惑気味の目を見て、私はふむ、とうなる。

「それで、バルトはどうしたいの？　まだお話も出来てなさそうよね、その様子だと」

「それは、何しろ相手の女性は私の姿を見るとものすごく怖がるのです。姿をさらして声を掛けることすらままなりません。危害を加える気はないと言っ暇すらないのですから」

バルトは落ち込んだ声色で残念そうに告げた。私は、なんとなく気の毒に思えてきて、女性の幽霊ならもしかしたら、と思っ言った。

「じゃあ、試しに私が声を掛けてみようか？　それでも逃げだすなら手の打ちようがないけど、同じ女性だし、多少は違つかもしれないわ」

「そんな、お妃さまにそのようなことをして頂く訳には……」

「いいのよ。そうだ、それならちょっと私を手伝って。今ね、ガ―グとマ―ラさんにもお願いしているんだけど……」

私はそう言って、ジェズアルドを探して、その場所に私が行くまで引き止めておくか、私が居る場所（ただし、妃の部屋以外に）連

れてくる役目をお願いした。

バルトはすぐに請け合ってくれた。

「それでは、我も探しに行きます。その……今日の夜、よろしくお願いたします」

「ええ、わかったわ」

私は笑顔でバルトを見送ると、彼とは逆方向に歩きだした。

けれど、その日は結局ジェズアルドを遠目に見ることしかできず、私はバルトが好きになってしまった女性の幽霊とやらを見るべく、支度をはじめたのだった。

【38 ロレンツィオとの交渉】

バルトが来るのを待ちながら、私はついジエズアルドのことに思いをはせてしまう。

本音を言うと、ちょっと落ち込んでいた。

ジエズアルドは、向き合って話すことがそんなに怖いのだろうか。きっとそうなのだろう。何しろ、私を見るなりすぐに移動魔法を使って消えたくらいだ。

「はあ……せめて人海戦術みたいなのが使えればなあ」

私はぼやいた。夕食も済んだし、後はバルトが迎えに来るのを待つだけだ。

ベッドの上に腰かけて、室内を見渡す。いつ見ても広い部屋だと思う。落ち着かないので、寝室だけ個人部屋みたいにして使っているけれど、それでも広い。壁は石壁で、窓は大きくて不思議なことに冷たくないガラスがはまっている。足元には絨毯が敷かれていて、最初は踏むのに抵抗があった。

寝室には、天蓋がついたベッド以外に、筆筒と小物を置くための棚、鏡台、デスクとチェア何かが置いてある。一部をのぞいてこの城の物置きから持ってきたもので、高級感があって落ち着く。

普通に働いていたら一生見るだけだっただろう家具と調度。こんな物に囲まれて生活することになるなんて、本当に思わなかった。最初はこんなすごいもの私には似合わない、とか言っていたものの、

マールさんに使わないものは死ぬだけですから、と言われて納得したので、今ではきちんと手入れしながら、大切に使うことに決めている。

その小物を置く棚に、あの小瓶が三つ並んでいた。赤、青、黄色。うち二本は空なのだが。

『水紀……いい加減に僕を出してくれないか。いつまでこうして封じておく気なんだ。マッシュモはすぐに出してやったというじゃないか、この扱いの差は何なのさ。あんな馬鹿牛は良くて、どうしてこの紳士の鑑たる僕は出してくれないんだい？ ねえ、出してくれたらいいことを教えてあげるよ。だから、お願いだ、出してよ』

赤い小瓶がぼんやりと輝きを放つと同時に、いつものやや哀れっぽい声が聞こえ始める。

「ああ……またうるさいのが」

時刻は夕方。そろそろ吸血鬼が活動を始める時間帯である。あれ以来、ロレンツイオは毎日のように瓶から出せ出せと連呼するようになった。あんまりうるさいので別の部屋に置いたりしたのだが、彼を封じた赤の小瓶は、どういう訳かしばらくすると同じ場所に戻っているのだ。

おかげで、眠る前には必ず別の場所へ移動させるのが日課となっている。

『うるさいとは失礼だなあ。僕の美声を聞いて嬉しくないのかい？』

「睡眠妨害になるほど聞かされたらどんな美声だって騒音でしかあ

りません」

私はしごく真つ当な答えを返す。

「それに、いいことだなんて私は信じない。だって、口がものすごくうまそうなんだもの」

『ふむ、それについては否定しないよ。でも、僕の口のうまさが発揮されるのは美しい女性の目を僕だけに向けさせるときだけさ、水紀、君のようなね』

「……さて、今日も物置に置いてこようかなと。それとも別の場所がいいかな」

私はベッドに下ろしていた腰を上げ、ネックレスをつまむ。一瞬で地下まで移動できるというのは本当に便利だ。

『ま、待て待て待ってくれ！　なんで褒めているのに君はいつもそんなにつれないんだ』

「美しい女性という言葉を別の言葉に変換して聞いているからです」

律儀に答えつつ、私は棚の瓶をつまみあげる。擦りガラスのような曇った表面の中で、光が慌てたように点滅をくり返すのを見ながら、呪文を唱えようと口を開く。

『待ってくれ、何に変換しているんだ？』

「餌、もしくは食べもの」

『……それは、否定できないけど。でも、いいことって言うのはジエズアルドに関することだよ。それでも聞かなくていいのかな？君、彼と話をしたいのに出来ないんだろう。僕は彼の弱点を知ってるからね、捕まえて話をさせるなんて余裕で出来るよ！』

「……く」

私は思わずうめいた。こんなタイミングでそんなうまい話を持ち出されるとは思わなかった。だけど、簡単に出すわけにはいかない。ロレンツィオはうそをついているかもしれないし、何より、まだハリセン、じゃなくて封魔扇が戻ってきていないのだ。

黒い灰になってしまった封魔扇は、現在修理中だ。床に散らばった粉を丁寧に集めて、魔界一の細工師とやらのもとへとガーグが届けてくれたのだ。細工師は笑いながら「なんとかする、いやむしろもっと愉快なものにしてあげるよ」と言ったそうなので、直ることは直るらしい。

だが、時間がかかるとも言っていた。

別に愉快なモノにしてくれなくていいので、あのシー・サーペントが見つかるまでには直って欲しいと思っている。けれども、一番困るのはアレがないとマツシモやロレンツィオを再び瓶に封じることが出来ないということだ。

ただ、マツシモについてはもう封印する気はない。彼はすっかり城の生活にもなじみ、一員としてなじんでいる。今でもときどきジエズアルドに勝負を持ちかけているらしいが、対戦方法が魔法合戦からカードゲームだの、早食いだのチェスだの囲碁だの将棋だのと、いった平和すぎるものになっているし、何よりもマツシモ自身が、

特に魔王の地位を望んでいないということがわかってきているからだ。

彼は単に、それがどのような内容であれ、勝負事でジエズアルドを負かすことが出来れば満足らしい。そのため、今では自称魔王のライバルとして城の魔物たちに認識されている。微笑ましい目で見られていることを本人が知ったら激怒しそうだが、そんな訳で彼については除外。

だが、ロレンツイオは別だ。ビビアーナを使って私やジエズアルドに罠をかけ、身動きをとれないようにしてから精神的に攻めてきたことから考えてみても、腹の底で何を考えているのか読めない部分がある。本当の目的もまだよくわからない。

「……そんなうまいこと言って、何を企んでるのよ？」

「企む？ 人聞きの悪いこと言わないでよ。僕はただ、ここから出してもらったために、君に有益な情報をあげようって言うてるだけだよ？」

「じゃあ、出たらどうするつもりよ。あなたは魔王の座を狙ってるの？」

「魔王の座？ そんなものはいらないよ、今僕が欲しいのは自由さ」

「今だけでしょ？ 出たらまた私たちに何か仕掛けるかもしれないわよね。魔力が半減したって言うっても、からめ手使えばどうにでもなるもの。だから出せない。あなたの言うことは信用できない」

「わかった。じゃあ、僕が教える魔王の弱点が本当だったら信用するかい？」

ロレンツイオは切り札を提示してきた。私は少し返答に困った。今は、どんなささいな情報でも欲しい。だけど、約束してしまえば出さない訳にはいかない。私はうそをつくのは嫌いだ。

悩んだ挙句、私は結論を口にした。

【39 いざ墓地へ】

「わかった。約束するから、教えて……でも本当じゃなかったら出さないから」

『ああ、信用を勝ち取るためだし、うそは言わないよ。じゃあ、良く聞いてね？』

小瓶の中で、ロレンツイオが笑みを深くしたように私には思えなかったけれど、一旦言った言葉はもう取り消せない。私は真剣に彼の言葉に耳を傾けた。

そして、内容を聞いて微妙な顔になる。なんとなく、うそのようにも思えるし、本当のようにも思える。だが、何と云うか、意外だった。

「試してみてもいいけど、何か、そんな簡単でいいのかな」

『ものごとは結局シンプルが一番効果が高いものさ、さて、僕は眠るよ。成功したら優しく起こしてからここから出して、頬にキスして、ありがとうと言って欲しいな。……じゃ、おやすみ』

だれがそんなことするか、と怒鳴りかけたが、その前に瓶の光が消え失せた。気のせいか、彼の語尾にハートマークがついたようにも感じるし、絶対にウイंकを決めていたといういらぬ確信がある。

ジェズアルドのときもそうだったけど、そういうこと言うの本当に勘弁して欲しいわ。

私はぐったりしつつ、先ほどロレンツィオが言ったことを思い返し、うなる。彼が教えてくれたのは、ジェズアルドの好物だった。ただ、滅多に手に入らないものだから、入手するのはそれなりに大変なのだそうだ。それさえ目の前に置けば動かなくなるよ、と楽しげに言ってくれたが、本当なのはよくわからない。

それでも、試してはみるつもりだった。

明日、ガークと料理長に相談してみようと思っていると、部屋の扉がやたらと激しくノックされた。私が返事をする、バルトが顔を出す。すると、その後ろから面白がっていることがありあろうかがえるマツシモが顔を出した。

「何か面白いことやってるみたいだから、俺も参加しようと思ってな。女口説くんだったら俺にまかせておけ、いいか、全ては押しだ！ 外見を褒めて内面も褒めて、どうでもいいところも褒める。これに尽きるぜ！」

出てくるなり力説し始めた彼に、私は生ぬるい目線を送ると、こちらは無視してバルトと向き合った。何やらものすごい緊張しているのか、動作がぎこちない。まるで出来そこないのロボットみたいに、ぎしぎしと動くバルトを見て、私は言った。

「あの、緊張しすぎじゃない？」

「し、しかし……また逃げられたらと思うと、我はやはり……」

声にもいつもの覇気がない。私はどうしたものかと思いつつ、言った。

「とりあえず、私を見て怖がらないかどうかだけ確認してみましよう。私ですら怖がられちゃったら、さすがにお手上げだけ……やってみないことには何も始まらないし」

「そ、そうですね……」

「大丈夫だって、俺もいるし、てか俺の言う通りに口説けばいいんだよ。難しくなんか無いって」

またしても口を挟んできたマツシモを私は睨みつける。

「邪魔するなら帰って欲しいんだけど？」

「邪魔じゃなくて、口説き方について、このデュラハンに教えてやってるだけだぜ？」

「あなたの言う方法は、その顔と声と性格がなければ成功しないものよ。バルトとは全く違うんだから、役に立たないわよ。だから邪魔するなら帰って」

私はきっぱりはつきり言った。だが、マツシモは全くこたえていない様子で、いけしゃあしゃあと言い放った。

「邪魔なんかしないさ。俺もついていって一部始終を見届けてやる。で、問題をまとめてやろうと思っただけ……それに、美人なんだから？ そのゴースト。どうしても一目見てやりたくてな」

それが本音か……。

私は思わずじつとりとした目でマツシモを眺め、ため息をついて肩を落とした。仕方がない。どう言ったところでついてきそうだ。

「わかったわ、でも邪魔しないでよ。まずは私が話してみるんだから」

「了解」

調子のいいセリフに本当に大丈夫かな、と思いつつ、私はバルトに言った。

「じゃあ、行きましょう」

ゴーストが出没するという場所は、ガズルラーヴ城の西側にある墓地だった。なにやら「うゝ」だの「あゝ」だのとつめき声をあげるゾンビさんたちの居場所でもある。彼らはここで徘徊……じゃなくて、城の警備をしているのだ。目玉が眼窩から飛び出ている彼らにあいさつされつつ、私はさらに進んだ。

うん、悪気はないのよ。わかってる、わかってるけど気持ち悪いよう……。

ここに来るのは初めてだ。魔界に来た最初の頃は、そもそもジエズアルドが城の外に出してくれなかった。今回も良いとは言われていないけれど、指輪は何にも反応しないのでいいのだと思う。どうやら、ジエズアルドの小さな結界が功を奏しているのか、身につけ

ていてもかぶれない。初めて装飾品をつけることが出来て、私は嬉しかった。

何やら生ぬるい風が頬をなでる。正直あんまり好きになれそうな場所じゃない。でもここに出るといふのだからどうしようもない。私はバルトに案内されつつ、立派な墓石がある場所へと歩いて行った。そちらにはゾンビさんたちはおらず、代わりに結界が張られていた。

歴代の魔王の墓などもあるとかで、警備は結構厳重だ。なにしろ、魔王ともなれば亡骸ですらとんでもない利用価値があるらしい。あんまりそのことについては考えたくないけど、とにかくかなり強力な結界があり、味方だと判断された者しか入れないような仕組みになっているのだそうだ。

バルトが道すがらそう説明してくれた。

「ここなのですが」

彼は立ち止まると、ある墓石を示した。抱えた首が向いた方向に目を向けると、そこには、白い十字架のような墓があった。きれいに掃除がされている。私はしばらく海外に来たような感覚に飲まれた。

しばらく墓石を見つめていると、その近くがぼんやりと輝きだす。私はバルトを見た。彼はうなずいて、言った。

「……出ますぞ」

私は思わず固唾を飲んで、様子を見守った。ぼんやりとした白い

光は、ゆっくりと人のかたちを成して行き、やがて、ひとりの女性の姿をとって出現した。

【40 怖がりゴーストの正体】

「……おお、美人」

マツシモのささやきが耳に入る。私も同じ意見だった。バルトがそわそわしている。なんとなく彼の気持ちはわかる気がした。

現れた女性は、どう見ても日本人じゃなかった。きれいな金の髪に、彫りの深い憂いに満ちた顔立ち。以前にここに来たときに着させられたドレスと良く似た服を着ている。体の線は優美な曲線を描いていて、うらやましいほどスタイルがいい。セクシー、とでも言うのだろうか、まるで映画にでも出てきそうなゴーストだ。

私は、言葉が通じるのかどうか不安になりつつ、声をかけてみることに決めて、後ろにいた自分よりも遥かに大柄なふたりに言った。「とりあえず、行ってくるけど……くれぐれも私が合図するまで姿を見せちゃだめだからね」

「はい……お願いいたします」

「了解、じゃ、後で詳しく報告してくれよな」

私はマツシモには冷たい目を向け、バルトには励ますようにうなずいてから足を踏み出した。結果は、私を異物とはみなさなかったのか、するりと通り抜けられる。彼女は、自分の墓石に腰を下ろして、悲しそうに顔を歪めている。

「……こんばんは」

私はそつ、と声を掛けてみた。案の定、彼女はびくつと震えて、消えかける。私は焦ったが、あえて声を張り上げずに、静かに、問いかけるように訊ねた。

「少し、お話してもよろしいですか？」

「あなたは……？」

返ってきた言葉は日本語だった。私はほつと胸をなでおろして、話し続ける。

「私は最近この城に連れてこられた者で、人間です。ここに、人間のゴーストが出るというので、お会いしてみたいと思ってやってきました。名前は水紀です。工藤水紀」

女性は私の自己紹介を聞いて、しばらく不安そうに顔をしかめていたが、人間だと告げたとたん、泣きそうな表情になった。そのまま、石から下りると私の側まで歩いてきて、ほほ笑む。ものすごくきれいな笑顔だった。

「そうなの、わたしはミレー又と言います。出身はフランスです……もうずいぶん前にここに連れて来られて、死にました。人間とお会いするのはこれが初めてだわ。とてもうれしい……ああ、触れられたらいいのに」

ミレー又と名乗った女性は嬉しそうに手を伸ばしてすぐにひっこめた。抱きつきたそうな顔をしているが、ゴーストの身体ではすり抜けてしまつらしく、ひどく残念そうだ。

「あの……もしかして、あなたも魔王の妃として連れてこられたのかしら？」

ふいに、ミレー又はどこか気の毒そうな顔で訊ねてきた。私は反射的に答えた。

「え、はい。そうなんです。いきなりなことでもかなり驚きましたけど、今ではだいぶ慣れました。魔物の皆さんも、見た目は怖いけど話してみるとそんなに怖くなくて、まあ、中には人間なんか嫌いだって感じの魔物さんもいますけどね」

そう言うと、ミレー又は驚いたように口に手を当てた。私は言うてから、彼女のことばにひっかかりを覚える。

あれ？ ……今、あなた「も」って言わなかった。と言うことは、まさか。

私は笑顔が引きつるのを感じた。と言うことは、目の前で話す人はジェズアルドの先妻だったのだ。そのことに気づくと、心臓を冷たい手でぎゅっ、とつかまれたような感じがした。ものすごく嫌な気持ちになる。この感情は知っている。私は深呼吸して、なんとか笑顔を浮かべ続けた。

そんな私の内心の葛藤などおかまいなしに、彼女は嬉しそうに言葉をつづける。

「まあ、すごいよね。わたしは怖くて怖くてたまらなかったわ。ある日突然、足もとが崩れてここに連れてこられて、それまでの生活がうそみたいなもてなしを受けたけれど、きつと食べるために太らされているのだと思ったわ。いつ頭からかじられて殺されるかって

考えたら、怖くて夜も眠れなかったのに……あなたはそんな魔物たちと打ち解けているなんて、すごいわ」

「え？　そ、そんなことないですよ。そもそも、最初に会った魔物がすごくいい子だったし、その後に出会った首なし騎士も豪快で楽しい魔物だったし」

つぶやいて、私はやっとバルトのことを思い出した。そうだった。ここに来た理由を忘れていた。だが、待てよ、と思う。彼女はジェズアルドの先妻……そんな人に恋してバルトは大丈夫なのかなと思う。私はやや考えた挙句、別にお話するだけならいいだろうと結論づけた。

「そうなの……でも、わたしはきつとだめね。ものすごく怖がりなのよ。小さいときに、いたずらで森に置き去りにされたことがあって、それ以来だめなの。でも、考えてみればもう幽霊になってるんだもの、自分で自分を怖がっているようなものよね」

「そうですよ、怖がることなんてないです。そうだ、せつかく知り合えたんですし、私の友だちともお話してみませんか？　魔物ですけど、優しい方ですから、だって、ずっとここにひとりぼっちだなんて、きつと寂しいですよ」

何とか説得しようと、私は言葉を重ねる。バルトの期待の眼差しが背中に刺さってくるような気がした。ミレー又は、困ったように眉根を寄せて口を閉じた。やはり怖いようだ。

「そうね、寂しいわ……ねえ、あなたは怖くなかったの？　会ったんでしょ、魔王に」

「ええ、怖くないですよ。むしろ優しいと思いますけど」

私は答えて、それまでの表情から一変、暗い顔になったミレーヌをじっと見つめた。何か言いたそうにしているけれど、ひどく言いにくそうに、口を開けては閉じ、を繰り返している。どう声を掛けたら良いのか迷い、しばらく様子を見てみると、彼女は何かを振り切るように言った。

「じゃあ、魔王が人を食べているのを見たことがある？」

私はその言葉に凍りついた。

【41 実り少なく会話終了】

「わたしは見たのよ！ 大きな三つ首の黒い巨大な犬が、人間を頭からばりばりと食べているのを。怖くて怖くて、先も考えずに走ったら、塔と塔をつなぐ渡り廊下から落ちてしまったの。それでもあなたは平気なの？」

問われても、私には何とも言えない。というよりも信じられなかった。あのジェズアルドが人間を食べる？ そんな姿、全く想像もつかない。でも、考えてみれば魔物なのだ。今まで全く念頭になかったけれども、あのビビアーナだって人間の精気を食らって生きている訳だし。

ただ、ここしばらく寝食をともにしている魔物の皆さんは、人間は食べないことがわかってる。

人間が捕食対象となるのは、せいぜいロレンツィオとビビアーナくらいのもだろう。その彼らとて、食事は極めて少ないのだとか。ロレンツィオの場合は、仲間の吸血鬼同士で互いの血を融通していたのだそうだ。だったら人間なんか噛む必要ないじゃないかと言ったら、同類の血は美味しくないと言われてしまった。

しまった、話がそれた。私は、とにかく何か言わなければと思って口を開く。

「少なくとも、ジェズアルド……いえ、魔王に関してはその心配はないと思いますよ。肉は食べますが、魔界の豚とか牛とか野鳥とか、あの空を飛んでる恐竜みたいなやつとかばかりですし」

「……でも、わたしは見たのよ。だから、怖い……でも、あなたに会えたことは嬉しいわ。だから、気をつけてね、食べられないように寝るときはちゃんと鍵を閉めて、お守りとか置いて、十字架とか聖書とか置いて……」

ミレー又はぶつぶつ言いながら、がたがた震えだした。私はそんなことしても撃退なんて出来ないだろうけど、と思いつつ、これ以上は無理かなと思ひ、振り返った。口パクで、今日は引き上げようと言いかけ、思わず口をつぐむ。視界の片隅に、バルトの兜からのぞく目が期待と不安に満ちているのを見てしまった。

ど、どうしよう。

背中を変な汗が流れていく。だけど、何やら震えだしたゴーストのミレー又を見る限り、今日いきなりバルトを紹介するのは無理のような気がする。

でももし、魔物じゃなくて人間の姿だったら？

そう考えて、私はすぐに却下した。人間の姿になっていようといまいと、魔物は魔物だからだ。ただ、ジェズアルドが最初からあの姿でミレー又に会ったのかどうかまではわからない。もし人間の姿で会っていた場合、逆効果になってしまうかもしれない。

そのことを聞いてみたいが、そんなことをしたら過去の怖かった記憶がよみがえり、さらに怯えられる気もする。

私がどうしたものかと悩んでいると、ミレー又が遠慮がちに問うてきた。

「ねえ、また来てくれるかしら？ わたし、いつもひとりで寂しく

て寂しくてたまらなかったの。年も近いみたいだし、あなたのこと
もっと教えて欲しいわ。それに、怖くないという魔物さんのことも
知りたいし、誰が怖くて誰が怖くないかとか」

「え、ええもちろん！ いくらでも教えるわ。ひとりは寂しいもの、
私もね、ずっとひとりのようなものだったから、ここに来て楽しい
の。いつも、誰かがいてくれるって、わずらわしいけれど、嬉しく
もあるし、ミレー又さんも頑張ればきつと友だちが出来るはずよ」

そう言つと、ミレー又は嬉しそうに笑つた。うん、美人だなあ。
本当にうらやましい。

「そ、そうかしら。そうなれるといいんだけど……でも、楽しみに
してるわね」

彼女はほほ笑みながら言い、すうつと暗闇に溶け込むようにして
消えた。私はため息をついて、振り返る。と同時に、ものすごく落
ち込んだ様子のバルトを見る羽目になった。私は慌てて、バルトと
彼をなくさめているマッシモのところへ駆け寄ると、急いで言つた。

「ちょっと、そんなに落ち込まないで……今日はほら、少なくとも
私からは逃げないことがわかつたじゃない。これから出来るだけ毎
日会いに来て、バルトのことも怖くないよつて教えていくから！
何だか、すごく寂しそうだったし……外堀はゆっくりと埋めていか
ないと、ね？」

「そうそう、水紀の言う通り。いいじゃないか、その間に俺の口説
き文句を学べば」

マッシモがよくわからないことを言うが、私はあえて突っ込まな

かった。

バルトは兜の間の目をうるませ、大きな体を丸めてうなずく。

「わかつてはおるのですが、やはり……我は彼女にとって恐ろしいものなのでしょう。そう思うと、もう動いていない心臓が痛むのです」

「えっと、何か……役に立てなくてごめんなさい。でも、時間はかかると思うけど、きつと話せるようになると思うの。だって彼女、何だか寂しい寂しいって言ってたから、話相手が出来ればきつと喜ぶと思うんだ」

「そうですね……ああ、もどかしいです。我が側に行つて、いつもあなたのかたわらにおりますから、寂しくなどないと言ってやりたいのに」

そう言つと、抱えられた兜がかたかたと動く。泣いているみたいだ。涙らしきものは出てきていなくても、私は「うん、そうだね」とだけ返した。苦しんでいるバルトに、かけることのできる言葉を私は知らない。余計なことなら、言わない方がいいと思つたのだ。

「……さて、じゃあ今日は一旦寝に戻ろうぜ。不死者系の魔物と違って、俺は眠いし、水紀だつていいかげん眠いだろっ？」

重苦しく沈殿した空気を洗い流すようなマツシモの声がした。私には救いの声に聞こえた。実際、体は重いし、明日のことやジェズアルドのことを考えると、休みたかつた。

それに、ミレーヌのことはあまり心配していなかつた。時間はかかるが、いつか打ちとけることができる気がする。何より、彼女は

前向きな答えを返してくれたのだから。なので、私はマツシモの声にうなずいた。

「うん。そうだね……バルト、その、明日もあるから」

「わかっております。それでは、我もお部屋までお送りいたします」

やはり、いつもの覇気がない。あのうるさいくらいの覇気がないと、何だかバルトじゃないみたいだ。私はひとり心の中で、きつと大丈夫と繰り返し返した。今は色々とこんがらがっているけれど、そのうちにほどける日が来る。

だからきつと大丈夫。

マツシモとバルトに付き添われて歩きながら、私はジェズアルドと話が出る日が早く訪れますように、バルトがミレーヌと話せる日も早く来ますようにと祈った。

【42 謎の好物採取へ出発】

「それでは、くれぐれもお気をつけて下さいね。どのような危険があるかもわかりませんし」

マールラの不安そうな声に、私はうなずいた。

「ありがとうございます、でも大丈夫ですよ。ガーグも、マツシモだっているんだし、もちろん、ちゃんと気をつけます。じゃあ、行ってきます」
「行ってらっしゃいませ」

マールラが不安そうな声で送り出してくれた。私は心の中で「大丈夫、なんとかなる、平気」とくり返しながら出発することになった。

時刻は早朝だ。

と言っても、空はあまり変化がないので、腕時計と空気に混じる冷たい湿気だけが朝を感じさせてくれる唯一のものだ。

それにしても、雨が降らないな、と私は思った。あちらにいるときは、うつつとうしいくらいに良く降られたのに、ここに来てからというものの、一度も雨にあっていない。邪魔な傘を持ち歩かなくていいし、洗濯物もすぐ乾く。けれど、いかんせん埃っぽいし、私がここに呼ばれた意味とか意義とかがまったくないように思えて、ちょっと悲しかった。

持ってきた傘もただの飾りものと化している。

それに、昨夜は部屋について寝支度をしたらすぐに寝てしまった。どうやら予想以上に疲れていたらしい。何だかんだで毎日それなりにすることがあるうえ、さらにジェズアルドを追っかけて歩き、体が疲れてしまっていたようだった。

そのせいか、今日だけは朝食を自分で作ることは出来なかった。と言っても、城の料理長も私の作るものを見て、人間の食べものもどんな風なのかがわかってきたらしく、用意されたものはとても美味しかった。全て魔界の食材を使っていたけれど、色と形を除けばちゃんと目玉焼きにトースト、野菜スープだった。正直、食欲はそそらなかつたけれど、美味しかった。しかも、料理長はお弁当まで作ってくれた。

ちなみに、料理長はケンタウロスだ。上半身は人間と同じ。肌の光沢と、毛質や、瞳の虹彩は独特だけれど、印象としてはちよつと話しかけにくい料亭にでもいそうな頑固な親父、といった感じの魔物だ。

そんな彼の作ってくれたサンドイッチのバスケットは、マツシモが持ち、私は魔界の魔動物&魔植物図鑑を手に、頭にクロスケをつけている。服装は動きやすくて露出の少ないものにした。

私たちは、城の前に描かれている魔法陣へと足を向ける。と言っても、移動は魔法陣で行うわけではない。徒歩で行くのだそうだ。

「ねえ、今回行くペパポンペってどういう場所なの？」

やたらとパ行の多い地名をあげ、私はガーグに訊ねた。その謎の場所に、魔王の好物「プウペパペ」とやらがあるというのだが、聞けば聞くほど妙に楽しい気分にならならない。

しかも名前が無駄に似ているので、よく混同してしまってものごく困る。とりあえず、名前をつけたやつを小一時間ほど問い詰めたくなるほどの言いにくさだ。何度プププだのポポポだのとどもり、言いそこなったことやら、数え切れなくらいだ。いつか絶対舌を噛むと思う。

それに、昨夜ミレーヌが言っていた人間を食べるといふ表現も気になる。

私はじつとガーグの返事を待った。説明しにくいのか、中々語り始めない。少しして、ガーグはようやく言い始めた。

「そうっすねえ、どう説明したらいいッスかね。うん、何て言うか、面白い場所っす。魔物の中でも、いわゆる物に魂が宿った奴らの住処なんスよ。気のいい奴らも多いっすけど、逆に人間に捨てられた奴らは人間を呪ったりしますッスから、気をつけてくださいっす！」

「へ、へえ〜……楽しそうな怖そうな。それで、徒歩で行くって言うけど、そんなに近いの？」

「いえ、プペパポンペは魔界の中でもちよつと変わった場所なんスよ。魔界はひとつの大陸みたいな場所なんスけど、それ以外にも色々な亜空間とつながってるんス。プペパポンペはそのひとつっすね。そういう場所に行くには、移動魔法は役に立たないっす。専用の移動繫門けいもんからじゃないと行けないんス。でも、その繫門は歩いてすぐなんス」

ガーグは丁寧に説明してくれた。

私はたまに相づちを打ちながら、理解しようと必死に足りない頭

を働かせる。さすがは魔界。私の薄っぺらい常識なんてみじんも通
用しない。そもそも、空間と空間を移動するということからして、
なじみがない感じだ。SFにでも出てきそうな印象である。

「あんまりよくわからないけど、繋門がそこへ行くための移動魔法
みたいなものだと思えばいいかな」

「まあ、そんな感じでいいんじゃないか？」

大きな麻袋を持ったマツシモが請け合った。何でも「プウペパ
ペ」とやらを入れるにはそのくらいの大きさの袋がいるそうだ。ど
れだけ大きいのか、そもそも何の物体なのか。一応軽く調べてみた
が、魔界動物図鑑にも、魔界植物図鑑にも載っていないかったのだ。

「ねえ、その「プウペパペ」ってどんなものなの？ 食べるって
言うくらいだから、何かの動植物だとは思っただけど、載ってない
のよね」

「うーん、どう言えばいいんだ。小僧、説明できるか？ アレのこ
と」

「小僧って言うなっス！」

ガーグが噛みついた。いつものことなので、私は特に口をはさま
ない。マツシモはここに来てからと言うもの、ガーグのことは「小
僧」、バルトのことは「首なし」と呼ぶ。他の魔物たちに対しても
そうなので、あだ名で呼ぶのが彼のやり方らしい。ガーグもわかっ
ているらしいが、やはり子ども扱いが気に入らないのか、必ず一回
は反論するのである。

怒鳴ったあと、ガーグはやや困ったように首をひねった。

「「プウペパプペ」を説明……そうツスね、アレは動植物じゃあないツスね」

「え、じゃあ何なの？ 動植物以外を食べるなんてことあるの？」

「あるっすよ。滅多にないツスけどね」

そう言っつて、ガーグは笑った。

「「プウペパプペ」は、生物の定義からは外れる存在っすけど、死んでるわけじゃないんすよね。何て言うか、魔法生物のようなもので、魔法そのものと言ったらいいっすかね」

「……ごめん、わかんない。もう、実際に見た方がいいかもしれないわね」

私は自分の理解力のなさに肩を落とした。小説や映画の知識では限界だ。ゲームとかはやったことがないし、アニメも見たことはほとんどない。基本は図書館利用ばかりだったのだ。

「そうかもしれないツスね。うまく説明出来なくて申し訳ないツス」

「まあ、俺もアレについては上手く説明出来る気がしねえなあ。そろそろ繋門が見えてきたぜ」

私はマッシモの声に、前方を見た。道なき道をただてくと歩いてきただけなのだが、それはこつ然と私たちの前に姿を現わした。私は思わず感嘆のため息をついた。

【43 プペパポンペ】

「すごい、何かの古代遺跡みたい！」

赤と茶色ばかりの荒野が広がる中に、いくつもの円柱を積み重ねた神殿のような門が佇んでいる。まるで、かつて繁栄した古代都市の遺跡みたいで、私は思わず見惚れた。しかも、バツクには朝焼けしているような赤い空。独特の濃い影が投げかけられた陰影に沈む門は、とても美しかった。

「言われてみれば、人間たちの世界にもこういうのあったな」

「そうツスね。お妃さまの故郷じゃないツスけど、もっと乾いた場所にあったツスね」

特に何の感慨もなくうなずき合うガークとマツシモ。私は駆け寄って、よくその門を見た。まるでギリシヤの神殿を半分に取り取ったみたいな感じだ。私はあたりを見回しながら中へと入る。そして、足をとめて、顔を引きつらせた。

何か、へんな穴がいきなり前面に開いてるんですけど。

「ねえ、まさかこれに飛び込めとか言わないよね？」

「飛び込まない限りプペパポンペにゃ行けないぜ。移動魔法陣と仕組みは同じだよ。怖いなら手をつないでてやる」

マツシモが爽やか笑顔で答えてくれた。私はやっぱりそうか、とうなだれる。ここから「プペパポンペ」へはどのくらいの距離があ

るのはわからないが、距離があればあるほど、ジェットコースターの怖さ度が上がる仕組みなのはわかっている。

以前に一度だけ乗って二度と乗るものか、と決めたのだが、魔界が私にあの感覚を克服しろと言っているとしか思えない。私はマツシモを見た。正直、マツシモにつかまるのは湖でのことを思いだすので抵抗がある。それに、何と言うか、ジェズアルド以外にはあまりそういうことをしたくないのだ。

そんな私に、ガーグが笑いかけてくれた。

「オレも一緒っすから大丈夫っすよ！」

そういえば、と私は思った。体は小さいが、ガーグだつてここに落つちてきた私を横抱きにして飛ぶだけの腕力があるのだ。そのことに思い至り、私はガーグのところへ歩み寄って手を取った。

「じゃあ、ガーグお願い、手をつないでてね。絶対に離さないでね！」

「わかつたっす！」

「おいちよつと待て！　ここは体格から考えて俺を選ぶべきだろ？」

「うん、まあ、その通りなんだけど、女性心理はめんどくさいものだつてことだけ言っておくかな」

私の意味不明な説明に、マツシモは顔をしかめた。今の説明でわかってもらえるとは思っていない。言った自分ですら、不親切だと思う。だが、他に言いようがないのも事実だった。

「じゃあ、行くっスよ。調理する時間も欲しいッスから、早く行くッス」

「う、うん」

私はガーグに手を引かれて、ぐいぐいと謎の穴に近寄っていく。間近で見ると、まるで星空を切り取ったかのように、きらきらと何かが輝いている。とてもきれいだったけれど、やっぱりちょっと怖い。私はガーグの手を握っていることを確認した。

彼は、全く何のためらいもなく穴へ飛び込む。私はそれに引きずられるような形で穴へと頭から突っ込んだ。

思っていたより、ジェットコースター度は低かった。途中、ガーグが羽根を出して飛んでくれたことも手伝って、内臓をシエイクされたような気持ちの悪さはあまり感じない。

「ふう、ありがとうガーグ」

「いえ、それより、ここがプペパボンペッスよ。場所としては、街の部分に当たるッスね」

「街？ 街があるの？」

話を聞いていて、なんとなくごみの埋め立て地みたいな場所を想

像していた私は、ガーグの言葉に驚いた。けれど、言われてみれば納得で、私の目の前にはかなりごちゃごちゃした街があり、見たことのない魔物たちが行き来している。

後ろを向くと、ガズルラーヴ城側のけいもん繫門とは作りの異なる門があり、マツシモが出てきたところだった。こちらの門は、フランスの凱旋門に似ている形状だ。もちろん、質感や素材なんかは全く違うし、苔みたいなのが生えているけれど、印象としてはそんな感じである。

そこから再び街に視線を戻すと、箱が歩いていたり、ポロポロの服を着た、あきらかに捨てられた人形が歩いていたりする。面白いことに、扇風機に手足が生えたようなものもいた。

街は全体的に、布や木片で作られていて、一直線にのびる大通りらしき場所には、色々なお店がある。ほとんど見たことのないものばかり売っている。にぎやかで、愛らしいように思えるのは、女の子向けの手芸ショップや、ファンシーショップと似ているからかもしれない。

「じゃあ、とりあえず街に行つて「プウペパペ」が売ってるかどうか見てみようぜ」

追いついてきたマツシモが言った。

「え、お店で売ってるものなの？」

私は思わず訊ねた。すると、マツシモはうなずいて、

「ああ、ある場合もあるし、ない場合もある。とれれば売ってるだろうが、結構人気があるらしくて、すぐに売り切れることもあるら

しい。その場合は、あつちの山に行つて自力で探すことになるが、売ってればそっちの方が楽しいな」

と、答えてくれた。

それはその通りなので、私は「そうだね」とうなずいて、歩きだす。私の両脇に、ガーグとマツシモが並ぶ。彼らの行動を見て、何か危険があるのかな、と思いつつ、街の入り口に立つ門番の近くを通りぬけようとしたとき、私ののもとに槍が突きつけられた。

え、何で？ 私、何にもしてないのに。

焦つて、木で出来た人形らしき門番を見ると、彼は作り物の顔をしかめ、厳しい声で言った。

「人間は立ち入り禁止だ！」

【44 物と人と悩みと】

「あちゃ、忘れてた。そうか、ここは人間や人間形の魔物は立ち入り禁止なんだった。久しぶりに来たから忘れてたわ。悪い」

「オレもツス……じゃあ、お妃さまには待っててもらって、牛が行って見てきたらいいツスよ。プウペパプペは大きいツスから、牛じゃないと持てないツスしね」

「ちっ、仕方ねえな。ちゃんと水紀を守っとけよ、小僧」

「小僧って言うなツス！」

私はじりじりと後退しながらふたりの話を聞く。約一メートルくらい門番から離れると、ようやく槍がどけられた。背中を冷たい汗が流れ落ちる。さらにもっと後退してから、思わず恨み事が口を吐いて出た。

「そ、そういうことは最初に教えておいて欲しいんだけど……」

「悪い、本当に忘れてたんだ。何しろ、ずっと瓶の中だったもんでそれに、ここには用がないから滅多に来ないしな。んじゃ、とつとと行って見てくるわ」

マツシモは明るく笑って流すと、さっさと街の中に入っていく。人間の姿に化けてはいるが、門番は全く動かない。見た目以外で人間と魔物とを区別しているらしい。やがて、彼より遙かに小さい変わった魔物たちのなかに、その大きな姿が消えていく。私はガーグと一緒に、少し離れた場所で彼を待つことにした。

ただ、槍を突きつけられてからと言うもの、通り過ぎる魔物たちの視線がやたらと痛い。ものすごく突き刺さってくる。

「やっぱり、捨てたひとに対する恨みとかがあるのかな？」

私は彼らの悲しみの混じった怒りに、そう思う。施設や親戚の家で育った私は、捨てるほど物を持っていなかったけれど、それでもいくつか捨てたものならある。大事に使いこんだものが、もう使えなくなつて捨てる時にはつらい思いをしたものだ。

「そうだと思うツスよ。本当に大切にされてから捨てられたのなら、こんな場所で魔物になつてたりしないはずツスから、きつと適当に扱われて捨てられた奴らなんすよ、きつと」

ガーグは警戒をおこたらずに、そう答えてくれた。まるで心の中を見透かしたような返答に、私は驚きつつも、「そうだといいな」とつぶやく。

私はぼんやりと、ガズルラーヴ城では決して見ることでできない薄青い空を見た。ここの空は、夕焼けのように赤くなくて、のっぺりしている。空色のポスターカラーをぬって、白で雲を描きました、という感じの空だ。ガズルラーヴはやや薄暗かったけれど、ここは昼間のように明るい。

その空を見て、思う。ジェズアルドは、最初の印象とはどんなかけ離れてきている。最初は、なんて傲慢なことを言うんだろう、と思つていたし、魔物となんて絶対に結婚は考えられないと思つていた。なのに、今ではもう、彼が話しかけてくれないだけでこんなにつらい。

「プウペパプペ」という変な食べもので、ジェズアルドが私の前に現れてくれたのなら、一言でも声を掛けたい。彼が望んでいた返事を大声で叫んでもいい。とにかく、ジェズアルドの顔が見たかった。私はマツシモを待ちながら、優しくほほ笑むジェズアルドの顔を思い出して、胸が痛んだ。

しばらくすると、マツシモは手ぶらで戻ってきた。

「売り切れだとき。しょうがねえ、獲りに行くしかないみたいだな」

「そっか、じゃあ行きましょう。早く獲って、はやく戻りたいから」

私が言うと、マツシモとガーグは目を見合わせる。その表情が微妙にゆがんでいる。

「そう簡単には行かないと思うツスけど、でも行くしかないツスからね」

「どうして？」

私は思わず訊ねた。ガーグはちょっと言いにくそうに答えてくれた。

「「プウペパプペ」は日によってあったりなかったりする上、逃げ足が早いんす。だから、だめでも気を落とさないで欲しいツス」

「そうなの、その時はまあ、仕方ないから今日は帰るけれど、とりあえず、行くだけは行ってみたい。面倒なこと頼んでごめんなさい、でもどうしても行きたいの……」

私がそう言うと、ふたりは笑って気にするなと言ってくれた。それが嬉しくて少し涙ぐむ。それから私はふたりとともに「プウペバプペ」がいるという場所へと向かった。

照葉樹が茂る森の中を行く。

このプペパポンペは街の部分が最も大きく、そこを取り囲むように森が広がっている。しばらく進むと空間が閉ざされており、何だか透明なボールの中にいるような感じがした。

地形的に色々無理がありそうだが、魔法が働いていると言われれば追及のしようがない。

なぜそんなに街の部分ばかりが広大なのかというと、このプペパポンペの魔物たちの大半は街に暮らしているのだとガーグが教えてくれた。もともとが物なので、人の住処と似たような場所が最も暮らしやすいのだと言う。

私はなるほど、妙に納得してしまった。そのため、街周辺の森のなかにいるものは、そこから追放された極めて「危ない」魔物たちばかりなのだという。そのせいか、お喋りなマツシモが先ほどから無駄口を叩かなくなっている。

しかも、街の入り口でも経験したように、ここの魔物たちはほぼ全て、例外なく人間、および人間形の魔物たちに対して強い反感を

抱いているそうだ。当然のことながら、それは追放された魔物たちにも当てはまる。

何と云うか、人間には空恐ろしい場所だと今さらながら私は実感していた。マールがひどく心配する訳だ。ここでは私の存在はまさに「敵」そのものなのだ。

「皆が私に行くなって、あれほど言ったわけがやっとわかったわ」

小道を進みながら、たまに寒くなる背すじと、額に浮かぶ冷や汗に、私は思わずぼやいた。

実のところ、私がここへ来ることを説得するのは本当に大変だったのだ。みんながみんな、危険すぎるからやめてくれと何度も言った。だけど、私はどうしてもジェズアルドの好物をこの手でとりたかったのだ。そうすれば、会ってくれるかもしれないという期待があったから。

だが、こうして来てみると、思い描いていた場所とはまるで違う。名前は愉快なのに、気持ちは沈んでいくばかりだ。

「けど、止めたって嫌だ、絶対に行くって言って、全然言うこときかねえし、それなら護衛つきで行かせてみたほうがいいかと思っとな。体験すれば、否応なくわかるだろう」

マッシモが苦笑交じりに言う。そう、私はマッシモのとりなしで、ここへ来ることが出来たのだ。私はその通りだと心から思い、うなだれて謝った。

「ごめんなさい、私、必死だったのよ」

「大丈夫っスよお妃さま。オレたちでちゃんと守りますから」

元気がなくなった私に、ガーグが力強く言う。私はほほ笑んだ。

「うん、ありがとう、すごく助かる。でも迷惑かけてごめんね……
あゝあ、もう、どうしてジェズアルドは会ってくれないのかなあ」

つい弱音がぼろりとこぼれた。ガーグはうなつて首をひねったものの、わからないのか何も言わない。マッシモといえば、油断なくまわりを見ながらぼやくように言った。

「あいつ、ああ見えて結構臆病なところがあるからな。何をしても計画的で、まあ、細かくてうるさいって言えばそうなんだが……
あんたのことは予想外だったんだろうさ」

予想外のこと。ロレンツイオが鏡で見せたあの姿のことだろう。もしかしたら、ゆっくりと外堀を埋めつつ、時期を見計らってカミングアウトするつもりだったのかもしれない。私はため息をつきつつ、うなずいてつぶやくように言った。

「きつとそうだと思う。でなければ、あんなに毎日恥ずかしいこと
言っただけで口説いてきたジェズアルドが、てのひら返したように会いに来なくなるわけがないものね」

心が決まったとたんに会えなくなるなんて、世の中どこでも、例え魔界であっても上手いかなないように回り道をするように出来ているのかな、と思ったときだった。

目の前の茂みが、ゆったりと揺れた。私は立ち止まり、ごくり、

とのどを鳴らす。

そして、そこからゆっくと現れたものを見て、その場に固まってしまうた。

【45 プウペパプペの正体】

何、コレ……？

目の前にある「それ」に視線を釘づけにされながら、私は前を歩いていたマツシモを見上げた。彼は驚いたような顔をしたあと、すぐに嬉しそうに笑い、唇をなめた。

「こんなに早く見つかるなんて俺たちは運がいいぜ、早速捕まえるぞ、小僧！」

「小僧はやめてくれッス！」

ガーグは言い返ししながら、風の魔法を「それ」に向けて放った。たちまち、鋭い切れ味の風に「それ」は囲まれて、全く動けなくなる。だが、これでは手出しが出来ないと思って見ていると、ぶつっという音ともに「それ」の頭が千切れ飛んだ。

私は青ざめて後ずさる。き、気持ち悪い……。

マツシモはというと、持ってきた袋の口を広げて落下してくるのを待った。やがて、ばすっという音とともに、「それ」と袋におさまる。私は体を硬直させたままその様子を見守った。すると、袋の中で、千切れたはずの「それ」がガサガサと動いた。

「よし、じゃあ帰るぞ、何にして食うんだ？俺はいらないけど」

「あの、それが「プウペパプペ」？」

つい私は訊ねた。マツシモとガーグは揃ってうなずいた。私はその場に座り込みたくなるのを必死にこらえて、重ねて訊ねる。

「何だか、肉のかたまりが人間の形になって二足歩行してたように思えるんだけど。魔物なの、動いているからには動物なの？」

「うーん、どう説明するツスカね。少し前にも言ったツスけど「プウペパペ」は生きものじゃないツスよ。魔法そのものツス」

「とりあえず俺たちの言葉に訳してみると「プウペパペ」って人形ガタの生肉って言う意味だしな……生物じゃないけど、細胞が生きてる。でも痛覚もないし、そもそも脳とか内臓がないし、生物じゃないよなあ」

ガーグとマツシモ、それぞれに説明してくれる。だけど、私はますます混乱した。よくわからないけれど、とにかく彼らが「それ」を「プウペパペ」だと言うのならきつとそうなのだろう。うん、そうだ、それでいいんだ。とにかく、目的のモノは手に入ったんだから、いいじゃないか私。

無理やり自分に言い聞かせて、なんとか納得しようと試みる。

「……とりあえず、その、帰りましょうか？」

私は引きつった顔で笑いながら言った。一瞬、ロレンツイオがうそをついたのだろうか、という考えが脳裏をかすめたけれど、やってみないことには始まらない。それなら、やってみただけだと腹をくくる。

「そうツスね、にしても……本当にこれが魔王様の好物なんツスカ

ね？ 人気のある高級食材だったことは確かなんすけどね」

「へえ、高級食材なんだ、まあ、謎の物体でも肉は肉だもんね」

マツシモの背おった袋の中で動いている肉のかたまりを横目で見ながら私は答えた。

繫門をくぐると、瞬時にして視界が紅色に変わる。それまで明るいところにいたので、何となくまわりがぼんやりし、見えなくなっただよふに感じた。

腕の時計に目をやると、午後三時を刻んでいる。マツシモが大きな肉塊を背負うことになったので、私は彼の持ってきた荷物を代わりに持つことにした。空になったランチボックスを手に、のんびりと城へと歩く。謎の肉塊で食事を作る時間は十分にある。

乾いた空気がのどを刺激して、私は小さく咳をした。

「何か、私がかここにいる意味がわからなくなっちゃったなあ」

ぼやくと、ガーグとマツシモがふしぎそうな顔で立ち止まった。

私は苦笑して、言った。

「ああ、ごめんなさい。だって、ここに連れてこられた理由が雨を降らせる体質だとかそんなことだったのに、全く降らないし、ジェズアルドは逃げるし……私、魔界にい続けていいのかなって思っち

「やっただけなの」

あれほど執着していたのに、本性を知ったくらいで見向きもされなくなってしまう。結局は、その程度の存在だったということなのだろつかと私は思う。本当に思ってくれているなら、なんとしてでも話をするのではないだろうか。そうしないで、逃げると言うことは、もう私のことなどどうでもいいのかもしれない。

何となく、「プペパポンペ」の魔物たちの気持ちがわかったように思う。

捨てられるのは、どんな状況であったとしても悲しいのだ。悲しい感情が怒りに変わってもおかしくはない。そのふたつの感情は、同時にわきあがることが多いからだ。

「何だ、そんなことが。水紀、ここは魔界だ……魔界とは、それ以外の世界には住めない、受け入れられない者たちが最終的に落ちてくる場所だ。だから、悪いものも良いものも存在する、いてだめな奴なんか存在しないんだよ、ここはな」

「そうツスよ、少なくともオレは側にいてくれて嬉しいツス」

「でも、私最初にひどいこと言っちゃったのに」

「それは最初だけで、その後すっかり人の姿にならないでお妃さまの前に行ったときには、もう全然平気そうだったじゃないスカ。話もちゃんと、子どもだからって馬鹿にしないで聞いてくれるし、だからオレはお妃さまが好きツス」

ガーグは当然のことを告げている、というような顔で言った。私

は嬉しいけれども恥ずかしくて、顔から火が出そうになる。けれど、やはり嬉しさが勝った。マツシモの言葉もまた、心に沁み入った。

いてだめな奴なんかいない場所……それが魔界。そうだったのか。

「ありがとう、変なこと言ってごめん。戻ろう、お城へ、それで、ジエズアルドをつかまえて本当のことを聞くな」

私は答えて、ふたりとともに歩みを再開した。

だけど、心に落ちた影は消えてはくれなかった。もし本当に「いない」と言われたら、私はどうすればいいだろう……。元の場所に帰りたいのか、彼らとここで暮らしたいのか。あれほど帰りたい場所も、今では空疎に思える。家族はいないし、本当に友だちと呼べるひともいない場所に帰りたいとは思えなかった。

こんがらがった心を抱えたまま、私は城へと帰還したのだった。

【46 罾の準備？】

持ち帰った「プウペパペ」を手に、私とガーグとマツシモは、真っ直ぐに厨房へと向かった。厨房は、ガズルラーヴ城の南棟の一階部分にある、かなり広い場所だ。中は思いのほか近代的なキッチンになっていて、まるでどこかのホテルの厨房みたいだった。

そろそろ晚餐の準備がはじまっているかな、と思いつつ向かうと、やはり厨房は忙しそうだった。専属の料理人たちが、それぞれ食性の異なる魔物たちに向けて、色々な食材を調理している。ここは本来ならば、妃候補とはいえ、部外者の私が入って良い場所ではないのだが、ジエズアルドが許可を出し、料理長の言う通りにすることを条件に使わせてもらっている。

「ちょっと、今は使わせてもらえなさそうね、どうしようかな。もう少し待とうか……でも、夕食の時間帯を逃したくはないんだよね」

厨房の外から様子を見て、私はぼやいた。魔王だってお腹は空く。おびき出すには、空腹であればあるほど成功しやすいはず。食事を終えてしまってからでは、効果が薄くなるかも、と私は考えたのだが。さすがに今は絶対に無理そうだ。

私は改めて厨房内に目を向けた。

ケンタウロスのアントニオさんの目が血走っている。その上、彼の形相は凄まじく、今にも爆発しそうになっており、他の料理人たちを大声で怒鳴りつけている。その声をきいていると、どうやら、ちょっとしたトラブルがあったらしい。それが何なのかはわからないけれど、とにかく、今は邪魔できない。

「じゃあ別の場所で調理すりゃあいいじゃん。外で焼いたって肉は肉だろう?」

マツシモがあっけらかんと言った。私はそれを聞いて、ああ、そうかと思った。つまり、バーベキューにすればいい訳だ。そう思った後で、私は嘆息する。バーベキューってどうやるんだっけ。何か、それなりの、焼くためのコンロとかそういうのが必要になるんじゃないだろうか?

「そうだけど、どうやって焼くの? たき火で焼くの? ここにそれ用のコンロとか焼き網とか炭なんてあるの? 他にも色々必要になるんじゃない?」

大量のハテナマークとともに言うと、丁度マールが通りがかった。どうやら、他の魔物たちのところに料理を運んでいるようだ。彼女は厨房の前の廊下でたむろしている私たちに気づくと声を掛けてきた。

「あら、お妃さま、お帰りなさいませ! ご無事に帰ってきて下さったんですね。良かったですわ。……それで、そこで何をしていまするのですか?」

マールはふしぎそうに訊ねてきた。私はガーグやマツシモと目を交わしてから、言う。

「うん、ちょっと……無事に「プウペパペ」が手に入ったから、早速厨房をちょっと使わせてもらって焼こうかな、と思ったんだけど、今、すごく忙しそう。それで、外で焼こうかなと思ったんだけど、お城にそれ用のコンロなんてないでしょう?」

「ありますよ」

「……だよ、ってあるの！ 何に使うの？」

マールがあっさりと言った言葉に、私はびっくりした。何でもあるんだろう。いつも何か探していると、大抵のものは「ある」と言われるのだが、よもやそんなモノまであるうとは。私の驚いた顔を見て苦笑しつつ、マールは穏やかに答えてくれた。

「魔物たちが肉を焼いてパーティしたりするんですよ。わたくしも仲間とやったことがありますよ。いつもの物置に行けばあります。お持ちしましょうか？」

「いいの、あ、どこでならやっていいのかな？ だめな場所とかあるよね？」

火を使う訳だから、もしかしたら、と思って私は問う。

「ええ、でも城の南にあるお庭でしたら大丈夫ですよ。ガーグ、わたくしが用意している間に、お妃さまを南のお庭にお連れしておいで。あと、マツシモ様にはお手伝いいただけると助かるのですが？」

「仕方ねえなあ、でも俺は野菜しか食わないし、水紀、調理場から使っていてやってやつ貰ってきておいてくれよ。んじゃ、さっさと行って、魔王の馬鹿をおびき寄せることにするか」

そう言つと、マールとマツシモは移動魔法陣を出してその中に消えていった。残った私とガーグは、調理場に目を向けて、やや暇そうな料理人のひとりに声を掛けて、食材を貰うと、南の庭に向かっ

た。

「ここッスよ、今は結構花が咲いてて、見ごろッス」

「へ、へえ」

ガーグに連れられて訪れた庭は、正直言ってどこの密林だろうかと思わせるような場所だった。手入れはされているらしく、整然として綺麗で、足もとの芝生には枯れ葉一枚落ちていないが、問題なのは植えられた植物たちの方である。

ここに来るのは初めてなのだが、私は油断していた自分にげんなりした。

そうでしたここ魔界でした……。

城の目玉や、緑色の鬼火、生肉みたいな手すりには慣れたし、部屋に戻れば落ちつくことが出来る。それに、今日訪れたプペパポンペは、不気味ではあったものの、もともとが人間の世界にあった物だけあって、毒々しさとは無縁だった。

「うん、まあ、何というか、面白そうな植物ばかりだね」

私はあたりさわりのないことを言って、芝生の広がる場所にすでにコンロやテーブルを用意しているマールとマッシモ、周囲を跳びはねているクロスケと仲間の黒毬たちの側へ歩み寄る。周辺には緑

色や橙色の鬼火が漂っている。夜ともなれば、魔界もかなり暗くなるが、鬼火たちのおかげでよく見えるのだ。

コンロにはすでに炭らしきものが燃えて、もう焼き始められそうだった。

「お、やっと来たか」

マツシモが腕まくりして肉を捌いている。「プウペパプペ」はまだ動いている。

私はその光景から目を反らして、テーブルに野菜を置くと、いくつか取り出した。すでに洗浄してあるので、後は切るだけだ。ちゃんと、私も食べられるものを選んできた。野菜だけでなく、肉や、ナンのような平べったいパンも貰って来た。私は野菜を一口大に切っていく。マールは肉とともにそれを串に刺して、準備を整えた。ガーグは皿を並べたり、飲みものの用意をしている。

ほどなくして、準備は整った。

「さっそく始めますか？」

「うん、始めましょう」

私が言うと、マールが網の上にごごめく肉を置いた。しばらくして、南の庭には、香ばしい肉の焼ける匂いが充満し始める。私は、自分のわがままでここまで巻き込んだ皆のためにも、うまくいけばいいなと思いながら、肉が焼けていくのを見守った。

【47 どうしても……】

肉の焼ける匂いは、豚肉が焼けるのとあまり変わらない匂いがしたが、それよりもやや野性味を感じるような気がした。肉が焼けてくると、それを皿に取る。庭には、肉の焼けた匂いばかりが広がっていく。

全員が全員、息をひそめて辺りの様子をうかがう。はっきり言って、パーティをしている雰囲気ではない。けれど、特に何の反応もない。私はため息をつくとき、お腹に手を当てて、言った。

「ジエズアルドが来るかどうかは賭けみたいなものだし、とりあえず、私たちも食事にしましょうか。お腹がすいちゃった」

「ああ、そうだな。じゃあそれ、その野菜焼いてくれ」

マツシモが早速食いついた。私も、食べられるものを串に刺して焼き始める。

しばらくの間は、みんなでのんびり食事をする事になった。近況やら何やら、たわいのないことを喋りながら時間が過ぎていく。やがて、食事も終わりにさしかかった頃だった。近くの茂みが、青白い色に輝いた。

真っ先に動いたのはガーグだった。

「誰か引つかかったツス！ あっち！」

私はその言葉に、口の中のものを急いで飲み下すと、光った方向へ向かって走り、そこに佇む人影に向かって体当たりを食らわせる。

電光石火の勢いだっただ。我ながら、ここまでの素早さで動けるとは思わなかったものの、とにもかくにも、手ごたえはありだ。

「なっ……ぐあっ！」

うめき声とともに、私の下敷きになったのはジェズアルド当人だった。なんとというか、ずいぶんアツサリと引つかかったものだな、と私は呆れつつ、それでも逃がすまいとばかりに服にしがみつくと彼は驚きつつも、どこかばつの悪そうな顔をして私を見た後で、自分を取り囲むガーグ、マール、マツシモ、黒毬たちを見て、不機嫌そうな声を出す。

「お前たち、一体何をしているんだ。余にこんなことをして……」

「別にやりたくてやった訳ではございません魔王様。わたくしたちはただ、魔王様とお話がしたいというお妃さまの頼みを引き受けただけでございます。なぜ、そこまでお妃さまを避けていらっしやるのですか？」

マールが説明しながら問うと、ジェズアルドは微妙な顔をして、ため息をついた。

「そのためにわざわざ「プウペパプペ」をとってきたと言うのか……」

「そうよ。……ねえ、どうして避けてたか教えて。私が何かしたとか、良くないこと言ったとかだったら謝るし、言いたくない事情があるならそう言って……お願いだから、無視しないで」

私は真っ向からジェズアルドの目を見て言った。赤く、鋭い目。

最初に見た時はとても怖かった。だけど、こうして見てみると、血の色というよりはルビーの色だ。その色に、微かな恐怖が浮かんだように思えた。だけど、私は目を反らすことはしなかった。

「お前は何もしていない。余の問題だ……それより、どいてくれな
いか？」

「逃げない？ 本当に逃げない？ 私、話があるの。ロレンツイオ
に私が捕まる前の晩に、聞いてきたでしょう。ちゃんと考えて答え
を出したから、聞いて欲しいの……どうしても」

言いながら、目頭が熱くなってくるのを感じた。目の前の困惑し
た顔が、さらに困っていく。しばらくすると、それも歪んで見えな
くなった。そこで、私はようやく気づいた。ずっと、避けられてい
たことが悲しかったのだと。

「あゝあ、泣かせたな」

呆れたようなマツシモの声がした。マーラが深いため息をつく。
ジェズアルドからは、苦しげな呼吸音が聞こえてくる。私は必死に
目をぬぐって、視界を取り戻して言う。けれど、涙声になってしま
うのだけはどうにもならなかった。

「ごめん、泣くつもりはなくて……だけど」

「……いや、すまない。それでお前の気が済むなら、ちゃんと話を
聞こう」

ジェズアルドはゆっくりと体を起こした。私はその前に座り込み、
涙をぬぐう。泣くのは久しぶりだった。ずっと、誰にも弱みを見せ

たくなって、こらえてきたからだ。なのに、こんなにもあふれてしまうのは、少しずつ少しずつ、ここが自分の居場所だと感じるようになってきていたからなのだろう。

「お前たち、面倒をかけたな……少し、ふたりきりにしてくれ」

ジェズアルドが言うと、皆は音もなくうなずいて立ち去った。マールはきちんとコンロの処理をして、それから静かに立ち去る。座り込んでしまった私を、ジェズアルドはそっと抱きしめてくれた。

「頼むから、泣くな……悪いのは余だ」

私は必死に目をぬぐい、うなずきながら、何とか涙をとめようとする。触れる温かさが嬉しいせいか、なかなかとまらなくて、私は困った。やっと話を聞いてくれると言ってくれたのに。すると、穏やかな声が言う。

「ゆつくりでいい。時間はある……ただ、余が逃げていただけなんだ。また怖がられて嫌われたら、そう思うと、顔を見るのも怖くなつてな」

「魔王なのに……？」

私が鼻声で言うと、ジェズアルドは苦笑した。

「誰であろうと、友好を結ぼうとした相手に嫌われたり、恐れられたり、距離を置かれればつらいだろう。余は、何度も何度もそれを経験した。花嫁の件も……臣下たちが頼むから受け入れたが、最初は、お前をここへ連れてくるつもりはなかったくらいだ。また同じ思いをすることになるのは、嫌だった」

私は、ゆつくりと涙がとまるのを感じながら、初めて聞く彼の話
に耳を傾けた。

私の他の、九人の妃たち。

そのほとんどは、刺客だったり、スパイだったり、地位が目当て
だった。それ以外のひとには、怖がられ、ひとりには死んだ。最初は、
ひどくあっけらかんと語ってくれたので、もう過去の記憶になっ
ているだろう、と勝手に思ったけれど、違っていたのだ。

だから、私の言葉もすぐには信じられなかったのだろうと今では
わかる。

私は、改めてちゃんと言った。

【48 つながった気持ち】

「何度も言うけど、私は怖がったりしないし、もし怖くても逃げたりしない。すぐには信じられないかもしれないけど、いつかは信じて欲しい」

やや毒々しい植物が茂る南の庭を、風がさあっと吹き抜けていく。庭はとても静かで、風が葉を揺らす音しか聞こえない。

まだ声は震えていた。震えていようとどうしようと、私はかまわなかった。何度でも言うのだ。ちゃんと思いが伝わるまで。プペパポンペからの帰り道に思ったことが脳裏によみがえる。私には、今までここが本当の家だと、自分の居場所だと思えるような場所はなかった。

ここに来て、ゆっくりとだけ親しい仲間も出来た。

ここが、本当の家になったらいいのに。

近頃、そう思うことが増えていた。

「ここに来た最初の頃は、ただ訳がわからなくて、まわりは不気味なものばかりだし、人間はいないし、でも、あなたはずっと側にいて、ちゃんと私の言うことを聞いてくれた。どれだけ嬉しかったと思う？ 私ね、今までちゃんと話を聞いてもらえたことってないの……」

多分、誰かに本気でぶつかる勇気がなかったから……」

勇気がなくて、たくさんのものを失ってきた。

「だから、ちゃんと勇気を出すって決めたのに……いざ話そうとすれば逃げるし」

「すまない。気が動転していたのだ……」

弱り切った様子の子エズアルドを見て、私はささくれた気が持が消えていくのを感じた。本当は、その気持ちを早く教えて欲しかったのだけれど、どうしても誰かを避けたいとき、というのはあるものだ。その気持ちがわからない訳ではない。

「もういいの、謝って欲しかったわけじゃないから。理由も、教えてくれたじゃない」

言って、ほほ笑む。涙はとまり、嗚咽もおさまってきた。そしてようやく、私は自分の体勢に気づいて。少し慌てた。背中に回された手が熱い。私は恥ずかしさに、身じろぎしたものの、子エズアルドには離すつもりがないようで、腕に力がこもるのを感じた。

仕方なく、そのまま話をつづける。

「あの時私言ったよね、覚えてる？ ビビアーナさんのことが終わったら、ちゃんと答えを出すって言ったでしょう。だから、答えを出したの。聞いてくれる？」

「……ああ」

私は、静かにうなずいただけの彼の様子に、少しだけ落胆した。あれほど「好きだ」とくり返し言い、答えを催促しつづけた子エズアルドと、今私を抱きしめている子エズアルドは同一人物なのだろうか、と疑いたくなるほどの変貌ぶりだ。

息を深く吸って、私は答えを口にした。

「私は、あなたの妃になります」

しばらくの間、ジエズアルドは動かなかった。けれども、すぐに弾かれたように体を離し、私の顔を覗き込んで疑い深げに問う。

「今、何と言った？」

「え、だから……あなたのお妃になりますって」

言葉は最後までつづかなかった。またしても抱きしめられたからだ。私はあまりの勢いに、つい「ぐえっ」とあひるが鳴いたみたいな声を出してしまった。はたから見ればロマンチックな抱擁シーンなのに。抱きつぶされそうになるのも夢があつていいと思つてたのに。だけど、私はあまりの苦しさになんて馬鹿じゃなかった。

い、痛い。苦しい。さすがは魔王、なんて馬鹿力。あああ、背骨が背骨が……！

「は、離して……死ぬ」

私の呻きに気づいたのか、ジエズアルドは慌てて離してくれた。うっ、背中が痛い。

「す、すまない……つい嬉しくて。だが……その、本当に良いのか？ あれほど嫌がつていただろうに」

「そんなセリフをあなたの口から聞くとは思わなかったわ。事あるごとに妃になれ妃になれ、ならなくても魔界からは出さないうってく

り返してたのに。それはそうと、逆に聞きたいんだけど、私の顔を見ると過去の思い出がよみがえってつらいと言っなら、どうして、私のことを連れてくるつもりになったの？ そのうえ、指輪で行く場所制限したり」

ため息まじりに訊ねると、ジェズアルドは決まり悪そうにうつむいて、小声でつぶやくように言う。

「……が可愛かったから」

「え、なに？」

「笑顔が、可愛かったからだ。その……妃候補の娘は他にもいて、水晶玉を使って余がそのなかから選んだのだ。最初は、誰でもいい……さつさところへ呼んだ後で、やっぱりだめだったと言って追い払えば、臣下も何も言わないだろうと思ってな。だがその中にお前がいたんだ。」

つらい時でも、笑顔を絶やさなくて、どんなことでも全力で立ち向かう姿を見ていて、気づいたらお前をここへ召喚していたんだ」

私はその内容に顔を引きつらせた。つまり、ずっと生活を見られていたというのか。それじゃあ単なるストーカーじゃないかと思っ
た。

「目の前に現れたお前は、余を恐れるふうでもなく、礼儀正しく断つてきた」

いや、あの時は顔に出さなかっただけで、心の中では結構怖がっていたのだが……と思うが、私は口に出さない。ジェズアルドが、嬉しそうだったから。私は私で、彼が嬉しそうなのが嬉しいのだ。

こんなに温かい気持ちになったのは、本当に久しぶりだった。

「正直、断られたときはつらかった。それで、腹いせにここから出さない、帰さないと言ってやったんだ」

「ああ……そうだったんだ。あの、じゃあもしかしてあの口説き文句は全部本気だったの？」

「当然だ」

私は話を続ければ続けるほど脱力していくのを感じた。しかし、アレらのセリフが本気だったということは、これからも言われるのだろうか……。そう思いつつ、私は顔をあげて、空の異変に気づいた。

「……ねえ、もしかして曇って来てる？」

「そういえば」

ジェズアルドも顔をあげて、空を見た。いつもは赤みの夕焼けのような空なのに、明らかに灰色が混ざってきている。夕焼け空の写真に、灰色の絵の具をのせたかのようにだ。

私の心の中を、期待感が埋め尽くしていく。ずっと、不安だったのだ。その懸念が、晴れるかもしれないと思いつながら、空を見上げる。やがて、灰色の割合がどんどん増えていき、私だけでなく、魔界が待ち望んだそのときがやってきた。

【49 憂いは消えた】

遠くで、雷鳴がとどろく。強い風が吹きつけ、私はジェズアルドにつかまった。ざわざわと木々が揺れて、風に水気が混ざりはじめる。嵐の予感。私は、声を出すのも忘れて、空を見た。

やがて、ぼつりと私の鼻先に水滴が落ちる。

「……………降つ……………た」

「ああ、やっとだな……………これで、余の力も戻るのが早くなるだろう」
見上げたジェズアルドの顔は、嬉しそうだ。私も、心から嬉しい。これで、側にいられる。側にいる理由が出来たのだ。

「良かった。ずっとずっと不安だったの……………水属性だ、雨を降らせるために呼んだんだって言われたのに、全然降らなくて、もしかしたら追い返されるんじゃないかって思ってた」

口もとに手を当てて、目を細めて雨滴を感じながら私は言った。
心にかかっていた黒いもやが、きれいになくなったように清々しい。すると、ジェズアルドは手をのばして、私の頬に触れた。手袋に包まれた指が目もとにのびてきて、涙を軽くぬぐってくれる。

「そんなことを気にしていたのか？ 余は言ったはずだぞ。ここから帰すつもりはない、と。例えば雨が降らなくとも、お前が側にいれば少しずつ魔力のバランスは改善していくのだ。マツシモと戦ったときより、余は遥かに元の力を取り戻している。今なら、魔界のどの魔物も余に手出し出来ぬさ」

頬に置かれた手がうなじにまわり、また抱き寄せられた。私は、ジェズアルドの背中に手をまわして、そっとうなずいた。

信じていなかった訳ではない。ただ、やはり理由があれば安心感が違うのだ。私は、さらさらと降りだした霧のような雨の中で、言った。

「うん、あのね、すぐじゃなくていいから、いつかきつと、本当の姿を見せて。私、それでも逃げないから。だって、姿かたちは違っても、ジェズアルドはジェズアルドでしょう？」

「……ああ、わかった」

声には苦痛がひそんでいた。それでも、私は「良かった」と答えて、体を離れた。

「城の中に戻りましょう？ 風邪ひきたくないし……そうだ、これどうしようかな。せつかくとってきたんだし、良ければ食べて。夕飯、まだでしょ？」

私は立ち上がると、上に布がかけられたコンロを見やり、テーブル上の「プウペパペ」を手にとると訊ねた。すると、ジェズアルドはちよつと困ったような顔をした。

「食べたいのは山々だが、それを食べるには本性に戻らなければならぬ。その、置いておいてくれ、後でもらうことに」

その言葉は最後まで続かなかった。

なぜなら、私の持った袋から「プウペパペ」が飛び出したのだ。

そういえばこの肉のかたまり、動くんだった。

呆気にとられた私は、目が釘付けになったジエズアルドに気づいた。そのお腹が、きゆるきゆると鳴る。良く考えてみれば、彼はまだ夕食にありつけていなかった。

「あの、さっき言っただけで、私は大丈夫だから、食べて？」

「しかし……」

「いいから！ ううん、むしろいい機会よ、早くしないと逃げちゃう！ ねえ、私を信じられないの？ せっかくあなたのためにとつて来たのに……」

そう言っただおおっている間にも、「プウペパペ」はもりもりと大きくなり、人形ヒトガタになって、のそのそと歩きはじめる。ジエズアルドは、私と「プウペパペ」を交互に見やり、腹に手を当てたあと、真剣な表情で言った。

「わかった、水紀……お前を信じることにしよう」

そう言つと、彼の身体を妖しいが美しい、紫の霧が包みはじめる。その霧は、きらきらと輝く光の粒をまき散らしながら、一気にふくれあがった。ジエズアルドの身長の三倍ほどまでになる。

その中から、ぐるるといふ唸り声が出た。

私は、口を大きく開けて、やや間抜けな顔になった。

現れた獣は、想像通りのもので、背すじを悪寒が走り抜けた。今すぐ、ここからまわれ右して逃げたい欲求に駆られる。それは本能的な恐怖だった。私は、自分の心と戦った。逃げちゃだめ、と自分に言い聞かせて、足から力が抜けそうになるのを抑える。

それから、じっと眼を見た。

六対の、赤い深紅の眼。まなこ

血の色に思えたが、やがて、その瞳が優しく、不安にかけついでるのに気づいた。

歩くと地面が揺れる。彼は、ゆっくりと三つの首をめぐらせて、植物の茂るなかに姿を消しかけていた「プウペパペ」を頭からがぶり、とかじった。かなり衝撃的な光景だった。私は、ようやくそれを見て、ミレーヌの見た光景が何なのか、はっきりと理解した。

何となくわかってはいたが、こうして目の前で見ると、彼女の恐怖が理解できる。

彼は、肉を前足で押さえて引きちぎり、食べる。嫌悪感を感じない。血は出ないし、内臓もないし、何しろただの肉のかたまりで、動物の姿もしていない。なので、テレビで見る、肉食獣のお食事のような感覚はない。私は、少し離れた場所から観察する。

前足で「プウペパペ」をはさみこみ、座り込んで肉を噛み始めた彼が、満足そうに目を細めるのを見て、自然とほほ笑みがもれる。美味しいのだろう。ロレンツィオの言っていたことは嘘ではなかった。

私は、そつと足を踏み出した。食事をしているジェズアルドに近づき、首のひとつに手を伸ばす。彼は身じろぎひとつしない。触れると、なめらかな毛の感触が心地よい。そのまま、頭をなでつづけて、しまいには抱きついた。ジェズアルドの体が、びくりと反応した。けれど、私が動かないでいると、体の震えがおさまってくる。

ケルベロス姿の彼は、想像よりも遥かに綺麗だった。見た目は、確かに怖い。真っ黒の毛皮に、炯々と光る紅の目。しなやかな体つき。首が三つあり、口からは火が吐き出せるらしく、肉の焦げた匂いがただよいはじめる。私は、毛に顔をうずめたまま、言った。

「ね、怖がらなかつたでしょう？」

『ああ……そのようだね……これで、余の憂いは全て晴れた。水紀……愛しているぞ。それから、肉をありがとう。久しぶりに、生の肉を食べられた……』

人の姿のときとは違う、重々しくくぐもった声が、脳に直接響く。これが、こちらの姿のときの彼の声なのだ。初めて聞いたその声も、私にはとても心地よかった。

「……私も、愛してる。ゆっくり食べてね」

そう答えると、彼は満足そうに食事をつづけた。雨はまだ降っている。けれど、毛皮は雨を弾くらしく、ジェズアルドの側にいるとあまり濡れなかった。しばらくそうしていると、魔物たちが外に出てきた。彼らは口々に雨を喜び、私とジェズアルドの姿を見つけると、驚いたような声をあげた。

「おお、あの娘、魔王様が本性を出しても恐れないようだぞ、これ

はめでたい！」

「まさに。これで魔界もうるおうことだし、今夜は飲みあかそうぞ」

魔物たちはそう言いながら、雨を喜び、城の中から漏れでる明かりがいつそう強くなる。鬼火たちは、頼まれるとその体を大きく出
来るのだ。

他にも雨に気づいた者たちが現れて、歓声がわく。

私は城から奏でられるその声や音を聞きながら、ジェズアルドが
食事を終えるまで、黙って彼の側に続けた。幸福感で、心のなか
がいつぱいだった。

【50 使者を待つ間】

外ではしとしと雨が降っている。

驚いたことに、ずっと夕暮れみたいだった空が、白みを帯びた夕方の方に近い色になってきていた。ジェズアルドによると、もう少しして完全に魔界の魔力のバランスがとれれば、人間界と同じような青空と雲が広がるようになるとのこと。

私はそのときを楽しみに、久しぶりに広間へと向かった。

何でも、風魔扇の修理が終わったのだそうだ。送り出した使者を広間で迎えるため、私はバルト、ガークとともに移動魔法陣をくぐった。時刻は午前十時。広間へつくと、その明るさに目がくらむ。どこか墨を流したような薄暗さがあった魔界だったのだが、今では曇りの日なみの明るさがある。

ジェズアルドはすでに玉座につき、物憂げに私たちと使者を待ちかまえていた。入ってすぐの右側には、いつもの面々が控えている。今でこそ慣れたものの、最初は見てくれが怖くて仕方なかった魔物たちだ。まあ、戦ったらすぐく強そうではあるのだけれども。

改めて、玉座の方へ視線を戻す。

相変わらず、様になっているなあと思いつつ見ていると、目が合った。ジェズアルドは嬉しそうに笑顔を浮かべる。私は思わずたじろいだ。魔界に雨が降ったのはおととい。それ以来、視界の端の隅っこにも入らないくらい私を避けていたのがウソみたいに、時間に余裕さえあれば側にいるようになった。

しかも、甘い顔で、甘い言葉を大量にかけ流しの湯のごとく浴びせてくるため、私はいたたまれなくてたまらない。

いや、嬉しい、嬉しいんだけど……物事には限度というものがあると思う。

私は微妙に顔を引きつらせつつ、玉座に向かうと、ジエズアルドの隣に立った。そんな私を守るように、バルトとガーグが後ろに控える。

「今朝は一緒に食事できなくてすまなかったな。たくさん報告を受けることになったしまったのだ」

「報告？ 風魔扇のこと以外にも何かあったの？」

声に不安を忍ばせて、私は訊ねた。

「ああ、雨が降り出したからな。魔界も変化を始めている。どこでどのような変化が起こったか、その報告がたくさんあったのだ。このガズルラーヴ周辺がもとの姿を取り戻す日も近いだろう。本来、ここはこのような姿ではなかった。もっと緑あふれる、過ごしやすい場所で、人間たちの暮らすところとそう違いはなかったのだが、今は余の出身地である火山地帯、ヴルカーニアそっくりになってしまった。全ては、バランスが崩れて余の力が強くなりすぎたせいだ……そのことが、かえって魔界と繋がりを持つ余の力を弱めたのだ」

初めて聞く単語に、私は首をかしげた。そう言えば、ジエズアルドの過去や出身地や、どういう人生（いや、魔物生かな？）を送ってきたかという話はあまりしたことがなかった。私には色々と聞い

てくるが、彼が語りたがらなかったためだ。

「そうだったの。それで火山があんなに噴火してたり、恐竜みたいなのが飛んでたりするのね」

私は感慨深げにつぶやいた。そこで、ふと疑問を覚える。

ジェズアルドは、もう妃を迎えるのは嫌だと言っていた。過去の経験からして仕方ないと思うのだけど、それだと、バランスは崩れたままだったということになる。もしそのまま行ってしまったら、ここはどうなっていたのだろう。

「あの、ここで聞くことじゃないとは思っただけど、妃がいなくてバランスがとれないんだったら、もし私が見つからなかった場合はどうしてたの？」

「その場合は、余が死ぬことになる。魔界の均衡が崩れれば、それはそっくりそのまま魔王に跳ね返るからな。力の弱まった魔王は、もはや魔王ではない。いずれは、魔界に飲みこまれる。そうなれば、次の魔王に代替わりするだけのことだ」

ジェズアルドはさらりと言った。しかし、私は驚きに目を見開いた。

「じ、じゃあ私がいなければ死んでたつてこと……？」

「そうなるな」

自分のことなのに、まるで他人が死ぬと聞かされたみたいな反応をするジェズアルドを見て、私は思わず怒鳴りたくなった。そこを何とかこらえて、低い声で、ちよっと恨みがましく言う。

「そういう言い方しないでよ、悲しいじゃない」

「そうですぞ！　ですから我々はお妃さまをなんとしてでもお持ちになって頂こうと腐心したのです。ようやくお妃さまを見出すことができて、我らは喜んでいるのですぞ！」

バルトが、私の言葉を受けるように叫んだ。相変わらずの大音量なので、耳が痛い。だけど、この時ばかりは耳の痛みよりも、言ってくれてありがとうという気持ちが勝った。側近たちにも話が聞こえていたのか、その通りだという声があがる。

「そうツスよ、オレたちは魔王様の統治する魔界が好きなんス！」

ガーグも後ろに控えることを忘れて、ジェズアルドの側へ行き、非難をこめた目で彼を見る。

「わかったわかった！　だから余はこうして水紀を連れてきたのだ。起こらなかつたことについて責められても困る！」

ジェズアルドは困惑したように声を大きくして言った。私はその様子に、つい笑みをこぼしてしまった。なんとというか、愛されているのだと思う。魔王という呼び名のもつイメージがことごとくくつがえされていくのが、何だか楽しい。

こつそり笑いをこらえていると、広間の入り口から大きな声が上がった。

「魔王陛下！　アレグラ、ただいま戻りました」

【51 戻ってきた封魔扇】

声は女性のものであった。彼女はきびきびとした足取りでこちらへ歩いてくる。

その姿はすらりとした人間の女性と良く似ており、非常に美しい。ただし、髪の色は淡い空色で、露出した腕の皮膚の一部は光沢のある浅葱色のうろこに覆われていた。また、丈の長い青の衣服をまとっており、その姿は、女性が男装したような独特の凛々しさとさわやかな印象を抱かせるものであった。

「戻ったか、アレグラ。それで、品はどうなった？」

「はい。ここに……それと、御所望のもうひとつの品も購入して参りました」

女性、アレグラはそう言うと、大きな木箱を開けてジェズアルドが見えるように捧げ持つ。その中に納められていたのは、ハリセンではなく扇子だった。けれど、私はそれを見て顔を引きつらせる。というのも、その扇子、ものすごく派手だったのだ。

軸となる骨の部分は、黒くなってしまったハリセンを固めたような漆黑。その骨に金で四角い模様がちりばめられた紙が貼りつけられ、洪くて美しい。まあ、女性が持つにはどうかと思えるデザインではあるけれど、それだけなら扇子として問題はない。

問題があるとしたら、貼られた紙の部分に書かれている「愛」の字だった。

「かの細工師は最近戦国武将に興味をお持ちとかで、このようなデザインにしたとのことです。また魔王様とお妃様への祝いの言葉として？愛？という字を書いたのだと言っておられました」

「ほう、なるほど。それは嬉しいことだ……水紀、受け取ってこい。あれはお前のものだ」

とろけるような笑顔で言われ、私は口から飛び出そうになった言葉たちを押しこめた。

が、押しこめた言葉たちは心の中で大ブーイングを唱える。

いや、アレ絶対ジエズアルドが持ってた方が似合うよ絶対。私なんか持ったら違和感が半端ないと思うんですけど……？と
言うか、その細工師とやらには一度是が非でも会ってみたいよ。今
回は何なの？ またテレビなの？ テレビなんだろうなきつと、そ
うなると大河ドラマ？ 他に考えられないから大河ドラマなんだろうな……。

浮かびまくる突っ込みの波を泳ぎ切り、私は必死にとりつくろった
笑顔を浮かべる。だって、ここで拒否してジエズアルドに嫌な思
いをさせたくはない。そうじゃなかったら文句のひとつやふたつは
言っているところだ。私は笑顔のまま、何とかうなずいた。

「わかりました」

私は高段から下りて、箱から派手派手しい扇子を手取る。作り
は私みたいな素人でもわかるほどに繊細で素晴らしい。ただし、趣
味は悪いと思う。これならまだハリセンの方が良かったです。などと
思っていると、アレグラは扇子の入っていた箱をしまい、今度はず

いぶん細長い箱を取り出した。

「こちらも、魔王様からお姫様へのごことでございます。いかが致しますか、魔王様からお渡しになられますか？」

「いや、構わない。水紀、それもお前のものだ。少し前に相談されたロレンツィオについて、余が出した結論がそれだ。封魔扇と同じ細工師の作でな、それを身に着けていれば、奴はお前の側には近寄れないはずだ。結界の術は施してあるから、かぶれたりもしないだろう」

ジェズアルドに言われて、私はアレグラの持つ箱の中を見た。そこに入っていたのは、ペンダントだった。トップは十字架で、中央に青い石がはめ込まれている。それを見て、何だか色々もらってばかりだな、と私は思いながら私は訊ねた。

「これで、ロレンツィオを小瓶から出しても大丈夫になるの？」

小さなペンダントトップには、きらめく銀色のチェーンがついていて、手に取るとさらさらと鳴る。こちらは繊細で流麗な作りだ。これほどの物が作れながら、どうして封魔扇でだけは遊び心を爆発させるのか。やはり理由を問いただすために、その細工師には会うべきだと私は強く思った。

「ああ、余としても、奴に借りを作ったままなのは嫌なのでな」

そう告げるジェズアルドの声には、不満があった。本当は出したくないのだろう。何しろ、ビビアーナの件にはじまり、こちらにかなりの危害を加えた魔物だ。しかも、腹の中で何を考えているのか読めないため、信用することも出来ない。

「そうね、でもこれがあればまた封印できるもの。マツシモと同じで、魔力は半減するんでしょう？　だったら、ジェズアルドだけじゃなくて、バルトもガーグもいるんだから、平気よ」

私は言っつて、封魔扇を広げた。うん、やっぱり恥ずかしい。飾っておく分にはいいんだけど、使うとなると微妙な気分だ。

すると、広間の入り口からこちらをのぞく影が見えた。見知った顔だ。ジェズアルドを振り返ると、彼も気づいたのか、大き目の声で呼ばわった。

「アントニオ、そんなところにいないでこちらへ来たらどうだ？」

その声に、素早く反応したのはケンタウロスでガズルラーヴ城の料理長、アントニオ　ではなかった。もの凄い早さで振り向いたのは、アレグラの方だ。手に持った箱をその場に置くと、彼女はジェズアルドに一礼してから、広間の中央へと小走りで向かう。アントニオも四本の足で駆けより、ふたりはひし、と抱き合った。

「ああ！　あなた、会いたかったわ！」

「僕もだよ、ハニー！」

私は呆気にとられて思わずジェズアルドを見た。彼は実に楽しそうな顔で説明してくれた。

「彼らは夫婦なのだ。ついでに、アレグラはかつての余の妃候補だった。魔界ではもう数人しかいない水属性の魔物だったのだが、ここに来て数日でアントニオと恋に落ちたのだそうだ。ふたり揃って

死にそんな顔でそのことを告げに来た時のことはよく覚えているが、大切な部下が幸せそうなのは余も嬉しい。いつか水紀ともあのくらい愛し合いたいものだな」

「そ、そうですね……あはは」

私は嬉しそうに抱きあうふたりを眺めながら、ジエスアルドのセリフを聞いて乾いた笑い声をあげた。そして、内心ごめんなさいと謝る。だって、あんなに恥ずかしいことを人前でなんてきつと絶対一生ムリだ。とてもではないが出来そうもない。今でさえあの夜以来、まともに顔を見るのも恥ずかしいのに……。

私は背中に突き刺さるジエスアルドの視線に気づかないふりをして、つっ、言った。

「じ、じゃあ早速ロレンツイオを出してあげなくちゃね」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5809t/>

雨花の花嫁

2011年10月8日07時04分発行